
魔法先生ネギま！ ~落ちこぼれと呼ばれた英雄の子~

夜半

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！（落ちこぼれと呼ばれた英雄の子）

【Zコード】

Z0328Q

【作者名】

夜半

【あらすじ】

かつて魔法世界を二分した大分裂戦争を終結へと導いた英雄ナギ・スプリングフィールド。彼には双子の息子がいた。兄はその魔力、才能から天才と呼ばれた。片や弟は親をもしのぐ魔力を有していたが、一部しか魔法が使えなかつた。その少年の名はリアン・スプリングフィールド。少年は『落ちこぼれ』と呼ばれていた・・・。

この作品はネギの双子の弟が主人公の一次創作です。なお、更新は不定期になります。

プロローグ

イギリスはウェールズにあるメルディアナ魔法学校。この学校の大ホールに於いて、恒例の卒業式が執り行われていた。ホールの一番奥には学園長と思しき人物がいて、その正面に7人の子供が横一列に並んで、卒業証書を今か今かと待ちわびていた。

「メルディアナ魔法学校卒業生代表！ネギ・スプリングフィールド！」

「ハイ！」

薄暗いホールの中を一人の少年が緊張した様子でゆっくりと進んでいく。彼こそ大戦の英雄ナギ・スプリングフィールドの長子である。首席ということで卒業生を代表して証書を受け取る。その瞳は、これからへの未来を想像し輝いていた。

SIDE リアン

今、壇上で卒業生代表の挨拶をしているのは英雄の息子、皆が期待を寄せる首席卒業のネギ・スプリングフィールド。私の双子の兄です。期待に目を輝かせ、緊張しつつも堂々とあいさつをする姿には

周囲の教師や来賓の方達も期待の目で見てています。

単純な学力のみでしたらあそこにいるのは私です。座学の成績は、私は兄にも負けません。それなのになぜ兄が首席かというと、私が魔法を使えないからでしょう。いえ、少し語弊がありますね。私は身体能力の強化など精靈の力を借りない魔法しか使えません。これらの魔法は儀式魔法と呼ばれるものです。

これとは別の精靈にその力を借りる魔法が使えないんです。何故か分かりませんが、私には全ての精靈の加護がないんです。故に精靈の加護が必要となる攻撃魔法といった部類が全く使用できません。対する兄は全ての分野の魔法にその才能を見せていて、頭は良いが一部しか魔法の使えない弟と頭も良く魔法の才能も豊かな兄。比べれば当然、兄に期待がいくに決まっています。

そしてその兄と比べられ、私は『英雄になれない落ちこぼれ』と呼ばれているようです。私は全く気にしていません。期待されすぎるところなことがあります。

パチパチパチパチ・・・・・

どうやら兄のあいさつが終わったようです。一瞬兄と目が合いましたがすぐにそらされました。兄は一部しか魔法の使えない私に学力が負けているのがプライドに障るらしく、私と兄の関係は良好とはいません。大きな原因として私が両親をどうでもいいと思つているのがあるみたいです。

「以上で、メルディアナ魔法学校卒業式を終了する！」

学園長の言葉で卒業式は終了した。さて、証書をもらつて帰りますか。ここにいるのは疲れますし・・。

主人公設定

名前	リアン・スプリングフィールド
身長	ネギと同じ
性格	冷静 現実主義 合理主義

ナギとアリカの息子。容姿は、ネギがナギに似ているのに対し、リアンはアリカに似ている。金の髪を腰ぐらいまで伸ばしている。顔は10人中10人が振り向くイケメン。

話し方は私口調で丁寧な言葉使いをする。魔力はネギの数倍あり、ナギよりも多いが、何故か精霊の加護が全くなく一部の魔法（身体強化や封印、結界など）しか使えない。もちろん初歩の魔法の射手すら使えない。しかし、直接魔力を武器とする方法を独自に編み出しており、かなりの戦闘能力を誇る。

頭はネギよりもいいが、その魔法が使えないが故にネギと比べられて『英雄になれない落ちこぼれ』と言われている。だが本人は気にしていない。『偉大な魔法使い』には全く憧れておらず、夢は故郷の人々の石化の呪いを解呪することである。自分を利用されることを特に嫌っている。

なお、ネギとは疎遠になっている。

第一話 修業先は日本

SIDE リアン

「ただいま・・・」

誰もいない家に私の声がむなしく響く。卒業式を終えた私は誰とも話すことなく自宅に戻つてきました。私はメルディアナ魔法学校からさほど離れていない山の中に一人で住んでいます。あの兄と一緒に生活するなどあり得ません。一応ネカネ姉さんという保護者みたいな人はいますが、彼女はネギと一緒に住んでいます。

寂しくはないのか？はい。別に寂しくありません。むしろこの環境はありがたいです。石化の研究もしやすいですし、なにより修行もしやすいです。

攻撃魔法の類が一切使えない私は、それを理解したときから自分の身体能力を限界まで鍛えることにしました。同時に身体強化の魔法の精度を上げるように修行も始めました。

攻撃魔法が使えない私の武器は己の肉体です。己の身体を武器とするしかない以上、その武器を徹底して鍛え上げればいいだけです。それと同時に私の莫大な魔力をどうにか攻撃に使えないかも研究しました。

その成果として魔力に形を持たせることが可能になりました。簡単にいえば魔力を具現化し、それを剣の形に圧縮し固定する。これにより魔力の剣が創造できます。幸い私は魔力のコントロールに長けていたようです。これが出来てからは一足飛びでした。独学で浮遊

術や瞬動術も会得しました。

うぬぼれというわけではありませんが、並の魔法使いでは私の相手にはならないと思います。

話が長くなりました。さて、時間的にも夕食の時間なのでその準備を始めましょうか。

「確かにまだ昨日の残りがあつたと思つんだけど・・・」

冷蔵庫の中を見ている時でした。家のドアを誰かがノックしていました。来客のようです。

物好きな人もいるものです。こんな私のところに来るなんて・・・。

「はい。どちらがまだしょうか?」

「ドアを開けたそこにはいたのは・・・

「やつぱつ！」おつたか・・・

校長でした。先ほじまでの威厳溢れる姿とは違い、包み込むような

オーラを携えた校長でした。一応一家の中に招き入れます。

「卒業式が終わるなりすぐに帰りおつて、おかげでネカネが随分と
搜しておつたわ」

「あれ以上、あの場にいる必要がありませんので、帰りました。特
に問題はないと私は思いますが。・・・それで用件は何でしょうか?」

「わづ、邪険にするでない。それで、修業先はどうになつた?」

そういえばそうでした。卒業証書に今後の修業先が出てくるんでし
た。どうでもいいですがね。

「え・・・つと、『日本で教師をする』ことですね。・・なんの『凡
談でしようか・・・』

卒業証書に浮かびあがつたそれに疑問を通り過ぎて呆れてしまいま
した。数えで10歳の私に教師なんかできるはずがないでしょう。
そもそも教員免許を持ってないですし。

「ホツホツホ。ネギと同じ内容か・・・」

そう笑う校長に怒りを感じます。それを聞いて大体読みました。

「英雄の息子は一力所に集めた方が都合が良いということですか。・
・腹が立ちますね」

「やううう深く考えずともよい。卒業証書にそう出した以上それは決定じ
や。それにお主達が行くであろう場所の学園長は儂の友人じやから
安心せい。それにこの修行を機に兄と仲良くしてみてはどうじや?」

「無理ですね。そういうといわれても拒否します。アレは私とは相
容れません」

「ううう。私と兄では根本的な考え方が違う。ましてや、6年前のあの
雪の日から田を背け続けている兄なんか、顔も見たくないのが本音
ですし。一応公私は分けますけどね。」

「・・・まあ必要ならそれ相応の対応はしますが必要以上の関係を
築くつもつはあつません」

「やううか・・・」

ひどく残念そうな表情を校長はしていますが気にする必要はありません。
現実を見ず虚像を追うだけなら馬鹿でも出来る。しかもそ
する」とで周りからもてはやされるなら、最早それは罪。

私はたとえ愚者と罵られようとも現実を見て行動する。これは私の誓いでもあり、あの雪の日を戒めとする決意もある。

第一話 麻帆良学園都市

SIDE リアン

時が経つのは早いもので、私の日本への出発の日がやつてきました。私は兄よりも早く日本へ向かいます。修行開始の日は約一月半後です。このような日程を組んだのにはちゃんと訳があります。見ず知らずの土地に行つてすぐに教師をしろと言われても出来ないので、早めに行つて、現地の環境や自分が教師することになる学校を見ておきたいと考えたからです。この旨を校長に言ったところ先方と話をしてくれてOKが出ました。故に今日この日にイギリスを出発します。ちなみに出発の日程は誰にも言つていません。一応校長は把握しているでしょうが・・・。なので見送りもいません。いつものことです。一人は慣れています。

「さて、そろそろ時間か」

腕時計を確認して、飛行機の搭乗時刻を確認して私はそこへ向かいます。

「リアン――――！」

大きな声で私の名を呼びながら走つて来たのはネカネ・スプリング
フィールド。私の姉でした。姉さんは私の前まで息を切らして走つ
て来ました。

「どうして、今日出発するつて連絡をくれないの？」

若干声に怒りの色が混じつていますね。・・・当然といえば当然で
すが。

「姉さんは、兄さんの子守で忙しいでしょう？私は自分の事ぐらい
一人で出来ます。今までも・・・そしてこれからも」

「そんなこと言わないで。一人じゃ寂しいでしょう？」

「寂しいなら今まで一人でやつてきてません。それに一人だからこ
そできることもあります」

「これは事実。ですが・・・

「姉さんには感謝しています」

あの雪の日まで私の面倒を見ててくれたのは誰でもなくネカネ姉さん。
その恩を忘れるほど私は馬鹿ではありません。その後も何かと気に
かけてくれました。しかしそれに甘え続ける訳にはいかない。だか

ら私は一人で進みます。

「私は一人でやつていけます。いや、やつて行かなくてはなりません。むしろ姉さんは兄さんについてやつてください。あれは未だにあの日から目を背け続けています」

「やつぱり、ネギとは仲良くできない……？」

「それは無理ですね。いくら姉さんのお願いでもそれは聞けません。むしろ一方的に向こうが拒絶している状態ですし。なぜ偉大な父親を捜さないのかってね。そんな余裕があれば村の人を治す方法を探せばいいのにね。禁書庫に入り浸るよりもね」

互いに折り合つことのない会話は飛行機の出発アナウンスによつて終わりを告げる。

「・・・時間が来たからもう行くよ」

「リ・リアンツー！」

「なんですか？」

「・・・元氣でね」

その声は消え入りそうな声でした。本当はもっと話したいことがあつたんでしょう。ですが時間は待つてはくれません。

「・・・うん。姉さんも元気でね」

だから今は出来うる最高の笑顔で返しましょう。こんなことをする
のはいつ以来でしょうか。まあ、たまには良いでしょう。

私は姉さんに見送られて飛行機へと乗り込みました。

SIDE 三人称

リアンが向かう麻帆良学園。これは明治中期に創設され幼等部から
大学部までのあらゆる学術機関が集まつてできた都市。これらの学
術機関を総称して『麻帆良学園』と呼ぶ。

一帯には各学校が複数ずつ存在し、下記都市機能を含め、同じ敷地
内に大学の研究機関も同じ敷地内にあるため、その敷地面積はとて
も広い。また多くの生徒が在籍していることもあり、毎朝の通学ラ
ッシュは鉄道・道路ともに大混雑を極め、多くの生徒が走つて登校
している風景は名物となつていて。

そんな学園都市の中にある一つの学校。麻帆良学園都市の最奥、女
子校エリアにある学校『麻帆良学園女子中等部』。その学園長室に

一人の老人と、一人の成人男性がいた。

「明日にはリアン君がここに到着するそうじゃ」

「そうですか。・・・懐かしいですね。彼と会うのは何年ぶりだつたかな・・・」

老人は近衛近右衛門。ここ麻帆良学園都市の学園長にして、学園都市を本拠地とする魔法使いの団体、関東魔法協会の理事長も兼ねている。片方の成人男性は高畑・ト・タカミチ。リアンの父親、ナギ・スプリングフィールドとも行動を共にしていた人物である。

「メルディアナの校長からの資料じゃと、学力はネギ君よりも良いみたいじゃの。ただやはり魔法は使えない・・・か」

「それに、他者との関わりを極端に避けているみたいですね」

「兄のネギ君とも同様みたいじゃの。原因はあるの襲撃事件らしいの。まあ2人でクラス運営に携わればそれも解消できると思うが・・・」

実際に見当違ひな会話を続ける二人。リアンの目的・目標についてはメルディニアナからの送られた資料には記載されていない。当然である。リアンが石化の呪いについて研究していることは誰も知らない。実際一人の手元の資料にも書かれているのは、学校での成績・性格や、学校近くの山に一人で生活しているといった事だけである。そしてリアンがただ修行の為だけでなく、ある目的をもって来日する

ことを知らない。

これが後に波乱をもたらすことはまだ誰も知らない・・・。

第三話 到着！麻帆良学園

SIDE 木乃香

こんにちは～。ウチの名前は近衛木乃香や。ここ麻帆良学園にある女子中学校に通う中学一年生や。今日は土曜日で学校はお休みや。天気もええし、どっか遊びにいこうかなと思ってたんやけど、なんやおじいちゃんから新しく麻帆良に来る人の出迎えに行つてくれへんか。って言われて、今は駅に向かつてる最中や。

「もう、せっかくの休みの日なのになんで学園長先生のお客さんの迎えに行かなきやならないのよーー！」

「ええやんか、明日菜」と、七明日菜は驚いたことない顔で

「うーん、さあここから何がいい？」

そしてウチの隣を歩いているのが神楽坂明日菜。ウチは明日菜言つてゐるよ。明日菜とは同じクラスで、寮も同じ部屋や。せつかくやら明日菜も連れ出したんや。うん。ウチええ事した。いつこいつええ事したときはなんかええことありやうや！

「さて、そろそろ降りる準備をしなきゃ……」

ロンドンから飛行機に乗つて日本へと降り立ち、そこから電車を乗り継いできました。そしてそれももうすぐ終わります。正直疲れました。まさか移動にこれだけ疲れるとは思いませんでした。しかし実際に楽しいものでした。

今までの私の世界は森の中の自分の家と修行をしていた森と魔法学校しかありませんでした。本当はもっと多くが私の目に映っていたのでしょうかけどそれを見る余裕がありませんでした。

しかし、一歩その世界から飛び出すと世界は思つた以上に色鮮やかで目が奪われました。これまで私は小さな世界で生きていたのだと実感しました。

『次は、麻帆良、麻帆良。お忘れ物にご注意ください』

勉強した日本語もしつかり使えてますから、とりあえずは大丈夫でしょう。

「よしと……」

持つてきた荷物を全て手に持つて、電車の降車口へと向かいいます。確か駅に着いたら、駅出口の銅像で待つていれば良かつたんですね。そこからは麻帆良学園の迎えの人があなたが来てくれるのでしたね。

『「乗車ありがとうございました」』

空気が混じったような機械音と共に電車のドアが開きました。さて、これが私の夢への一歩目です。・・・待つてください皆さん。私は必ず皆さんのお問い合わせを解いてみせます。例え、その道が茨の道でも私は迷いません。

電車を降り、駅を出た私は待ち合わせの場所の銅像の元で迎えの人を待ちます。今日は土曜日で学校も休みとすることもあり、私服姿の学生と思われる生徒達が思い思いに過ごしています。ただ、その生徒達がみんな女子生徒というのは何故でしょうか？

ただでさえ私は今日立つ格好をしているのに、これでは尚目立つてしまします。まあ、迎えの人は探しやすいでしょうけど・・・。

「あの～・・・」

到着して五分ぐらいした頃でしょうか、私の背後から声をかけてきた人がいました。十中八九迎えの人でしょう。そしてふり向いたそこには、一人の少女、といつても私より当然年上ですが・・・。まあ、一人の女子生徒がいました。

「もしかして、迎えの方ですか？」

「そういって『お嬢ちゃん』はリアンちゃんでええのかな？」

「あ、お嬢ちゃん！？？？確かに私はそう見えない事もあります。しかし初対面の人にはいつ言われるとさすがに……。

「はい、私の名前はリアン・スプリングフィールドです。それと申し上げにくいのですが私は男です」

「そつかそつか…………つて、ええええええ！」？

「うわ…………。これで男の子なんて反則よ…………」

「これはショックですね…………。今度髪を切りましょつか…………。

SIDE 木乃香

ウチと明日菜が駅に到着したときには待ち合わせ場所の銅像には一人の女の子が待っていました。

「なつ！？お客さんって子供じゃない…………」

「えらい、かわいらしい子やな」

そういうえば明日菜は「子供、本人曰くガキンチョが嫌いゆうてたな。
まあそれはおいといて、まずは声をかけんとな！」

「あの～・・・」

さすがに女の子とはいえた対面の子に話かけるんは緊張するな。ウ
チの呼びかけに気付いたのか女の子はウチの方に振り向いてくれ
た。

ほわあ～。遠くから見ても綺麗やつたけど、近くから見たらもつと
綺麗やなあ。外人さんみたいやけどお人形さんみたいや。

「もしかして迎えの方ですか？」

「どうやら間違いないみたいや。やけど思つてたより声がなんか低く
ないかな？まあええわ。こっちも確認せんとな。

「『わうじゅ』お嬢ちゃんはリアンちゃんでええのかな？」

なんやウチ変なこと言つたかな・・・？

「はい、私の名前はリアン・スプリングフィールドです。それと申し上げにくいのですが私は男です」

うん。間違いなかつた。リアン。スプリングフィールドっていうんや。それにこの女の子は実は男の子やつて・・・

「そつかそつか・・・・・・つてえええええ！？」

「うそ……。」それで駄の子なんて反則よ……」

思わず大声をあげてしまつた。せやけどこれで男の子は反則や。明日菜も同じ事思つてたようやし。でもやつ言われると確かに女の子にも見えへん」とはないけど、男の子いうた方がしつくりくるな。

「あの・・・。失礼ですがお名前はなんと?」

しもた！ウチらまだ自己紹介してへんわ。

「ウチは近衛木乃香や」

「私は神楽坂明日菜よ」

「近衛さん、神楽坂さんですね。わざわざあつがといへりぞれこせや」

そう言つてコアン君はお辞儀をした。しつかりとした声やなー。両親がこいつたことに厳しくやるか?

「ええい。ウチらも今日は暇やつたし。それよつロメンな。女の子かと思つて……」

まおは謝らんとあかん。いくら子供でも駅の子を女の子に間違つては失礼やし。

「こえ、氣にある必要はないですよ」

うーん。こいつたとこもしつかりしとるな。ウチらよつしつかりしとるやうかなー。どりあえやおじこわやこのとこに行かながら話をしたりええか。

「ほな行こか。話は歩きながらでもできるしな」

SIDE リアン

最初に女の子に間違えられるとこうハプニングはあったものの今は近衛さんと神楽坂さんと二人で学園長室へと向かっている。話によると近衛さんは学園長のお孫さんのようだ。実の孫を使いパシリにするのはどうかと思うがいい人で良かった。ここに高畠さんが来るよりかは遙かに良い。あの人は嫌いだ。

「なあなアリアン君」

ちょっと物思いに耽つていたようです。近衛さんが呼んでいるのには気付きました。

「何でしょつか 近衛さん」

「その近衛さんってなんとかならへんかな? もうといつ・フランクに呼んでくれへん?」

「ですが・・・・・」

「わたしもその方がいいな。なんか年下の子にそんな風に話されるとなんか肩が凝りそう」

神楽坂さんも近衛さんと同意見ですか。日本では初対面でファーストネームを呼ぶのは失礼になるということでしたが、‘当人達がそれでいいというならそうしたほうが良いかもしませんね・・・しかしこんな風に他人と話をするのは何年ぶりでしょう。魔法のことを見知らない一般人だからかもしれませんね。

「では、木乃香さんと明日菜さん。これでいいですか」

「ええで」

「いいわよ」

「じゃあちょっとリアン君に聞きたいんやけど、リアン君は何しに麻帆良に来たの？」

「いろいろありますぐ、一言で言つなら強制というか押しつけといふか。ちょっとうまく言い表せませんね。確かなのはここ、麻帆良学園で教師をするということぐらいですかね」

魔法とは言えないのではぐらかしました。それと教師をするというのは非常識ではありますが事実なので話しても差し支えないでしょう。

「「ええええつーー？」

当然、このよつなリアクションが来るのは想定済みです。

「rian君先生なの！？」

「なんでこんな子供が教師なんて出来るのよー？」

「だから強制というか押しつけと表現しました。故郷の大人達に勝手に決められました。ちなみに来月の中頃から本格的に始まります」

「その大人達は何考えてんのよ・・・」

「rian君も大変やな・・・ん？せやけどそれならなんでこんなに早く来たんや？」

「それはいきなり故郷から飛び出して見知らぬ土地で教師をやれと言われても出来るはずがありません。ならすこし早めに麻帆良にして、麻帆良の雰囲気とかに慣れといったほうが後で楽かと思いまして」

「ほえ～。rian君しつかりしとるな」

「ほんとよね・・・ガキンチョがみんなrianみたいだつたらいいのに」

「とこで、学園長室に向かってるんですよね？」

「とこで、学園長室に向かってるんですよね？」

「そやで」

「それとセツキから女子生徒さんしかいなのは何故ですか?」

「ああ、それは」、「一帯は麻帆良の最奥部の女子校エリアなの。
だから男子生徒はいないのよ」

なるほど、だからですか。なら、セツキからの好奇の視線も理解できます。珍しいんでしうね私が。その後も私の故郷の話などをしつつ目的地へと三人で歩いて向かつた。

「着いたで～。」JJKが学園長室や

目的地に到着しました。とりあえず服装を整えます。そして木乃香さんが先頭でそれに続く形で私と明日菜さんが部屋に入ります。

「おじいちゃん。リアン君をつれてきたえ」

「やうか。」苦労じやつた。助かつたわい

木乃香さんが声をかけたのは・・・妖怪？まさかこここの学園長は妖怪だったのか・・・いやそうなると木乃香さんもそうなってしまうのか。いや木乃香さんは紛れもない人間だ。ということはアレは人間か。・・・・にわかに信じがたいが・・・。

「ふむ。リアン君じゃな。儂はこここの学園長をしてある近衛近右衛門じや」

「rian・スプリングフィールドです。この度は私の無理な願いを聞いていただきありがとうございます」

「この程度は無理でもなんでもない。むしろその心がけは実によろしい」

思つたよりも好印象ですが、恐らくこれは本性ではない。この手の人間は知らぬ間に利用されるから気をつけないといけませんね。そしてその横にいるのは・・・

「久しぶりだね。リアン君」

「ええ。高畠さんもお変わりないようで・・・」

高畠・T・タカミチ。私が会いたくない人間の一人だ。こいつは私を見ていらない。何かと気にかけていたが、その目は私を通して誰かを見ているようだった。おそらく私の父親を見ているのだろう。も

しぐは母親か。いざれにせよ私はこいつが嫌いだ。

「では早速じやが、リアン君には月曜日からこの高畠君が担任を持つ2-Aに混じつてもらうことになる。そしてそのあと時期が来ればまずは教育実習生として勉強してもらい、しかるべき時に正式な教員となつてもらつつもりじゃ」

「はい。わかりました」

「その」とやけどおじこちゃん。リアン君は無理矢理教師をやらされるとホントなん?」

こじで黙つていた木乃香さんが口を挟みます。この言葉に学園長と高畠さんは僅かばかり驚いたようです。

「こじまで来る途中でリアン君に聞いたんやけど、さすがにそれは無理なんとかやうんかな?」

「大丈夫じゃ。こいつ見えても彼は教員免許も持つておるし、学力は大学卒業程度の学力はある」

「初耳ですね。教員免許を取つたつもりはないんですが?」

こじで少し試してみましよう。学力については異を唱えるつもりはありませんが、教員免許についてはどう考へても無理があります。この言葉に対して学園長という人間を観察しましょうか。

「フォツー。」
「うか、rian君の元にはまだ届いておらなんだか。
大丈夫じゃ、ちゃんと向こうの学校から届いておるから安心せい。
あとで渡しておひつ」

「顔色一つ変えませんね。思つた以上に喰えなじじこのようだす。
これは油断なりませんね。知らぬ間にいろいろと巻き込まれそうですね。

「わかりました。それで私の住む部屋はどうですか？」

「うむ……。それなんじやが、『実は部屋が決まつておひらんのじや
よ。じやから木乃香に明日菜ちゃんや。一人の部屋にrian君を泊
めてやってくれんかの？』

「話がおかしいですね。私は一ヶ月前に連絡しました。その時の話では『部屋はこちりで用意しておへから』と聞きましたが？」

「うむ。やう伝えたのじやが空き部屋が見つからなくての……」

「それもおかしいですね。私がここに来るにあたつてこちりの空き
物件やアパート・マンションを調べたところでも一ヶ月満室にな
るほどどの空き数ではあつませんでしたが？」

「これは事実です。実際、私は麻帆良に来るにあたつて、まず自宅の
確保に乗り出しました。そして良い部屋が見つかって、ござそんの管

理会社に連絡しようつと思つたところこの話を向こうの学園長から聞きました。だからこそ任せていたのです。それなのに部屋が見つかってません。しかもその代わりに初対面の人の部屋に泊めてもらひなさいとは、実に滑稽です。何かしらの意図があることが見え見えです。段々、腹が立つてきました。

「しかし、部屋があつたとしても今から契約したのでは、一、二日は仮の宿を探す必要がありますね。ここはホテルにでも泊まりますので、私のことは気にしないでください」

「た、確かにリアンの言つとおりだけど、あんた一人で生活できるの？」

「ええ、問題ありません。故郷では一人で山の中の一軒家で生活してましたから」

「あかんてリアン君。悪いのはおじいちゃんやけど、リアン君がそこまでする必要は無いって。ウチは気にせえへんからウチらの部屋において。明日菜もええやろ？」

「ガキンチョは嫌いだけど、リアンはしっかりしてるし……いいわよ」

「ほら、明日菜もええって。ほな決まりやな」

「ちよ、ちよっと……」

私を置いて話を進めないでください。これは私の問題です。木乃香

さんや明日菜さんは巻き込まれる必要は無いんです。

…………もしかして、この展開を狙つてたのか？ そり思つて、学園長の方を見ると満足そうな顔をしていました。

「…………お一人がそういうならやります」

「こ」は素直になつたと思わせておきましょ。 「こ」で手の内を晒すのはもつたいたいです。まあ研究については場所を選ぶ必要はありませんしね。

「ほな、行こつか。ウチらの部屋まで案内するべ」

あのじじこも気にいりませんね……。あれが「こ」のトップなら部下も似たようなものでしょう。第一高畑さんが、右腕のよつた立場にいるのがその証拠ですしね。

この後、私は木乃香さんと明日菜さんの部屋へと案内されました。

SIDE 三人称

「やつぱつ子供じゃの。根は素直な子みたいじゃ」

「そうですよ。まだ10歳の子供ですか」

リアンが去った学園長室では一人がこう話していた。彼らにはリアンの本質が見えていない。自分達に向けられる視線に侮蔑の感情がこめられていたことに気づいてない。むしろここは見せなかつた、気づかせなかつたりアンを褒めるべきだろうか・・・・・

第四話 買い物。それは戦争である

SIDE リアン

「…………朝か……」

私の朝は結構早いです。向こうでの習慣といつのもありますが大体朝の四時半ぐらいには目が覚めます。この後は日課のランニングに行って、シャワーを浴びて朝食をとります。これが私の朝です。では着替えてランニングに行きましょうか。

「…………」れはどりう状況でしょうか

とりあえず起きようと思ったのですが何故か私は木乃香さんに抱きつかれています。ええ、いわゆる抱き枕といつやつです。

「もういいえはもうでしたね…………」

昨日のやつとりを思い出してこの状況に納得しました。これはなるべくしてなった感じですね。

「イリがこれからrian君が生活する部屋で」

とこりわけで学園長室を後にした私は木乃香さんと明日菜さんに連れられてここにきました。木乃香さんが部屋の鍵を開けて入つてきます。明日菜さんもそれに続きます。私も立ち止まつていてはいけないので部屋にお邪魔します。

「お邪魔します」

「そんな他人行儀にならんともええで。イリは今日からrian君の家でもあるんだから」

やつ言われても、はいそうですかと言えるほど常識知らずではあります。ましてや女性の部屋に入るなんて生まれて初めてですし。何より無理矢理泊めてもらいつ形になつてしまつたので。

「あつちこの風呂とかあるかい。

それでトライしてみたが

部屋に入った私に木乃香さんは丁寧に説明してくれます。部屋自体は広く、一人で生活する分にはむしろ広すぎるぐらいでショウガ。これなら私がここに来ても物理的には問題ありませんね。あくまで物理的には。

「どうあえずこんな感じかな」

「終わった? リアンの荷物はロフトに上げておいたから

「ありがとうございます。でも本当に良かったんですか? 私なんかを部屋に泊めても」

「そんなん気にせんでええって」

「アリよ。子供は甘えられるつまは甘えておきなやこ」

「甘えるですか・・・。そのような」とさとくにあきらめました。甘えていては私が行くつとある道は進めません。

「・・・分かりました。ではこれからよろしくお願ひします」

とりあえず部屋が見つかるまでは厚意を受け入れますか。

「よし！ ちょうどいい時間やしき飯にしようか。今日は歓迎の意味も込めて腕によりをかけて作ったるからな。そやリアン君食べたいものとかある？」

「いえ。好き嫌いはありますんで何でも良いです」

「うへん……。せやつたらどうにしょかな……」

「だつたら日本独特の料理でいいんじやないの？」

「それもうた！ よ～し、メニューは決まつたからすぐに入れるわ。リアン君は荷ほどきでもしながら待つてや」

そう言つて木乃香さんはキッチンへと行つてしまつました。ここは手伝つべきなんでしょうがあの雰囲気だと野暮ですね。素直に待ちますか。

……結論から言つとおこしかつたです。確かにんぶら？とかいう料理でしたか。初めての食感でした。また他人の手料理を食べるのも久々でした。……じつにしたのもたまには良いですね。

さてお風呂も終わらせましたし（木乃香さんに大浴場に行こうと言われましたが断固拒否しました）あとはもう寝るだけですね。こう思つてたんですがここで問題が起きました。そうです。私の分の布団が無いのです。もともと一人の部屋に突然お邪魔する形になつたので当然です。

「じゃあ、私は今日はソファーで寝ますね」

とりあえず毛布を一枚持借して今日はソファーで寝ることにします。明日はまず布団を買に行きましょうか。

「あかんで。リアン君そないなと」で寝たら風邪ひいてしまう。今田はウチの布団で寝たらええ」

「じゃあ、木乃香さんばどいで寝るんですか？」

「そんなん決まつてるべ。ウチはウチの布団で寝るで

「は？」

「やから、今日は一緒に寝たらえやんか」

いや、さすがにそれは拙いでしょう。多分私が子供だからそういうふた考えになつたと思いますが、子供である以前に私は男です。いくらなんでも初対面の異性と一緒に布団で寝るのはさすがに・・・。

「ほら、早くおこで

・・・ひとー? 有無を言わさず私は木乃香さんに引っ張り込まれ

ました。ひどく強引な方です。

「じゃあ私も寝るわね。おやすみ」

「ねじる」

私が木乃香さんに引つ張り込まれるのを確認した明日菜さんは上のベッドに上がります。・・・先ほどから何とか布団から出ようと試しているのですが、私の左腕をがっちりホールドした木乃香さんに完璧に押さえ込まれています。

「・・・・・はあ」

これは無理ですね。とりあえず今日一日の我慢です。ええ、明日は必ず布団を買いましょう。隣では木乃香さんがうとうとしています。しかし、こうして誰かと寝るのも久しぶりですね。あの頃はネカネ姉さんに私と兄がひつつくようにして寝てましたからね。

さて、私も寝ますか……。長距離の移動で思いの外疲れもたまつてますし……。明日は……。買……い……。物に……。

「・・・」こんな感じでしたね

木乃香さんを起さないようには慎重に絡んでいた腕を解いてベッドから出ます。そして時間を確認すると午前4時45分。時差ボケがあるかと思いましたがそうでもありませんでした。軽く背伸びをして、洗面所で顔を洗い目を覚します。そしてロフトに上げてもらった荷物の中からトレーニングウェア一式を取りだしそれに着替えます。つっすらと明るいのでビブやら、そろそろ日の出のようです。

静かに部屋を出て寮から学園都市へとランニングをします。まだこの地理には疎いので今日は遠出をするつもりはありません。

「ひんやりとした空気が気持ちいいな・・・」

走る私を包むような朝の冷たい空気が心地いいです。故郷の森とはまたひと味違った感じがして新鮮です。それにしてもここ、麻帆良の街並みは日本のそれとは違い、異国情緒が溢れていますね。ヨーロッパのそれに近いですね。良くも悪くも期待を裏切られた感じです。

程良く体が温まってきたので少しスピードを上げます。それと同時に魔力運用の修行も開始します。地を蹴る瞬間に魔力を足に集中します。そして蹴って地を離れた瞬間にソレを止めて、今度は反対の足に同じ事を行います。これをひたすら反復します。

常に足に魔力を流すのも良いんですが、それだと無駄な魔力が生じ

ます。走る際に必要なのは地を蹴る瞬間に足の筋力を魔法で強化する事です。強化はほんの一瞬行えば魔力の消費はごくわずかで済みます。

これによつて、スムーズな魔力供給と発動。これを養うことが出来ます。このおかげで今では呼吸をすると同じように任意の箇所に任意のレベルの身体強化を行えるようになりました。

これを行いながら時間にして約一時間半は走つたところで部屋に戻ります。

部屋に戻つて水分補給をして、シャワーを浴びたら、時間は午前6時30分でした。

「朝食を作りますかね・・・」

ここで気付いたのですが明日菜さんがいません。私が部屋を出ると起きは確かに寝ていたのですが、今は布団はもぬけの殻です。靴も無いところを見ると外に出ているようです。私と同じランニングでしょうか？

まあ、それはおいで、朝食作りをしましょ。お一人の生活リズムを把握していないので朝食の時間が分かりませんが、とりあえず付け合せのサラダとかから作つていきましょう。まずは冷蔵庫の中身を確認して・・・。

「・・・なんや、ええ匂いがしよる悪つたらリアン君やつたんか」

だいぶ料理も出来た頃に木乃香さんも起きました。まだ少し寝たそ
うで田舎の言葉で「おはよう」と挨拶をしました。

「おはようございます。起こしてしまいましたか・・・」

「おはよう～。返しにせよええよ。こつものくらこじま起きあひる
かひ」

時計を見ると午前7時でした。そうですね。学生からすればこのへ
りには起きないと遅刻してしまいますね。

「それより明日菜さんがないんですけど、どこに行つたか知つて
ますか?」

「アリにえぱrian君に言つてなかつたな。明日菜はバイトや

「バイト?」

「わや、新聞配達をしようるんや。もうわろそろ帰つてくると思つて。
ところが「ごめんな～。朝」飯の準備をさせてもうて、一ひとと待つ
といで。ウチも手伝うから」

やつぱり木乃香さんは洗面所へと行つてしまつた。そしてそれと
入れ違いになるように玄関のドアが開く音が聞こえました。たぶん、
明日菜さんですね。

「ただいま・・・って、rianが朝ご飯作ってるの？」

「ええ、居候ですか！」のくらにはないと申し訳ないです」

「そう言えばrianは朝、どこ行つてたの？私が起きたときにはもういなかつたし」

「私は毎朝走るようにしています。それで行き違いになつたのだと思ひます。私が帰つてきたときは明日菜さんはいなかつたので」

「そつか。じゃあ私シャワー浴びてくるわね」

「はい。もう少ししたら出来ますので」

さて、お二人も揃つたので一気に仕上げましょ。・・・・ふと思つたんですが私、他人に料理を振る舞うのは初めてですね。お一人の口に合うと良いですが・・・。

「ん〜〜〜」のオムレツふわふわや

「そうですか？」

「木乃香の『』飯もおにしげビリアンもす『』こわね・・・

良かったです。喜んでもらえてるよつです。『』れなら作った甲斐があるといつものです。

「それで今日はどないするん?」

「とりあえず買い物に行きます。布団とか必要なものを買いそろえないといけませんし。なので店の場所を教えてもらいますか?」

「そやつたらウチも一緒にいくわ。口で言つより一緒に行つた方が早いし」

「私も今日は暇だから一緒に行こうかな」

「でしたらお願ひします」

「ほな、『』飯食べたら早速いこか。善は急げつていうしな」

ここは土地勘のある人と行つた方が得策です。安いお店が見つかるかもしません。お金に関しては向こうで地道に魔法具を作成して『まほネット』で売つていたので十分すぎるほどありますし。私は魔法具作成の才能があつたらしく、今では私に直接こんな魔法具を

作って欲しいといふ依頼がくるようにもなりましたしね。
そうですね。お金はあるんだから洋服も買いましょうか。スーツは
新調したのがあります。普段着に関してはそんなに持ち合わせがあ
りませんし。

…………このときの私はこの選択がどうなるか理解でき
ていませんでした。

SIDE 明日菜

朝ご飯を食べた私たち三人は今、買い物に来てるんだけど……

「ほら、次はこっちや」

目の前で木乃香によるリアンの着せ替えショーが始まってるのよ。
とりあえず、最初にリアンの分の布団を買って、それを店の人べ部
屋まで送つてもうように手配した後、リアンが服を買いたいと言
つた途端、木乃香が輝いたのよ。それで今に至るつてわけ。

「木乃香、こうじうの好きだからね……」

「うなつたら私では止められない。rianがすぐるように私を見て
くるけど・・・。

「うーん。これもええな。よう似合つてるので、rian君」

あんな楽しそうな木乃香を止めるなんて私にはできない。「ごめんね。
しかし、rianって不思議よね。10歳にしては落ち着きすぎてる
し、朝の料理だつてとても子供が作つたとは思えない味だつたし。
ガキンチョは嫌いなんだけどrianだつたらむしろ歓迎ね。

「木乃香さん、そろそろ・・・」

「あかんで。まだ試してみたい服があるんやから」

これはしばらく時間が掛かりそうね・・・。

SIDE 木乃香

「うん、似合つてるでrian君」

「・・・あ、ありがとうございます」

リアン君はウチが選んだ服の中の一着を着てるんや。店で最後に試着したのをそのまま買ったんや。しかし、なんか疲れたような顔しどるけど、じゃないしたんやろ。

でも、リアン君、何着ても似合つからウチも選び甲斐があつたわ。ほんとは女の子の服も着せてみたかったんやけど、それはさすがに駄目やつたわ。

「他には何か買つ物はあるの？」

明日菜も一緒に選べば良かつたのに、明日菜はずつと見てるだけやからな。

「どうあえずはないですね。布団に、服に、小物とかも揃えましたし」

明日菜と話しているリアン君の横顔を見てるんやけど、ほんまに綺麗やな。これで男の子つてのは反則や。でもなんか不思議な子なんよな。年の割にはえらいしっかりしとるし、料理もかなりの腕やつたな。それに昨日、おじいちゃんの前で麻帆良に来る前は一人で生活しどつた言ひてたし。・・・10歳の子が一人暮らしどうかと思つけどな。家族はおらへんのかな？

「お～～い！明日菜～！木乃香～！～！」

うん？誰が呼んでるのやろと思つて振り返るとそこにはウチのクラスマイトがいました。

SIDE リアン

「お～～い！木乃香～！～！」

明日菜さんと木乃香さんの大きな声で呼んでいる人たちがこっちに走ってきます。・・・・・しかし、木乃香さんはいいようにやられてしましました。あの様に、人形みたいに扱われたのは初めてです。何が木乃香さんを駆り立てたのでしょうか？不思議でなりません。それにあの人によっているからやめてくださいとも言いつづらいですし。

「あれ？明日菜がこの時間に外にいるなんて珍しいね

」

私たちの元にやつてきたのは四人組でした。その中でも一番元気の良い人が話しあげます。

「みんなも買い物？」

「そりなんだなこれが。久しぶりに四人揃って部活が休みだつたら遊んでるだよ」

仲良さそうに話しているところを見ると二人と同じクラスの人でしょうか？

「ところでその子は？」

どうやら私に気付いたようです。

「初めてまして。リアン・スプリングフィールドです」

「リアン君は、来月からウチで先生するんやつて」

「…………へえ。それはまた…………つて先生ー?」「」

やっぱり皆さん似たような反応をされますね。当然と言えば当然なんですが。

「それで、そのための準備として少し早めに麻帆良に来たそいつや。ちなみに明日からウチのクラスと一緒に授業も受けるそいや」

「それで、じつにきたばつかで生活に必要なものが揃つてないから、ついでに買い物をしてるってわけよ」

明日菜さんも木乃香さんも、驚いている四人をスルーしましたね。。まあ私が説明する手間を省いてくれたのでありがたいですが。

「あの・・・？木乃香さん。こちらの方々は？」

クラスメイトである「」とは理解できますが名前を知らないので話しじりいですね。

「ああ、ゴメンな。この四人はウチらと同じクラスの子や」

「私は明石裕奈。裕奈でOKー。」

「佐々木まき絵だよ。私も名前で呼んで」

「和泉亜子や。ウチもええで、下の名前で呼んでも」

「大河内アキラです。みんなと同じように呼んでいいよ」

「わかりました。裕奈さんに・まき絵さん。亜子さんにアキラさんですね。よろしくお願ひします」

しかし皆さん随分とフランクというか・・・日本人は謙虚と言わ
れていますが違うのでしょうか。

「それで? 買い物はもう終わつたの?」

えへつと。まき絵さんでしたね。彼女が私の田線の高さまでかがん
でこちらをのぞき込むように聞いてきます。

「ええ。とりあえずは終わりました。今は何か買い残しが無いかを
考えていた所です」

「そつかそつか

「そやー! リアン君ケー タイ 買いにいこか?」

「ケー タイ?」

ああ、携帯電話の事ですね。そういうれば私持つていませんね。一社
会人として生活する以上、私個人の連絡先を確保する必要はありますね。魔法使いであれば念話が可能ですが、世間一般では携帯電話
が最もポピュラーな手段ですね。

「やうですね。持っていたほうが便利です」

「だったら私たちも一緒にいく…それでその後一緒に遊ぼうよ…」

「ほな、みんなでいこかー！」

「とうわけで合計七人となつて、一路携帯ショッピングへと向かいます。

「良かったんですか？ 皆さんにも予定があつたんじや…？」

「ううん。特げることもなくぶらりってただけだから

道中、一番背の高いアキラさんに話してみました。静かな方ですが優しい人といふことは分かります。

「皆さん、部活をしているところ話をでしたが、何をされてるんですか？」

「私は水泳部。亜子がサッカー部のマネージャーをしていて、裕奈はバスケでまき絵は新体操だよ」

「rian君も何かしたひじやく？」

「一応考えておきます」

ここの人たちは何というか暖かいですね。向こうとは違います。向こうの人は何かこう、打算的な部分があつて、個人と関わるのでなく、『英雄の息子』と関わりを持ちたいという人ばかりでしたから。

私の携帯電話はどれがいいのか分からなかつたので、とりあえず最新機種にしました。そして皆さんと連絡先を交換した後は七人でカラオケに行つたりと、寮の門限ぎりぎりまで遊びました。私が明日菜さんと木乃香さんの部屋に居候していると分かつたら、速攻で遊びに来たのは予想外でしたが・・・・・。

SIDE リアン

さて、今日から私の麻帆良での生活が本格的に始まります。朝、まずは学園長室へと向かい、そこで簡単な説明を受けて、今度は職員室へと向かい挨拶をしました。事前に聞かされていたのか反応は薄いものでした。しかし、中には気に入らない視線もありましたがね。そして今は、高畑さんに連れられて、とあるクラスへと向かっています。そうです。私が教育実習を行うクラスです。どうやら高畑さんが担任をするクラスに私は所属するそうです。

「はい。これがクラス名簿だよ」

「ありがとうございます」

高畑さんからクラス名簿を渡されます。そこには31人の生徒の顔写真と名前そして所属部が記載されています。・・・・・いろんな人がいますね。お世話になっている明日菜さんと木乃香さん。昨日一緒に遊んだ裕奈さんに、亜子さん。まき絵さんにアキラさんもいます。そのほかの生徒の皆さんも外人さんもいれば、なんかロボットのような生徒もいますね。

顔と名前を覚えつつ名簿を読み進めていくと・・・・・

「…？」

一人の女生徒の写真に目が止まりました。彼女の名前は『エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル』。間違いないですね。私の目的の人物です。まさかこんな形で見つけることになるとは思いませんでした。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。『闇の福音』『人形使い』『不死の魔法使い』『悪しき音信』『禍音の使徒』『童姿の魔王』などの様々な呼び名を持つ真祖の吸血鬼。間違いなく最強の魔法使いの人です。魔法世界では知る人ぞ知る悪の魔法使い。今では悪い子のお仕置きにその名前が使われるくらい有名な人物です。そして私の目的、村の人々の呪いを解く方法を知るかも知れない人物です。

彼女はおよそ600年生きる魔法使いです。その知識は凄まじいと言えるでしょう。そんな彼女なら石化の呪いを解く鍵となるものを知っているかも知れません。

世間一般では『闇の福音は約15年前、たまたま日本を訪れていたサウザントマスターによって封印された』となっています。そう、『封印』です。死亡したとうわけではないのです。私は日本にきてまずやろうと決めていたことはこの闇の福音を捜すことでした。かなりの長丁場を覚悟していたのですが、こうもあっさり見つかることは運がいいですね。

見つけることができたのならあとは簡単です。正直使いたくはありませんが、私の『サウザントマスターの息子』という肩書きを使えば、彼女との接触も容易いものです。

まあ、なぜ封印されている彼女が学校に通っているのかは疑問に思いますが・・・。このあたりも本人に聞けばいいでしょう。

「じゃあ、僕が呼んだら入つてくれるかな」

考えていたうちに教室に到着したようです。高畠さんが先に教室に入つてきます。とりあえず、今、考えていたことは置いておいて気持ちを切り替えましょう。こういうのは最初が肝心です。

「ええ～、今日からこのクラスに新しく来た子がいます。彼は来月にはこのクラスで教育実習をしてもらうことになつてるから」

「えー、ホントですかー！？」

「むむっー、私の情報にはそんなことはなかつたけど・・・」

「高畠先生～！その人はイケメンですかーーー！」

えらくクラスが盛り上がつてますね。元気があるのはいいことです。が。ありすぎるの勘弁して欲しいですね。

「じゃあ、入つてもらえるかな」

さて、行きますか。・・・・ドアを開け、軽くクラス全体を見渡し、真っ直ぐ教壇へと向かいます。その道中、すごく視線を感じます。こんなに視線を感じたのは初めてです。好奇の視線、私を値

踏みすするような視線など、それぞれに感じる視線は違います。

「今日からこのクラスでお世話になるリアン・スプリングフィールドです。」「迷惑をおかけする」ともあるとは思いますがよろしくお願いします」

最後に頭を下げます。……………反応がありませんね。

「…………ええ～～～…子供！？」

おお、やつぱり似たような反応ですね。既に知っている木乃香さんたちは驚いてませんが。

「じゃあ、この時間はリアン君への質問の時間にするから

教室内に響く驚愕の声が静まったのを見計らつて、高畠さんがクラスに声をかけます。

「お~っとー、それじゃ、私の出番だね

それに反応して一人の女生徒が意気込んで教壇へと近づいてきます。

その手にはメモを筆記用具、そしていどこから取り出したのか分からりませんが何故かマイクが握られてました。え・・・っと、この人は確か・・・・・

「私の名前はあ、「朝倉和美さんですね」・・・へ?なんで知ってるの?」

「さつき、クラス名簿を見て覚えました」

あのくらいの時間があれば31人の名前と顔を覚えるには十分すぎる時間です。

「へえ~、凄いね。・・・じゃあ気を取り直して質問行くよ。まず年齢は?」

「数えで10歳です」

「「「「ええつー?」「」「」」

クラスの皆さんが驚いてますが特に気にせず進めます。

「出身は?」

「イギリスのウェールズです」

「趣味は？」

「特にありますんが、強いて上げるなら読書と料理ですね」

「ふ～ん。じゃあ、わざ教育実験をするつて高畠先生が言つたけどホント?」

「ええ、本当です。故郷の大人に勝手に決められました。まあ、白本は良い」といのが救いですがね」

「なんか大変だね・・・」

「まあ、そうですね」

「とりあえずはこんなところかな。・・・じゃあ最後に、このクラスの中で彼女にするなら誰がいい?」

なぜ最後にこんな質問が来るのでしょうか。そもそも今あつたばかりの人に聞く質問じゃありませんね。まあ、こには・・・・

「そうですね。皆さんそれぞれ綺麗ですので迷いますが、強いて上げるなら木乃香さんと明日菜さん。それとヒヴァンジョンさんのどなたかですね」

「「「「「おお～」「」「」「」」

「なんでその三人なの?」

「単純な話です。木乃香さんと明日菜さんは居候させてもらっています。ここに来てから一番接点があるんですから当然でしょう。それにエヴァンジエリンさんは私と同じヨーロッパの出身のようですから、『こうこう』と話をしてみたいですね」

いろいろの部分を強調してみます。すると思った通りの反応をしてくれました。先ほどまでは気怠そうにしていましたが、今では私をキッと見ています。今の言い方なり、エヴァンジエリンさんの真実を知る人にしか真意は分からぬでしょ。

「rian君は教育実習が始まるまでの間はこのクラスでみんなと一緒に授業を受けてもらうから、みんなよろしく頼むよ。・・・ああ、彼は頭が良いから勉強を教えてもらいつと良じよ」

「じやあ、rian君の席は・・・そうだな。一番最後尾。明日さんの後ろでいいかな」

「構いません」

「じやあ、rian君の後ろ、そしてエヴァンジエリンさんの隣ですね。願つてもない席ですね。」

私は教壇から指定された席へと向かいます。私が近づくにつれてエヴァンジエリンさんの視線が強くなります。

裕奈さんの後ろ、そしてエヴァンジエリンさんの隣ですね。願つてもない席ですね。

私は教壇から指定された席へと向かいます。私が近づくにつれてエヴァンジエリンさんの視線が強くなります。

「よろしくお願ひします」

一 応挨拶をして隣に腰を下ろします。

「《貴様、何のつもりだ…?》」

席に座るなり念話で私に問いかけてきます。とてもその容姿からは想像できない高压的な厳しい言葉使いです。

「《いきなりで不躾ですが、お話したいことがあります。できれば二人きりで》」

「《くだらん話なら断る》」

「《話と書つよりは取引ですね。私にはあなたの力、特に600年生きている知識が必要です。もちろんその対価は用意します。そのためにはまず確認したいことがあるのですが》」

「《……私が悪の魔法使いと知つてそれを言つているのか?莫大な対価を要求するかもしけんぞ》」

「《正義だの悪だの、そんな些細なことはどうでもいいです。正義であるという」とは同時に悪であり、悪であることは同時に正義であります。この程度の現実を理解できていないそこらの魔法使い

と一緒にされるのは腹立たしいですね。必要なのは確かな知識。そこには善も悪もありません。善であろうが悪であろうが眞実は一つしかありません。それに目的のためには手段は選びません。対価についてもあなたほどの魔法使いなら法外な対価は要求しないでしょう』

「『貴様なかなか面白いな…。少なくとも正義を妄信する学園の魔法使いとは違うようだ。いいだろう。とりあえずは話を聞いてやる。放課後に家に来るといい。学園都市のはずれの森にあるログハウスがそうだ』」

「『では放課後に伺います』」

さて、これで第一段階はクリアです。あとは単純な交渉。それに今 の間にエヴァンジエリンさんにかけられている呪いは把握しました。凄くぐちゃぐちゃな術式ですが解けないことはないでしょう。……これはかなり大きなカードです。なぜ、エヴァンジエリンさんが中学生をしているかも理解できましたし。

ああ、放課後が待ち遠しいですね。これで大きく目的に近づきます。うまく協力をこぎつければ一気に研究は進みます。それに私が呪いを解いたときの学園の反応が楽しみですね……。

実際に面白い。こいつは私の想像を超えてくれた。魔力はあるナギをも超えている。そしてなにより、こいつは正義に染まっている。むしろその思考はそれを否定している。……今の言葉を学園の魔法使いどもに聞かせてやりたいくらいだ。

あのナギに登校地獄の呪いをかけられ、ここ麻帆良に封印されちゃ15年。3年経つたら呪いを解きに来ると言ったくせに行方不明になりおつて。おかげでこの呪いを解けるものがいなくなつたと思っていたが、それは違つていた。あのナギの息子がここ麻帆良に修行に来たのだ。

このチャンスを逃すつもりはない。これを利用して、この悪々しい呪いを解いてやる。

じつこいつをほゞ時間が早く過ぎてくれるといいんだがな……。まもなくだ。まもなく私は自由となる！

第六話 間の福音との契約

S H D E リアン

今日一日の授業が全て終わり、今は放課後です。生徒達は部活動に励んでいた最中ですが、私は一人麻帆良の外れにある森を歩いています。目的はもちろん今朝の件です。悪の大魔法使いエヴァンジエル・A・K・マクダウェル。彼女に会うためです。

「もうそろそろ、着くはずですが……」

森に入つてしまはらく歩くと、少し開けた場所に出ました。そしてその中央に一軒のログハウスが建っていました。

「あれですね」

私は迷うことなくそのログハウスへ近づきます。そして家のインターフォンを押そうとしたところ、ドアが開きました。

「お待ちしていました、リアン先生。マスターがお待ちです。どうぞ」

出迎えてくれたのはクラスにいた絡繆茶々丸さんです。今の発言か

ら察するにエヴァンジエリンさんの従者でしょうか。

「お邪魔します」

「フフフ……。良くなつたな。とりあえず歓迎しよう」

家に入つてすぐにエヴァンジエリンさんがいました。座れとか一言
われてませんがエヴァンジエリンさんの向かいの椅子に腰掛けます。
ここは遠慮する場面ではありません。私が椅子に座つたのを確認し
てエヴァンジエリンさんが切り出します。

「私は回りくどい話が嫌いでな、そつと本題に入らせてもううが
構わんな?」

「ええ、異存ありません。ですが、その前に確認しておきたいこと
がいくつかあります。まず彼女：「絡繹さんはどういった存在です
か？あなたの従者と見えますが、それ以前に彼女は人間ではありま
せんよね」

「茶々丸は私の従者だ」

「私は正確にはガイノイドと言います。魔法と科学の融合によつて
生み出された存在です。マスターはエヴァンジエリン・A・K・マ
クダウェルですが、私を生み出した存在はまた別です」

「そうですか。なら茶々丸さんには席を外していただけるとありが
たいです。創造者が他にいるというなら、この場の話の内容が外に

漏れる可能性がありますか？」

「それなら問題ない。」この場の映像・音声は一切記録するな。いいな茶々丸」

「ハイ。今からの内容は記録しません」

まあいいでしょ。では結界を張りましょ。

「ほう……。見事な手際だな。術式の展開・構築。事前の情報よりも力はあるようだな」

褒められて悪い気はしませんね。

「では本題に入りますが、まず、エヴァンジエリンさんにかけられている呪い。これは私の父がかけたので間違いありませんね？」

「ああ、そうだ」

「次に、その呪いを父がかけたときになにか条件みたいな事を言いませんでした？例えばいつ呪いを解きにくるかとか、どうしたら呪いがとけるかみたいなことですが……」

「ここは重要です。あの学園長のことだとそれらを無視して都合の良

いように呪いを利用するしている可能性があります。実際、構築式がぐちゃぐちゃの呪いに上乗せするようにもう一つ何かしらの術式があります。巧妙に隠されていて気付きませんが、私には関係ありません。この話次第では私はすぐにでも呪いを解呪するつもりです。

「フンッ…当然だ。三年経つたら解きにくると言っていたくせに行方不明になつたんだよ、奴は。おかげで15年もこんな場所で中学生をする羽目になつたわ」

予想通りですね。これなら後腐れ無く呪いを解呪できます。

「では、その呪いを私が解呪します」

「なつ！？貴様、解呪できるのか！？今まで、誰も解呪できなかつたんだぞ？」

「簡単ですよ。それに少し語弊があります。『誰も解呪できなかつた』ではなく『解呪しようとしなかつた』が正しいです」

「……どうこいつことだ？」

「では一から説明しますと、まず今エヴァンジエリンさんにかけられている『登校地獄の呪い』。これは呪いとしては単純な呪いです。かけられた者は学校に行かなくてはならなくなるだけです。ただ、それを行使した私の父が馬鹿みたいな魔力でこの呪いの性質を理解することなく使用したが故に、呪いの構築式が滅茶苦茶になってしまいます。それでも呪いが機能しているのは、その式を膨大な魔力で強

制的に動かしてこらからです

よく・スタンおじいさんが・父を馬鹿だと言つていきましたがこれをみれば納得できます。

「つまり・その滅茶苦茶になつた術式を正しく配置し直せば解呪は容易いです。まあ・それでも呪い自体の魔力が膨大なため多少苦労はしますが・それでもこれを解呪出来る人は他にもいるはずです。学園長あたりであれば十分できるでしょう」

「もし・そうだとしても私が解く努力をしてなかつたとでも思つのか?」

「基本・呪いつていうのは自力で解呪するにはかなりの労力が必要です。正確にかけられた呪いであれば・エヴァンジョンさんほどの術者なら解けますが・この呪いは違います。力業でかけた呪いですからね・これは」

「貴様なら解けるのか…？」

「もちろん。そう言つたはずです。それにそもそも・かけられて3年したら解呪するという約束があるならすぐにでも解きましょう」

「ならすぐ」解呪しろー。」

「ですがそのまえに取引です。私が必要なのはあなたの知識と力。そして私をあなたの庇護の元に入れてもらいたい。それに対する対

価は呪いの解呪。これにプラスして、違約期間の1~2年。従者というわけではありませんがこの期間、私はあなたの指示に従います。必要であれば私の血を差し出すのもありますね

「ほう……。十分すぎる対価だが、それで貴様はいいのか?英雄の息子が悪の魔法使いに従うなんて、正義の魔法使いがうるさくなるんじゃないか?」

「その程度気にする必要はありません。なによりあなたの庇護の元にある以上、『自称正義の魔法使い』の皆さんは手出しが出来なくなります。私は彼らが嫌いですし、その関わりを絶てちゃうけど良いですね」

「フフ……フハハハハっ! 気に入った! 貴様は実に面白い。いいだろ? その取引に応じよう。貴様に対し、馬鹿どもが何かしてくるよ? なら私がその火の粉を振り払ってやる!」

「成立ですね。ではエヴァンジロリンさんの呪いを解呪します」

「ふうっ……。うまくいきましたね。これで私の研究も進みます。

「まあ待て。その前に貴様の本当の実力が知りたい。ビリやア向こうからの報告以上の力を持つているみたいだしな」

「それは別に構いませんが、場所はどうするんですか?」

「フツ……ついてこい」

エヴァンジエリンさんが立ち上がり家の奥へと進んでいきます。それに茶々丸さんもついて行くので、私もついて行きます。向かつた先は家の中の地下室でした。そこは所狭しと人形が並べられています。…そうでした。エヴァンジエリンさんは人形使いでもありますね。そしてその部屋の中央に一メートルほどの高さの台上に固定されたボトルシップのようなものがありました。

「ダイオラマ魔法球ですか…」

「ああ。私の『別荘』だ」

本物を見るのは初めてです。いつか買おうと思っていたのですが、さすがに値段が高くて諦めた代物です。それに近づいた瞬間、体が光に包まれました。

そして目を開けたときには魔法球の中でした。ダイオラマ魔法球には様々な種類がアルト聞きますが、エヴァンジエリンさんはそれらとは違いますね。どうやら自作のようです。

「ところで、貴様の目的とはなんだ？私の知識が必要ということは生半可なものではあるまい」

「ええ。私の目的は石化の呪いを解くことです。それも爵位級の悪魔のかけたそれです」

「それはまた……」

「私の故郷の村は六年前の雪の日に悪魔の大群の襲撃に遭いました。そのときに、姉と兄と私と幼なじみを覗いた全ての人が石化の呪いをかけられました。その呪いを解くことが私の目的です」

「そんな状況でよく生き残れたな」

「まあ、私はそのときは村のはずれの森にいたところのもありますが、村を襲撃した悪魔達は私の父が撃退したようです」

「なに！？あいつは生きていたのか！？」

「私が直接見たわけではありませんが、兄がそう言ってました。そして杖をもつたと。ですが、そのあとは行方知れずです」

「やうか…生きていたか」

「どうしたんでしょうか？なんか嬉しそうですが…。

「よかつたですねマスター。これで枕を濡らさずに済みますね」

「誰がそんなことするかー！？」

「へえ～。なるほど。てっきり父のことを恨んでいるかと思いましたが、そうでは無かったんですね。これは良いことを聞きました。となると、なにかこう、劇的な出会いだったんでしょうね。」

「貴様もそんな田で見るなーー。」

「そんな田とは？」

「その何か可愛らしいものを見るような田の」とだー。」

「それが何か？ 実際問題、エウガーナ・ジンセさんは可愛くじやないですか？」

「なつ……ー？」

「さすがです。褒め言葉に遠慮がありませんね……」

「そ、そんな」とより貴様の実力を見せてもいいづか！」

話を変えましたね。意外と面白い人物なのかもしれませんね。

「貴様は精靈の加護がなく、攻撃魔法の類が一切使えないそうだが、
それは本当か？」

「ええ、そうです」

「なるほどな。ではまず、茶々丸と戦つてもいいわ。始まりと終わ
りは私が合図する」

「いいですよ」

「わかりました」

こうして、私の力を誰かに試すのは修行を始めてからは初めてですね。私自身も自分の力がどれくらいのものか客観的に他者と比べて知りたいですしちょうど良いです。しかも相手は闇の福音の従者。弱いわけがありません。相手にとつて不足なしといったところでしょうか。それにここならアレを使っても田の前のエヴァンジエリンさん達以外には誰の目につくこともありませんしね。

私と茶々丸さんは開けた簡素な闘技場のような舞台で向かい合います。

「では、始めるがいい！」

先手必勝。瞬動を使い背後に回ります。そして正拳を繰り出しますが見事に防がれました。その防いだ状態で右の蹴りが腹部めがけて来ますが、慌てる必要はありません。動きもよく見えます。

「ほつ・・・」

その蹴りを左手で受け止めそれを支点に上空へと飛び上がります。そしてそのまま踵落としを放ちますが避けられました。目標を失つ

た私の一撃は地面に小さなクレーターを作りました。なかなか素早いですね。少し出力を上げますか。

体制を崩している私に茶々丸さんの右のストレートが来ます。瞬間肘の力バーが開きそこからジェット噴射による推進力をプラスした一撃です。それを私は上体を反らして避け、そのまま顎を蹴り上げます。

「くつ……！」

そのままバク転の要領で足を後方へ持つていき、地に足がついた瞬間、地面すれすれを滑空するように接敵。直前で瞬動。背後に回った瞬間遙か上空へと飛び上がり、直上から虚空瞬動で一気に降下します。落下速度をえた一撃です。しかし、寸前で反応され、服をかすめるのみに終わりました。

「そこまでだ！」

「む……。まだ始まつたばかりだといつのに終わりですか。まだ試したいことはたくさんあつたのですが。

「どうあえずは十分だ。これ以上は茶々丸の実力では無理だ」

「どうい」とは次はエヴァンジョンさんが相手ですか？」

「不満か？」

「いえいえ、ありがとうございます」

エヴァンジヨリンさんなら遠慮する必要はありませんね。本気というのを出してみますか。

「では、私の目を見る。リアン・スプリングフィールド」

エヴァンジヨリンさんの目をみた瞬間、何かに引き込まれる感じがしました。しかし周囲の景色は先ほどと変わりありません……つき私が作った地面のクレーターがありませんね。

「ここは『幻想空間』だ。ここなら私もかつてと同じ力を使うことができること……まあ、構えり」

エヴァンジヨリンさんから膨大な魔力があふれ出しました。そして襲ってくるフレッシャー。これが最強と呼ばれる魔法使いですか……。勝てるイメージなど皆無ですが、やるだけやりましょう。

「はああああっ……！」

全開です。出し惜しみはしません。肉体強化も最高レベルです。自

分の魔力を媒体にして、大気中の魔力をかき集めます。それを鎧の
ように身に纏い、全身を覆うように幾重もの障壁を構築します。最
後に両の拳に魔力を圧縮し、纏わせます。これが私の『本気』の戦
闘態勢です。

「『どこ』が『英雄になれない落ちこぼれだ』。魔法が使えない?だ
が今の奴はどうだ。あのようなこと、私ですらできんぞ!」

「いきますーー!」

「フッ……。いいだろ? 遠慮はいらんぞ! 全力で来い!!」

SIDE 三人称

リアンが地を蹴り正面からエヴァンジェリンに接敵する。蹴り上げ
た地面は爆ぜるようにその様を変える。そのままの勢いのまま、リ
アンは正拳を突き出す。それはエヴァンジェリンの障壁を容易く突
破するが、彼女は普通にそれを受け止めた。

「私の障壁を軽く抜くか…」

「くつーー!」

初撃は失敗。もちろんこの程度の攻撃が通用するなどリアンはこれっぽちも思ってはいない。すぐさま体を捻り、蹴りを繰り出す。それも止められるが、これは陽動。すぐさま空いている手をエヴァンジエリンの腹部に押し当て、魔力をぶつける！

「霸つ……！」

それを受けたエヴァンジエリンはいとも容易く吹き飛ぶ。しかし、

「魔法の射手。連弾・闇の99矢！」

吹き飛ばされたエヴァンジエリンだったがすぐさま体勢を立て直し、無詠唱で魔法の矢を放つ。それらは、一般的な魔法使いが放つそれとは違い、込められた魔力、その鍛度も桁違いである。当然、魔法学校を卒業したばかりの見習い魔法使いに向けるべきものではない。それに対し、リアンは両手を前に突き出して『壁』をつくる。

「魔力壁」
「ウォール」

エヴァンジエリンの魔法はリアンの手の前で見えない壁にぶつかって消滅した。リアンはさらに続ける。

「構築式変更」

「！？。リク・ラク・ラ・ラック・ライラック。来たれ氷精、闇の精。闇を従え吹けよ常夜の冰雪」

今度はリアンの手の前に直径一メートルほどの球体が出現する。それはリアンの魔力を球体にしたものである。それを確認したエヴァンジエリンは新たな詠唱に入る。

「魔砲！^{キヤノン}！」

「闇の吹雪！－！」

リアンは魔力による砲撃。エヴァンジエリンは上級呪文を同時に放つ。放たれたそれらは二人の中間地点で衝突し、周囲に暴風と衝撃を巻き起こす。しかし拮抗したのは一瞬で、すぐさまリアンは砲撃を止め瞬動に入る。

「《まさかこれほどとはな……》」

リアンはエヴァンジエリンの背後に移動し、先ほどの茶々丸のときと同じように拳を繰り出しが、それより早くエヴァンジエリンの蹴りがリアンの腹部に直撃する。幾重にも張られた障壁は容易く砕ける。

「ガハッ！？」

「フッ……氷瀑」

すぐさまエヴァンジエリンは追撃する。強烈な腹部への一撃をもらつたものの追撃は何とか大きく後方へと回避することにより逃れた。しかしそのときには既にエヴァンジエリンはさらなる追撃を行っていた。

「氷神の戦鎧」

直径20メートルはあるつかという氷がリアンに降りかかる。

「魔砲！」
キヤノン

すぐさまそれをリアンは破壊する。だが、破壊し、見上げた空にはエヴァンジエリンの姿はない。

「終わりだ……断罪の剣」
エクスキューショナー・ソード

リアンが声に気付いたときにはエヴァンジエリンはリアンの背後にいて、その手の先には輝く刃が高鳴りを上げていた。そしてエヴァ

ンジエリンはそれでリアンをなぎ払う！

しかしそれはガキンッといった音を上げる結果となつた。

「そんなこともできるのか……？」

「魔刀。^{ソード}…間に合いました」

ぎりぎりで魔力の刀を生み出したリアンは辛くも防ぐことに成功した。

「続けて行きます。魔刀の庭」^{ソード・ガーデン}

次の瞬間、周囲におびただしい数の刀が現れた。それらは一様に地に突き刺さっている。

「素晴らしい……。600年生きてきて初めての経験だ。これは

「お褒めにあずかり光栄……です！！」

そしてリアンはエヴァンジエリンに斬りかかる。当然防がれるが、リアンの刀とエヴァンジエリンの断罪の剣が触れあつた瞬間には、リアンは次の刀を手に持ち、瞬動による、高速のヒットアンドアウェイを繰り返す。ヒットアンドアウェイとは言つもの、常人には

おびただしい連続攻撃に見えるであらう。しかし、どの攻撃もエヴァンジエリンにことごとく防がれる。その足下には、rianが手放した魔刀が積み上がっていく。

「（頃合いですね……）」

「（む……雰囲気が変わったな。さて、次は何をしてくるか）」

「崩壊！」
バースト

エヴァンジエリンの足下に転がっている幾本もの魔刀が一斉に爆発した。魔刀の構築式を崩壊させ、構成する魔力を暴発させたのだ。

「投擲槍……」
ランス

爆発がおさまってもリアンは戦闘態勢を解かない。この程度で勝てる相手ではない。故に今度は魔槍を構築する。その数は50本。リアンの周囲に漂いながらその切つ先を爆発の中心、そこにいるであろうエヴァンジエリンに向けていく。

そして爆煙がだんだん晴れていく。ほんのわずかその煙が揺らめく。それを見てリアンは身構え、いつでも魔槍を投擲出来る体勢を取る。そして煙にエヴァンジエリンの影が映る。瞬間、50もの槍が一斉にエヴァンジエリンに向かう。しかし、槍を放つた瞬間リアンは側頭部に強い衝撃を受け、地面を跳ね飛んでいく。何とか片手を着いて体勢を整える。

「（全く見えなかつた…。これが瞬動の境地『縮地』ですか。それに無傷とは…）」

衝撃の主は当然エヴァンジエリンであつたが、攻撃をその身に受けたままでエヴァンジエリンの姿は認識出来なかつた。気配すら感じなかつた。瞬動を極めると、瞬動の『入り』と『抜き』に気配を感じないといふ。まさにエヴァンジエリンの瞬動はそれであつた。

「まさか、爆発させるとは思わなかつたよ。私が真祖の吸血鬼でなかつたらやられていたな。再生まで使つつもりはなかつたんだけどな」

無傷と思われたがそれは違つていた。エヴァンジエリンは確かに爆発の直撃を受けた。至近距離であるがゆえに、障壁による軽減も少なく、片腕が吹き飛ぶほどのダメージを受けたが、再生したのである。真祖の吸血鬼は不死の存在。不死殺しの魔法具や呪文でないとその身を滅ぼすことは出来ない。片腕程度造作もなく再生できるのである。

「貴様は師はいるのか？」

「……いません」

「独学でこれほどの力をつけたのか……、まだまだ荒削りであるが素晴らしいな。ついでだ。私が貴様を鍛えてやるう」

そして、幻想空間は崩壊した。

SIDE リアン

現実世界へと意識が戻りました。

「それで、私の実力はどうでしょうか？」

「さつきも言ったが、荒削りではあるが見事なものだ。とても独学とは思えん。そのあたりは今後、私が鍛えてやるつ」

「ありがとうございます。私の戦いは独学ですから、自分でも荒っぽいのは分かります。エヴァンジェリンさんほどの人に師事を仰げるなら私はより強くなれます。

「では、呪いを解きましょうか」

さて、肝心な呪いの解呪に移りましょう。失礼してエヴァンジェリンさんの頭に手を置き、呪いの術式を正しく構築し直します。

そして術式を少しずつ解いていきます。これを五回ほど繰り返して、最後に呪いの精霊を消滅させます。

「気分はどうですか？」

「ああ、悪くない。体が軽くなつた。だが、魔力が戻つてないのはどういふことだ？」

「それは、登校地獄の呪いとは別に封印抑制の式があるからです」

「なんだとつ！？」

やつぱり気付いてませんね。

「登校地獄の呪いには魔力の封印効果はありません。そして今まで気づかなかつたのは、この魔力抑制の式は電力を媒体にしています。だからわからなかつたんでしょう」

「あの忌ま忌ましいジジイめ……」

「おそらく、近日中に私とエヴァンジエリンさんは一緒に呼び出しへ受けでしよう。そのときにでも詰問したらどうですか？」

「……確かに面白いな」

「そのときの流れ次第では、学園長の田の前でその呪いも解呪しますようか」

「フハハハハッ！奴らの慌てる様が目に浮かぶな。やはり貴様は面白いな。これからはそんな他人行儀ではなく、エヴァとよんでいいぞ」

これは、中々いい関係を築けそうですね。よかったです。これでは教師の仕事と研究に専念できます。兄が来るまでに土台を作りあげておきたいですね。

兄が来たら馬鹿みたいに搔き回されそうですね。

第七話 斯くも甘き『正義』の果実

SIDE 三人称

リアンがエヴァの別荘で登校地獄の呪いを解いた翌日。学園長室では一騒動起こっていた。

「学園長！闇の福音の呪いが解けたとはどういうことですか！？」

「儂も現状は把握できておりん。自力で解いたのかも、誰かが解いたのかもな」

エヴァの呪いが解けたことは瞬く間に学園の魔法使いの間に広がった。誰が発端かは定かではないが、それを聞きつけた幾人かの魔法使いが早朝から学園長室に詰めかけているのだ。正直、近右衛門も驚いている。誰がやつたのかは分からぬが、これまで解けなかつた呪いが解けてしまったのだ。呪いが解けた以上、魔力抑制の式もエヴァにばれたと考えていいだろう。

「ともかく！この件については今宵、本人から事情を聞いてみる。勝手な行動は慎むように！！」

部屋全体にくまなく響き渡り、それは一つの命令となる。近右衛門に詰め寄っていた数人は不承不承ではあるがその言葉に従い部屋を後にして、それにならい他の人間も学園長室を出て行き、残つたのは近右衛門とタカミチのみである。

「……どう思つかの？」

「わかりませんね。なぜ今になつて呪いが解けたのか……。自力で解けるなら既にエヴァは解いているはずですから、誰かが解いたと見るのが妥当でしょう」

「問題はそこじゃよ…。儂でも皆日検討がつかん」

「昨日の放課後、rian君がエヴァの元を訪れたらしいですけど、見習い程度では彼がかけた呪いは解けませんしね」

「うーむ……。一応rian君も呼ぶかの。何か知っているかもしかんしの」

SIDE リアン

現在深夜零時を回つたところです。そして私は今、世界樹前広場へと向かっています。学園長から呼び出しを受けました。呼び出しの内容は『今夜、学園の魔法使いの会合があるから午前0を過ぎたら、世界樹前広場へときてくれんか』でしたね。

ええ、十中八九エヴァさんの事でしょう。それに学園長の口ぶりだと私が呪いを解いたことはばれていませんね。どうせ、見習いだと思つてゐるんでしきうね。まあ、そうなるように私が計算してゐるんで

すけどね。

「早速だな……」

「ええ。予想通りですね」

「ケケケ。ドウセナラ、派手ーイ！」カガゼ」

私はエヴァさんとその従者チャチャゼロさんと広場へと向かっています。登校地獄の呪いを解いた事により今まで動けなかつた、チャチャゼロさんは動けるようになりました。ただ、エヴァさんの魔力が戻つてないため自在には動けないみたいで。それで何故か私の頭の上に乗っています。茶々丸さんは定期メンテナンスということで不在です。

「では、夫界の道（ウングズロード）…」

魔力による空への架け橋を生み出します。階段を上るよう私とエヴァさんは空へと上つていきます。浮遊術を使つていいわけでもなく、ただ歩いて上がります。

「しかし、応用の利くいい術だな。空を歩くなんて私でも初めての経験だ」

「これの利点はイメージできればある程度のものは生み出せます。

イメージしたものに言霊をのせて具現化する。原理を知つても私しか使えませんがね』

これは精靈の加護がないからこそ出来る芸当です。魔法を使う基本としては、無形の魔力を精靈という変換器を通して、有形の魔法とします。これは無意識下で当然のように行われているプロセスです。始動キーによつて、自身を扉とし、精靈達が住まうという、精靈界とパイプを繋いで自身の魔力をそちらに供給します。そして、精靈界で各属性や性質に変換された魔力をこちらに引っ張り出して現象化させる。私はこの精靈という変換器が存在しないから、自身の魔力を魔法へと変換できないが故に、一部の魔法しか使えません。ならば、私自身が変換器となればいい。術式処理は非常に複雑なので説明は割愛しますが、私自身を扉であり変換器として、現実に起こしたい現象をイメージして具現化することによつて、先日の剣や槍。砲撃やこの道を生み出せます。詠唱のプロセスが必要ないので非常に発動が早く、ほぼノータイムで『闇の吹雪』や『雷の暴風』と同等、もしくはそれ以上の攻撃が可能です。

ただ、これには欠点も当然あつて、純粹な魔力で構成しているので10の魔力では10のものしか生み出せません。精靈を使用する魔法は10の魔力に対し、補助術式などを使用すれば20の結果、魔法を生み出すこともできます。つまりこれは先天的に魔力が膨大な私だから出来る術式でもあります。

じゃあ、同程度の魔力を有する人物だつたら可能なのではないかといつたら、答えはノーです。

魔法使いというのは先に説明したプロセスを無意識下で行つています。精靈を介さないと魔法は使えないということを『知っています』。これが重要です。

別の話になりますが、クマバチという蜂がいます。この蜂は当然飛びますが、実は力学的には飛べないことが証明されています。なら、

何故飛べるのか。それはクマバチは自分が飛べないことを『知らない』からです。故に飛びます。

つまり、精霊を介さなければ魔法が使えないことを『知らない』。この境地ともいえる状態にいかに近づくかが私のターニングポイントでした。

結果、私は精霊を介さずとも魔力の変換に成功しました。これさえ出来ればもう後は私のイメージと魔力次第です。

「集マツ テルヨウジャネエカ」

今私たちとは世界樹とほぼ同じ高さまで到達しました。ここからは下っていきます。広場にはぞうと見て30人ほど集まっています。思つたよりも多いですね。

「rian。あいつらに向かつてあの剣を突き立てる」

「いいんですか?」

「構わん。もう実力を隠す必要はないだろ?」

ふむ。確かにそうですね。どうせ私が呪いを解いたことをばらすのに変わりはないですからね。それに一応エヴァさんにはいろいろと教えを請う身ですから、その指示には従いましょう。……ですがただ突き立てるのでは地味ですから、少し遊びましょうかね。

「魔刀」

SIDE 三人称

「学園長。闇の福音はまだですか？」

「ふむ。そろそろじやと思つんじやがの……」

集合時間はどうに過ぎていい。なのに今回の会合の主役たるエヴァ
がまだここに到着していない。同時にリアンも到着していない。焦
れた一人の魔法先生が近右衛門に尋ねるが近右衛門にも答えられな
い。

ガガガガガガガツツツツ――――――

そのときだつた。広場に無数の刀が降り注ぎ、地に突き刺さつた。

「敵襲か！？」

一斉にその場の魔法使いは杖や剣など、様々な武器を構える。しか
し誰一人として刀が降り注いできた空を見ようとしなかつた。いや、
正確には3人といったところか。

近右衛門と高畠、そして龍宮真名の三人である。この三人はすぐさ
ま空を見上げた。そしてそこに見つけた。エヴァと頭に人形をのせ
たリアンの二人を。そして近右衛門達に続くように全員が空を見上

げる。

「あれはなんだ……」

その場にいた誰かがそう呟いた。そこには空を歩いて降りてくる一人と、その道の端に控え、その手に持つ斧槍でアーチを作る、何十人もの全身を鎧で身を包んだ騎士がいた。

SIDE リアン

「ケケケ！ 淘エナ リアン」

「どうも。でもこれはまだ開発中なんですよ。こうして生み出すことは出来ても簡単な動作しかまだ出来ないんです。最終的には自立行動を可能にして、私の手足となつてもいいつもりですけどね」

「それはまた、面白そうだな」

魔刀を広場に射出すると同時に私は開発中の自動人形を具現化します。それらを私たちの両脇にずらりと整列させ、斧槍でアーチを作らせます。あとは降りるだけです。

どうやら私たちに気付いたらしく、広場の皆が一いつ瞬を見ています。

「これは何のつもりかの……？」

アーチをくぐり抜け、広場へと到着した私たちに学園長が問い合わせます。まあ当然でしょうね。突然このような真似をすれば、「何かよからぬ事を企んでいると取られても仕方ないですね。

「なに、ちょっとしたお披露目だ。リアンもついい弋」

「リコーズ
解放」

エヴァさんが満足したようなので騎士達も、広場に刺さっている剣も消します。すると皆さん驚いた表情を私に向けてきます。まさか私の術とは思ってなかつたんでしょうね。……といつことば「実力」は周知の事実というわけですね。

「今のはリアン君の術じゃつたか…。どうこいつとか説明してもらえるかの」

「何故ですか?」

説明する理由はありませんね。

「なに、メルティアナからの書類にはさつきのような術が使えるとは無かつたのでの」

「教えるつもりはありません」

「やつは言つてものを……」「

「……のじじい……。」

「何のつもりですか？人の頭を勝手に覗かないでほしいですね」

「ふお！？」

「のじじいは、話すつもりはないと言つた瞬間、直接私の記憶を見よとしたようですが、無駄です。」

「フハハハっ！無様だなじじい。こいつをただの見習いと思つたら痛い目を見るぞ……。ああ、もう見てるな。私の呪いを解いたのは貴様らが『落ち』ぼれと呼んでいるリアンだよ」

「「「「「なつー？」」「「「」」

「あの程度の呪いを解けないなんて、あなたたちの実力が知れますね」

「馬鹿な！？君は何をしたのか分かっているのか！？」

「誰ですか？」この黒いおつさんは、その場の感情で動くなんて愚の骨

頂ですよ。

「エヴァさんにかけられていた登校地獄の呪い『のみ』を解呪しました。それが何か?」

『のみ』と強調します。分かる人には分かつたでしょう。あなた達がこれとは別に魔力抑制の式を使っていたのはバレていますよと、暗に告げます。予想通り、学園長や高畠さん。その他数名はこれに気付いたようです。明らかに驚いた顔をしています。

「問題なんかあるはずないよな、じじい。元々、登校地獄の呪いについては三年したら解呪する約束だつたんだしな」

黒いおっさんが何か言おうとする前に、エヴァさんが黒い笑みを浮かべながら学園長に問いかけます。……確かに、あの笑顔は悪の魔法使いですね。

「それをよくもまあ、良いように利用してくれたな……」

「むう……」

魔力はまだ抑えられているはずですが、エヴァさんから何か力を感じます。力というよりこれは威圧感?……いや、これは殺氣ですね。

「登校地獄の呪いに上乗せして、この私の魔力を封印抑制する式までかけているとは思わなかつたよ」

「当然だ！貴様は悪だ。正義に仇成す存在である以上、当然の処置だ！」

「あなたはさつきから何ですか？五月蠅いですよ。まあ、弱い犬ほどよくほえますから、仕方ないとはいえ、いい加減耳障りです」

「なんだ…と？」

これだから現実を見ない人は嫌いなんですよ。この世における全てを自分の短い物差しでしか測れない。大体、魔力を封じたぐらいでエヴァさんがどうにかなると思ってるんですかね。魔力を封じたとしても、600年も生きるということは伊達ではありません。根本的に経験が違うのに、魔力を封じて、魔法を使えなくした程度で勝てると思つてるから、実にめでたいですね。

それにこの程度の挑発で我を忘れるなんて……。本当に失望しますね。

「言つておぐが、リアンは貴様らより強いぞ。そうだな、タカミチよりも強いんじゃないか？幻想空間の中とはいえ、私の腕を吹き飛ばしたんだからな」

「貴様ラジャア、瞬殺サレルノガオチダロウナ」

それは言い過ぎだと思いますが。まあ少なくともこの黒いおっさんには負ける気がしませんね。

「今後、私はエヴァさんと協力関係を結びます。あなたたちのところでは叶うものも叶わないですからね。エヴァさんが登校地獄の呪いをかけられていた15年から、当初の約定期間の三年を引いた12年の間は私はエヴァさんと行動を共にします。一応、修行に関することはそちらの指示には従いますが、それ以外、特に魔法の訓練についてはエヴァさんに教わります。ここにいる魔法使いの中でエヴァさんほどの実力者はいませんしね」

少なくとも師匠が自分より弱かつたら教えを請う必要はありませんしね。というより、この人達は恐らく私より、兄のほうに力を入れることは目に見えていますしね。それはそれで私のとつては非常に都合が良いのですがね。

「そういうことだ。ああ……封印抑制の式はこいつに解いてもらひから安心しろ。再びかけようとしても無駄だぞ。するなとは言わんが、それをした瞬間、貴様達は私に敵対するということを覚えておけ。

――帰るぞ」

何か後ろで言つてはいるようでしたが気にする必要はありません。さて、これからどうなりますかね……。本国には報告しないでしょうから、あるとしたら、一部の空気を読めない人たちが暴走するぐらいですかね。

さて、これで心おきなく研究に専念できますね。兄が麻帆良に来る

前に少しあは進められたることなのですが……。

第八話 それぞれの思惑

SIDE 三人称

リアンの学園の魔法使いからの離脱宣言ともいえる発言から一週間が経過した。学園側の魔法使いは未だにあの出来事を引きずつている様子だ。

無理もない。見習いで落ちこぼれと評されていた子供が、学園都市に封印していた闇の福音・エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの封印を解いたのである。今まで誰も解けなかつた呪いを解呪したことでも驚愕だが、その後がさらに驚愕を招いた。

『私はこれよりエヴァさんと協力関係を結びます。魔法の修行についてはエヴァさんに教えを請います』

事実上の離反ともとれる宣言である。リアンは魔法が使えないというウイークポイントは有するものの、その父は大戦の英雄ナギ・スプリングフィールド。次代の英雄候補の一人である。且下、その役目は兄であるネギ・スプリングフィールドに期待する人たちが多いとはいえ、大戦の英雄を父に持つリアンが、悪の魔法使いの象徴ともいえるエヴァンジェリンに師事するというのである。『正義の象

徴』ともいえる英雄の息子が『悪』の魔法使いと行動を共にする。学園内の正義を妄信する魔法使いの中には反逆者とするべきだという声もある。替わりはいるのだから、落ちこぼれなんぞ必要ないと声高に叫ぶが、実際問題それは出来ない。仮にリアンの修行を中止した場合、麻帆良学園は卒業生の修行場所として不適当との指摘を受けかねない。確かにリアンは魔法を一部しか使えないが、それ以外はかなりの成績を修めている。麻帆良学園の魔法使いのなかにも、なぜ、リアンが首席じゃないのかと疑問に思う者もいるのである。それにリアンがエヴァンジエリンに教えを請つについては問題ではない。

リアンは『日本の学校で教師をする』ためにここ麻帆良にきたのであつて、『英雄になるため』に麻帆良に来たのではない。さらに挙げるなら、魔法学校を卒業して一人前の魔法使いとなるための、魔法に関する修行は特に条件が付されていない。誰に師事してもいいし、自力で修行を行つてもよい。これは魔法世界一般の常識である。見習い魔法使いとはいえ、自分の師を選ぶ権利はある。そこまで事細かく管理されるいわれはないのである。

つまり、リアンの修行を中止する理由が存在しないのである。問題行動も起こしていないのに、ただ『悪』が気に入らないという感情論のみで修行を中止することは出来ないのである。

そもそも勝手に悪の決めつける学園の魔法使いは実に愚かである。誰がいつ、お前達を正義と決めたというのだ。思い上がりもここまでくると滑稽である。

「……生徒とも近づきすぎるとも遠すぎることもなく打ち解けており、特に問題行動は見受けられない。なお、放課後は職員室に於いて、半月後から始まる教育実習の準備等に励んでいる。教師陣からの評価も良好」

学園長室で近右衛門は一つの報告書を読んでいた。内容はrianの指導教員になる源しづかからの麻帆良におけるrianの素行報告である。魔法学校を卒業し、修行で麻帆良に来た以上その監督責任者は、麻帆良学園の長である近右衛門である。先のrianの宣言は近右衛門も驚いたが、いざればネギとrianはエヴァに弟子入りしてもらおうと思っていたので、ある意味結果オーライとなつた。しかし、気になるのが『エヴァの腕をrianが吹き飛ばした』ということである。エヴァは嘘はつかない。特に実力の評価については、だとすると、rianは既にかなりの力を有していることになる。それに見たこともない魔法。おそらく独自に編み出したのだろう。これらも近右衛門の頭を悩ませる要因になっている。人は異質のものを忌引し、排除する傾向にある。中世に行われた魔女狩りなんかが良い例だろう。

ただでさえ、エヴァと共に行動することで学園の正義の魔法使いから忌々しく思われているのにプラスして、今まで見たこともない魔法技術を持つrianは今では一種の疫病神のように思われている。しかし、そんな魔法使い達の考えとは裏腹に、rianの素行は問題がない。むしろ品行方正、絵に描いたような優等生である。学園側に敵対する行動も起こしておらず、一般的な教師からの信頼も厚くなつてきている。

今ではrianに対しても否定的な魔法使いは全体の一割未満になつて

いるので近右衛門としても一安心といったところだろうか。

「しかし、ネギ君が来たときが問題じゃのう……」

ネギが来たときに、何か理由をこじつけて強硬手段にでないとは限らない。それだけは避けなければならない。近右衛門は一人頭を抱えるのであった。

良くも悪くも麻帆良の話題の中心人物、'リアン・スプリングフィールド'は現在一人で麻帆良を散策している。エヴァンジエリンの別荘での研究も徐々にではあるが進展を見せていて、それにエヴァンジエリンからは大東流合氣柔術を教えてもらっている。これまでの人生において（10年ぼっちであるが）、今が最も充実しているといつても過言ではない。

「そろそろ出でたらどうですか？ バレバレですよ。桜咲刹那さん」

リアンは人気のない公園に差し掛かつたあたりでリアンは突然声をあげる。すると近くの木の陰から一人の太刀をもつた少女が出てくる。

「何か用ですか？」セシルとかぎ回られるのは大嫌いなんですね」

「あなたの目的は何ですか？」

「何故それあなたに話す必要があるんですか？あなたには関係ないでしょ！」

「やはり狙いはお嬢様か！？」

リアンの言葉に激昂した刹那はリアンに斬りかかる。しかし、それは空振りに終わり、瞬時に背後に移動したリアンに押さえつけられる。地面にうつぶせに倒れ込んだ刹那の右手を右足で押さえ、首に左手をかける。

「無謀です。怒りは力を与えますが判断力を壊らせます。常に冷静でないと命を落としますよ。それに勘違いも甚だしい。お嬢様とは木乃香さんの事ですよね？」

刹那は答えない。ただもがくだけである。もがいたとしてもリアンの拘束からは逃れられないのだが……。

「沈黙は肯定と受け取ります。……ハア、私が木乃香さんを狙う理由がどこにあるんですか？むしろ感謝してますよ。突然やつてきた異国の少年である私を、なんの疑いもなく泊めてくれてるんですけど。感謝することはあっても恨む理由はまったくありません。大方、

私を忌々しく思う馬鹿な魔法使いに焚きつけられたのでしょうか？人の言葉を真に受けすぎです。自分で考えなさい。そのために脳があるんですから。……さて、あなたもできたらどうですか？龍宮さん

「なつ！？」

リアンは刹那を解放して、後ろを振り返る。そこには褐色の長身の女子生徒が立っていた。

「驚いた。いつ気付いたんだい？」

「最初からですよ。あなた達は特徴的な魔力及び気の波長がしますからね」

「「…？」」

「大丈夫ですよ。私は口が堅いですから、誰にも言いませんよ」

解放された刹那は起きあがり尚、敵対の態度を取ろうとするが龍宮がそのような態度を取つてないので刹那も太刀を下げる。戦闘意志がないことを確認したリアンはさらに続ける。

「むしろ、私としては木乃香さんが狙われるならそれを阻止します。恩人ですからね。これで納得いきましたか？」

「そ、その……申し訳ありませんでした」

「龍宮さんもこれでいいですか？」

「私は刹那が良いというならそれでいいさ。元々私は刹那に頼まれてきただけだしね」

「結構。では私は帰りますね。また明日学校でお会いしましょう」

リアンは一人に一礼してその場を立ち去る。残された一人はその背中を見ていた。

「だから言つたろ？彼は大丈夫だつて」

「すまん…」

「しかし、彼は強いな。エヴァンジエルンの腕を吹き飛ばしたというのもあながち嘘ではないさそうだ」

「私もいつ後ろを取られたのか気付かなかつた。気付いたら組み伏せられていた…。それに私の正体に気付いていたみたいだし…」

「フフ…。おもしろい少年だ」

そんな一人の様子はつゆ知らず。リアンは一人愚痴つていた。

「説教なんて、なんかおじいさんみたいですね。それに余計なことを口走つてしましましたね……。あの一人は私と近い部分があるからですかね。鳥族と人間のハーフに、半魔族ですか。2-Aはほんとバラエティーに富んでますね。これは誰かの作為なんでしょうかね……」

夕焼けが照らす道を一人、rianは歩いていく。その顔はどこが満足そうにも、寂しそうにも見えた……。こりましてrianの一日は終わるはずだった。

第九話 リアンの『闇（ちから）』

SIDE 三人称

刹那と真名の一人と別れたリアンはエヴァの家に向かつていた。木乃香と明日菜には今日は遅くなると伝えている。リアンの日課としては、朝・ランニングを行い、日中は2・Aで授業を見学し、放課後は職員室で教師の仕事を教わる。それらが終わるとエヴァの別荘で研究をして、寮に戻る。こういつた感じである。エヴァの別荘は内外の時間差を現実での1時間が別荘での1日になるように設定されている。それを有効利用して、別荘で一日研究や鍛錬にあてるようになっている。

そして今日もまた、いつものようにエヴァの別荘を利用するためには森の中を歩いていた。すっかり日は落ちて、森の生き物たちの声は一つも聞こえず静寂が森を支配している。微かに響くのはリアンが土を踏みしめる音のみである。

だが、どこかおかしい。違和感というのだろうか、何か肌にまとわりつくような嫌な雰囲気を森が支配している。リアンも当然それを感じている。

「静かすぎますね……」

いくら夜だからといつても森の音が聞こえないのは異常である。確かに夜になると森の生物たちはその活動を止めるが、それでも夜行性の生物はいるし、風が吹けば森はざわめく。だが、今日に限ってはそれすらない。風は吹いているが、木々はざわめかない。

「ひー?」

そのときだった。何かが森の木々の合間を縫つてリアンに飛んできた。幸い、右斜め前方、視界の端から飛んできたので対処できたが、これが背後からならやられていたらどう。とつさに障壁を開いてやり過ごした。

「これは…」

飛来したそれは銃弾だった。偽物ではなく本物である。日常の日本において実弾が飛んでくることはまずない。だが非常である魔法の世界においては日常茶飯事である。そしてここ麻帆良は関東魔法協会の本部。その非常の中心地である。つまり…

「全く…今田は厄田ですか」

リアンは銃弾が飛んできた方向へと向かう。

麻帆良学園には夜間の警備の仕事が存在している。こう聞いて想像するのは見回りや、学園施設の警備などを思い浮かべるだろう。確かにこの一面もあるが、ここ麻帆良学園都市においては違った部分が多い。麻帆良学園都市は世界的にも有名な世界樹を中心とした靈地であり、かつての大戦の戦火を逃れるために世界各地、魔法世界からも古今東西、種類を問わず貴重な魔法書が、学園都市内の図書館島に貯蔵されている。当然これらを狙つた侵入者は絶えずいやつてくる。

つまり、これら侵入者を撃退することが夜の警備の本質である。この警備は学園に在籍する魔法先生や魔法生徒が当番制であたつている。戦闘経験を積ませる意味も込めて、本来は参加させるべきではない魔法生徒達も、この警備に当たっているのである。

そして現在、今日も懲りずにやつてきた侵入者（今日は西の陰陽術師のようだが）を担当の者たちは撃退せんと奮闘しているのである。

「くつー!? 数が多い……」

学園の警備区画の一角、学園都市郊外の森。つまるところH・ヴァの家がある森である。少女が太刀を振るい、鬼達を切つては還していく。そして、その隣ではもう一人の少女が銃をそれぞれ両手に持ち、次々と召喚される鬼達の額を撃ち抜いていく。

二人の少女の名は桜咲刹那と龍宮真名。そして相対するは50体はあるとかという鬼達。そしてそれを召喚し続ける術者一人。刹那と真名の二人は次々に太刀、そして銃を振るうが、一人が鬼達を倒すのを上回るスピードで次々に新たな鬼達が召喚されていく。

「斬岩剣！」

「フツ……！」

太刀が月明かりに煌めき、銃声が静まりかえった森に響き渡る。

「なぜ、奴らはこんなに呪喚できる！？」

「わからないな。おそらく何かを媒体にしているんだろうが、一いつ
も鬼達が多いと術者が見えないな」

一人の少女はお互に背を合わせるように立ち、眼前の鬼を見据える。その顔には疲労の色が浮かんでいる。

「これなら」いつの出番はなさそうだな

その「一人の様子を窺う侵入者」一人は顔を見合わせる。そしてその視線の先には一人の少女が鬼に掴まっていた。その瞳は混濁していて正気でないのが見て分かる。何かしらの術をかけられ体の自由も奪われているらしく、鬼にその体を捕まっていても叫くことも身動きすることもない。

この少女は侵入にあたつて内通者が寄越した少女である。この少女がいればこの区画を警備する人物達はその動きを鈍らせ、そして効果的な攻撃になるとのことだった。

……当然だろ。この少女は、今まさに目の前で鬼達を次々に葬つている一人の少女のクラスメイトなのだから。

SIDE リアン

さて、これはなかなかよろしくないですね。私の眼下では桜咲さんと龍宮さんが鬼の大群相手に奮闘しますが、このままだと押し切れてしまいますね。お一人の動きは苛烈ですが、僅かに精細を欠きつつあります。倒しては新たな鬼が召喚される。堂々巡りになっていますね。この場合は術者を仕留めるのが一番ですね。

「……高見の見物とは良い度胸ですね……ツー？」

あの二人の術者の近くにいるのは那波さん！？人質……いや、違う。あれは……。

「つー？……この脣がつー！」

SIDE 三人称

突然空から何かが降ってきた。槍のようなソレは寸分も狂わず刹那と真名を取り囮む鬼達の頭を貫き、全滅させる。突然のことに驚く

刹那と真名。そして、そこにrianが降り立つ。

「――――――

無言。特に刹那と真名に対してもなく、ただ侵入者の一人を睨む。その表情はまさに憤怒の表情である。

「あれは……」

「那波さん――？」

刹那と真名もrianの視線の先にいる侵入者一人とその側にいる那波千鶴に気付いた。真名はいくらか冷静であるが、刹那は今にも飛びかかる行こう勢いである。

「貴様ら、何をしているのかわかつてゐるのか？」

とても普段のrianからは想像できない口調と声色である。

「ふん。餓鬼が一人増えたところでどうにもなるまい」

そう言って術者の一人が念じると那波の体が輝き、そして新たな鬼

が召喚される……」ことは無かつた。寸前でリアンが槍を投擲してその四肢を貫いた。

一瞬、まさに一瞬であつた。刹那の目には何も見えなかつた。真名でさえかすかにリアンの体がぶれたことしか分からなかつた。有無を言わせない攻撃。四肢を貫かれた一人はそのまま地に倒れる。

「な、何をしやがつた！？」

「喋るな…。耳障りだ」

そして再びリアンが攻撃をしようとするが、その前に残つた一人は那波を楯にした。

「貴様！」

「（）いつがどうなつてもいいのか？」

そしてそのまま術者は那波の頭に右手をおき、何かブツブツと呪文を唱える。すると那波の瞳は混濁していたものがもとの輝きに戻る。そして術者は那波を放り投げ、倒れている仲間を見捨てて、背を向けて駆け出す。

「逃がすか！」

刹那がそれを追おうと駆け出すが、それは予想外の人物によつて阻止される。

「な、那波さん！？」

そう、先ほど術者から解放された那波千鶴その人である。

「さ、桜咲さん……？」これは体が勝手に……！」

那波は意識が戻ったようだが、体の自由が利かないようだ。その手にはどこから出したのかナイフが握られ、その動きはとても素人は思えない動きである。実際、刹那は押し込まれている。予想外の事態と、クラスメイトを傷つけるわけにはいかないということが刹那の剣を鈍らせている。

「あればどうこうことだい？」

「……あれば対象の魂を縛っています。そして先ほどから無限に召喚されていた鬼は、那波さんの魂を削つて、力に変換して召喚していました。そして現在も魂、つまり寿命をエネルギーに変えて戦闘をさせられています」

リアンが激昂しているのはこれが原因である。人間の魂というのはそれこそ莫大なエネルギーを秘めている。仮に魂をエネルギーに変

換できるとしたら、その力はどんな一般人でも軽く、ナギ・スプリングフィールドを凌ぐ力を手にすることが出来る。だが、当然魂を交換する以上、寿命を削ることになる。つまり、那波は今、自分の魂を犠牲にしているのである。

「解除方法はないのか？」

「あるにはあります。おそらく私にしか出来ないですけど……」

この術は普通の方法じゃ解けない。それこそリアンが隠している『力』を使うことになる。

「《あれはまだ制御しかねる……。ですが、今はそう言っている場合ではない》……私が那波さんの相手をします。龍宮ちゃんは刹那さんとそこに転がっている屑の処理をしてください」

「……できるのか？」

「出来るできないではなく、やるんです」

「よし。ではいいぞ。刹那！ いたん引け！！

真名の声に応じて刹那がいつたん距離を取り、真名の隣に跳躍する。そして入れ替わるようにリアンが一気に那波へと詰めより、そして

……。

「え……？」

その腹部に那波が手に持っているナイフが深々と刺さる。

「ぐつ……！『だいぶ顔色が悪いな……。クソッ、時間がない』……那波さん。少し辛抱してください」

決して痛みが無いわけではない。ただ今は痛がる時ではない。この術の欠点の一つに、術をかけられた人間が望まない行為を行つたとき、その呪縛がほんの数秒解けるのである。その数秒を利用して、リアンは那波の体と自分の体が離れないよう、『拘束鎖（チェーン）』で一人の体を巻き付け固定する。そして一気に目的地へと移動する。後ろで刹那が何か言つてはいるようだが構つてはいる時間はない。真名に全てを任せたリアンは駆ける。

「は、離れて！リアン君！」

移動中も那波の手はリアンの腹部に刺さったナイフをえぐるようにな動かしている。リアンはナイフが刺さっている部分の組織を魔力で閉鎖して、これ以上の出血を防ぐ。

「『エヴァさん！聞こえますか！？』」

「『どうした？今日は来ないのかと思つていたぞ。今日は森が騒がしい。十分に気をつけろよ』」

「『それよりも別荘に入つてください。お願ひしたいことがあります』」

「『なんだ急に…』」

「『魂食者(ソウル・イーター)の理をかけられた人を運んでいます』」

「『……かけられてビのくらこだ?』」

「『およそ一〇分です』」

「『眞(マサニ)ひねくが私(マシニ)もそればどつ(マドツ)もできんぞ』」

「『そこは私がします。Hヴァさん(マシニ)も手伝つてもらこますが…』」

「『……ふん。急げ、一〇分といつことは時間は残り少ない』」

「『わかつました』」

簡単に念話をし、Hヴァにも協力を頼んだリアンはそのさうに速度を上げる。

そして目的地に着いた時には那波の顔色は一層悪くなっていた。呼吸も浅くなっている。しかしその手は未だにナイフでリアンの腹部をえぐるつとしている。

「もう少しです……頑張つてください……」

「「」「」め……ん……な……せい」

リアンも顔色は悪い。組織閉鎖を行つたからといって痛みまで無くなるわけではない。あくまで出血を止めるだけである。痛みは限界を超えようとしていたが、ここで倒れるわけにはいかない。またあの悲劇を繰り返すわけにはいかない。腕の中の少女を死なせるわけにはいかない。彼女は只の一般人。裏の世界の犠牲になる必要はない。

ただその意志のみでリアンは足を進める。そしてエヴァの家のドアを蹴り開ける。この際行儀なんかどうでもいい。

「急げ！……貴様は確か那波千鶴だつたか？」

そこには既にエヴァが待ちかまえていた。リアンと抱き合つような体勢の女を見て、すぐさまその正体が2—Aの生徒と氣付く。会話はそこそこにリアンは那波を別荘へと連れて行く。それを追つようにエヴァと茶々丸、チャチャゼロも別荘へと入る。

「これから私が拘束を解きます。そうしたら茶々丸さんは後ろから

羽交い縛めにして拘束してください。……こきますよ『解放』『リリース

リアンと那波を拘束していた鎖が消える。すぐさま、茶々丸は那波を後ろから指示通りに羽交い縛めにして拘束する。茶々丸自身かなりの実力があるので難なく拘束している。

那波と離れたリアンの服は腹部から下が赤く染まっていた。血で幾分か重くなつた上着を脱ぎ捨て上半身裸になる。するとナイフで刺され、えぐられた腹部があらわになり。正面でそれを見ている那波は涙を流す。

だがリアンの後ろにいるエヴァは別の中に驚いていた。

「リアン……なんだソレは？……まさか…？」

リアンの背中には背中全体に複雑な魔法陣が描かれていた。そしてその中心にある一際大きな魔法陣は他のそれが黒で描かれているのに対し、まるで血で描かれたような赤い魔法陣だった。その魔法陣が表すものに勘づいたエヴァは自身がはじき出した答えに驚愕する。

「『ありえん…。人間』ときがアレを受け入れられるはずがない…

』』

珍しくうろたえるエヴァを余所にリアンは胸の前で両手を合わせる。まるで神に祈るように。

「もし、私が暴走したらエヴァさんが止めてください。エヴァさんじやないと無理でしょうから…」

そして背中の魔法陣が動き出す。まるで歯車が動くように複雑に絡み合っている魔法陣が一つの魔法陣となっていく。そして幾重も重なっていた魔法陣が一つになつたとき、'リアン'に変化が起る。

「ぐ……あああああああーーーー！」

咆哮。何に対するものか分からぬがリアンらしくない咆哮がエヴァの別荘に響き渡る。そしてリアンから黒いオーラが立ち上る。同時に腹部の傷から一気に血があふれ出す。ゆっくりと那波へと歩み寄り、そして右手を頭に置く。

「茶々丸さんは離れていてください」

茶々丸が那波の拘束を解いた瞬間にリアンの右腕に立ち上っていた暗黒のオーラが集中し、那波を包む。すると、今までがいていた那波がぴたりと大人しくなつた。

「『欠損した器を修復し、同時に魂食者の理の術式を全て吸収…』」

出血は治まらない。だが、'リアン'は一心不乱に作業を行う。

「マスターあれは何ですか……？」

「……あれは『闇』そのものだ」

エヴァの側へと戻った茶々丸は目の前の光景について尋ねる。

「『闇』ですか？」

「ああ。アンリ・マンコ・ロソ・ノアレ・アーリマン、眠り続ける者、暗黒神など様々な呼び名があるが、闇そのものだ。三千世界、つまりこの世界や平行世界全てに存在する闇。全ての始まりにして全ての終わり。あらゆるもの生みだし、あらゆるもの飲み込む闇だ。お前も気付いているだろう？あのリアンから立ち上る漆黒のオーラそのものに力があることを」

「確かに驚くべき事ですが、あの影のようなものに魔力とも力とも違う未知の力の反応があります」

「あんなものが体にいるなら精霊魔法なんか使えるはずがない。あれは世界が忌み嫌う存在だ。……まあいい。詳しくは後で聞けばいい。茶々丸は私の倉庫からありつたけの治療薬を持ってこい。あの出血量は危険だ……」

初見でリアンの力の正体を看破するあたりはさすがといつたところだろう。

「《魂食者の理に取り込まれた那波さんの魂のみを取り出し、そして……》」

「あ……」

そのとき、那波千鶴は何かが自分の中に入つてくるのを感じた。異物感でもない、ただ暖かい何かが。視界はリアンの手から迸る漆黒のものに覆われているが、僅かに見える足下の血だまりが、自分の状況を嫌というほど思い知らせる。

そのときであつた。暖かい何かとは別に、頭に直接ある映像を流しこまれた。それは一人の少年が一人の女性の胸をその手で貫いる光景だ。貫かれた女性は何故か笑顔だつた。対する少年はその小さな体に女性の血を浴び、ただ泣いていた。己が未熟を嘆いているのか、己が殺した人に対して泣いているのか。それは分からぬが、那波には直感的にその少年が誰か理解した。

「よし。これでお……わ……り……で……」

さつきまであつた、身を引き裂かれるような痛みはない。視界を覆っていた黒い靄のようなものも消えた。

「《ああ、私は助かつたんだ……》」

心のどこかでそう思つてしまつた。それは人として当然ともいえる感情である。命の危機を乗り越えたのだ、それが他人によつて助けられたとしても変わりはない。だが、そんな那波の思考も目の前の光景を見ては全てが吹き飛んだ。

「リアン……君……？」

そう、自分を助けてくれた少年が血の海に倒れ臥していた。その顔色は土氣色で生気が感じられない。

「『私のせい』。私がナイフで……」

動こうとしても体が動かない。思考ははつきりしていながら、まるで体が動いてくれない。

「『私が、リアン君を……』

…殺してしまつた』「

そこで那波千鶴は意識を手放した。

第十話 魔法の世界へ（前書き）

今回の話は繋ぎ程度のものです。

第十話 魔法の世界へ

深い森の中の一角、一人の少年が涙に濡れながらその右手を突き出す。突き出された腕は何かでコーティングされているように輝いていた。その行き先は向かいあつていた女性の心臓。人の手が人体を貫く。なんの抵抗もなく少年の腕は女性の心臓を貫いた。

「り……アン……。辛いことをさせてごめんね……。でもリアンがいてくれて良かつ……た」

「あ……あ……」

「これで……『心』は……」におい……ていける

「なんで……。なんで……」

「いい?これからは前を見て生きるのよ……。決して……振り返つては……だめ」

自身の命の灯火が消えゆく」と感じている女性はリアンと呼ばれた少年に最期の言葉を贈る。

「あなたなら……リアンならできるから……」

「「「みんなで二……」」みんなで二つ……僕がいたから」「みんな」と

「そんなことはないわ。人はいつか死ぬ。私はそれがただ早かつただけ……ゴフッ！」

女性は大量の血を吐き出す。そして田の前の少年の見つめ、愛おしく少年の体を抱き寄せ、耳元でささやく。

〔 … 〕

そして女性はその命を散らした。

SIDE リアン

「ハラフ...」

「…………ですか。」「は……私の部屋? あ……。」「…………私はエヴァ
ちゃんの別荘で那波さんを……。」

「コマンド……」

「…………那波さん……?」

「よかっただつ……」

「ハラリ……」

「ふは……ハ……苦しげです。那波さん」
「あら、じめんなさい……。でもよかつた。三日も田を覚めたくないか
いものに挟まれて息が……。」

「ふは……ハ……苦しげです。那波さん」

「あら、じめんなさい……。でもよかつた。三日も田を覚めたくないか
いの……」

私は三日も寝ていたんですか……。といつては外ではまだ口が変わ
るかどうかとこつとこつと泣きじゃうね。

「起きたか」

「ヒカルさん……」

部屋にヒカルさんと茶々丸さんが入つてきました。茶々丸さんは何か箱を持っていますが何をするんでしょうか？

「失礼します」

「……は？ いや、ちよ……！ ？ なんで服を脱がそつとするんですか！ ？」

「腹部の包帯を取り替えるだけです」

なるほど。そう言えばナイフで刺されたんでしたね。自分のことながら忘れていました。

「よろしくお願いします」

ヒカルは素直に任せました。上着を脱いで、あとは茶々丸さんに任せます。

「……私も手伝つわ」

「では、それからを……」

那波さんどこのか変わりましたかね……？なにか依然と雰囲気が違うようだな……。」少しだけ強い意志を感じるような。

「さて、リアン」

「は、はい……」

「！」の馬鹿者が……！

「痛つ……！」

エヴァさんの拳骨が頭に直撃しました。……痛い。単純に痛いです。

「おおよその事の顛末は那波に聞いた

「そうですか……？」

「なぜ、敵の前にわざわざ出てきた？貴様なら氣付かれずに敵を倒すことなど造作も無いはずだ？」

「そうですね。隠密に近づいたのに激情に駆られて行動したのは過ちですね。桜咲さんにはあいつておきながら、自分がこうなってしまつては笑えませんね。

「怒るなとは言わん。だが、軽率な行動は避けよ。お前のやり方次第では、そんな怪我をすることもなかつた」

「すみません…」

「分かればいい…。お前はこれが分からぬ奴ではない。今後は注意しろ」

「はい」

「よし。では本題だ。背中の魔法陣。なぜあんなものがある。あれは人間の手に負えるものではないぞ？」

さすがですね。今回使った力はほんの一握ですが、背中の魔法陣のみで私の『力』の源を看破するのですから。それに私が激昂した理由を聞かないのはありがたいですね。

「となると、それを刻んだのは…」

「ええ、ヒュアさんの予想通りだと思いますよ」

恐らく、これを、つまり『闇』を私に与えたのは私の両親でしょう。何を考えてこんなものを実の子供に与えたのかわかりませんが

ね。まあ、そのおかげで今回は助かったのだから役には立つてますね。

「なるほどな……」

「これで終わりです……。あと二日ほどは大人しくしておいてください

い」

「わかりました」

「では行くぞ茶々丸」

「ハイ。マスター」

「どうりへ？」

「なに、すこし学園に顔を出すだけだ。お前も外の様子は気になるだろうから様子見だ

外では私が那波さんを連れてから3時間といったところでしょうか。多分、事態は終結を見せてているとは思いますが、気にはなりますね。他にも魂食者の理を受けた人がいるかも知れませんしね。仮にそうだとしたら、もう手遅れですけどね……。

「……お願いします」

「安心しろ。お前の力のことを話すつもりはない。それと、那波には全て話してある。その上でお前がどうするか決める。フフ…まあ那波はもう決めているみたいだがな…。まあゆっくり養生しろ」

そういうてエヴァさんと茶々丸さんは出て行きました。全てを話したという事は、魔法についても、強いては魂食者の理についてもでしょう。

「…………」

「…………」

さて、何から話しだせばいいんでしょうか。

「「あのっ…」「

「えうわ…」

「リアン君からでいいわよ…」

「…気分はどうですか？」

「ええ。どつてもいいわ

「それはよかつた」

私も初めてのことでしたからね。一応理論上は可能であつても実際に魂食者の理を解呪したのは今回が初めてですし、あれを使った事による副作用ができるかもしませんしね。

「『』めんなさい」

「…………」

「私のせいどころかになってしまって」

「那波さんが気にすることではないですよ。私が勝手にしたなんですから。それに本来、責任は学園側にありますしね」

「それでも……」

「終わりよければすべてよし、です。結果として那波さんも私も助かつたこれでいいじゃないですか」

「…………わかったわ」

納得できないのは分かりますが、那波さんは巻き込まれただけであつて、なにも恥じることではないんですけどね。

「……魔法についてはエヴァさんに聞きましたね？」

「聞いたわ。麻帆良学園がその魔法使いの組織の本部だつてことも

「……魔法は秘匿せねばなりません。そして一般人にその存在を知られたときは、その人の記憶を消去することになります」

「…………」

「私としても無理矢理人の記憶を消すのは嫌です。そこで那波さんに選んでもらいます。一つは記憶を消して今まで通り普通の女子中学生として生きていく。もう一つは魔法の世界、こちら側に踏み込むか。知つてしまつた以上、魔法の存在を知りながらこれまで通りの生活をすることはできません。この二つの中から選んでください

「私はどちらも選ばない」

「…………は？」

「私はリアン君と一緒にいることを選ぶわ」

「…………それが何を意味するかわかつてますか？」

「もちろん。リアン君が英雄の息子と zwar ことも、そして魔法世界においては重要な人物だということも。そしてその目的のために手段を選ばないことも」

「私といるだけで命を狙われることもあるんですよ~」

「そのときはリアン君が守ってくれるんでしょう？…………それに、リアン君ずっと一人でしょ？あの雪の夜から」

「！」

「『めんなさい。なんでかわからないけど、リアン君に助けてもらつたときにある映像が頭に入ってきたの。……小さな男の子が女性を……その……』

これは予想外ですね。まさか私の記憶が流れ込むとは……。あれは誰にも言つて無いんですけどね。

「……それは私の記憶に間違いないです。私が彼女を殺しました」

初めて人を殺した日。初めて泣いた日。そして初めて「自分という存在を呪つた日。

「それを知つて尚、私といいますか？私は人殺しですよ。さらに殺すこともありますよ。それに那波さんも誰かを殺すことになる可能性もありますが、それでもいいんですか？」

「…………（ノク）」

意志は確かにありますね。何が彼女をかりたてるのか分かりませんが、まあいいでしょう。

「なら、那波さんの意志を尊重しましょ。」

「千鶴よ。その那波さんっていつのは壁があるみたいで好きじゃないわ」

「分かりました千鶴さん。これでいいですか？」

「ええ。十分よ」

SIDE 三 人称

「マスター。那波さんはどうなるでしょうか？」

「フン。奴の意志どおりなるだろうな。rianは奴の意志を尊重するだろ？それに那波の存在はrianにとつてプラスになるはずだ」

「なぜですか？」

「簡単なことだ。今のrianはあるで機械だ。なにが原因か知らんがrianは自分の感情、心を無くしている。おそらく意識的にな。あれでは生きているとはいわないよ。さしあたって、那波はrianの枷をとく鍵といったところかな」

「それでしたら、別に那波さんじゃ無くてもいいのです？」

「それは無理だろ？な。rianの抱えるものはそう簡単にぬぐえる

ものではない。それこそリアンという人間を包み込むような奴じゃないとな」

「…まるで息子が連れてきた彼女を評価する母親ですね」

「貴様はいつそんなことを覚えた！？（しかし那波千鶴か…あれはなかなかの人間だ。あそこまで芯の通った奴はそうはない。よかつたなリアン。お前にはちょうどいい人間だよ）」

エヴァンジエリンが那波千鶴に何を見いだしたのかは本人にしか分からぬ。しかし、その様子から察するに、リアンにとつて悪いことではなさそうだ。

これから先、リアンと那波千鶴がどのような道を歩むのか。それはまだ、誰も知らない。

第十話 魔法の世界へ（後書き）

この作品を書くにあたり、メインヒロインは千鶴に決めていました。
あの包容力がrianには必要なんです。

第十一話 一夜明けて

SIDE 三人称

「昨夜の被害はどうなつておる?」

「こちらの被害はありませんが、一般人が9名ほど犠牲になりました。語弊がありますがその9人は身寄りがおらず、社会とも関わりを持つてなかつたことは幸いでしょう」

「卑怯だ!一般人を攫い、術をかけ、使い捨てにするとはあいつらは悪魔だ!」

学園側の魔法使いは現在学園長室に集合している。昨夜の警備は衝撃をもたらした。一般人を楯とすることはこれまでにも少なからずあつたものの、一般人を武器として、しかも使い捨てにするのは初めてである。そして警備に於いて犠牲者がでたのも初めてのことである。

「全部で10ある警備区画のうち9区画で同様の手段が執られました。唯一無かつたのは桜咲刹那と龍宮真名の担当する区画のみです。術の正体は分かりませんが、術に利用された一般人は例外なく最後は死亡しています」

「それは違います」

白のレディーススーツを身に纏つた葛葉刀子の報告に刹那が答える。

「私たちの所でもそれはありました。術をかけられたのはＺ－Ａの那波千鶴さんです」

その言葉に睡然とする学園側魔法使い。術をかけられた人間は一人残らず死亡している。つまり那波千鶴も、子供も今回の一件で死亡したのだ。

「なんて卑劣な！学園長、これは宣戦布告です！！我らも西に攻め込みましょう！」

一人の教師の言葉に続いて声を上げる面々。雰囲気は最悪である。現状を把握せず、ただ卑怯だ卑劣だなどと罵るだけである。

「やかましいわ！！まずは現状を把握することが肝心じゃ。考えもせずに余計なことを口走るでない！…！」

近右衛門の一喝で一気に場が静かになる。

「眞っ直ぐが、那波千鶴が死亡したかは分からない」

その静かになつた間隙をついて真名が言葉を発する。

「那波千鶴はほかの者と同様に私たちを襲つてきたが、その直後りアン・スプリングフィールドが連れて行つたため。その生死は分からぬ」

「彼が！？」

「自分にしかできないといつていたがな……」

「うむ……。ではアン君に事情を聞くのが先決じゃの……」

「その必要はない」

そのときだつた。学園長室にエヴァが入つてきた。そして一言呟く。

「那波千鶴は無事だ。ちゃんと生きているぞ」

「それは本当かの？」

「私が嘘をつく理由がない」

そしてエヴァは一人悠々と部屋の中を進み、誰も座っていない近右衛門の正面のソファに腰掛ける。そしてすぐ側に茶々丸が控えている。

「相も変わらず不毛な時間を過ごしているなじじい」

「フォツフォツフォ。これは手厳しいのお

「ほら、さつやと話せ。この私がリアンの変わりに来てやったんだ。奴に聞くつもりの質問は私が答えてやる」

「リアン君はどうしておるのかの？」

「私の家にいるわ。そこに『那波千鶴もいる』

「では昨夜の侵入者の術は何かわかるか？」

「貴様が知らないのか？」

素直にエヴァは驚いたようだ。近右衛門ならおおよその見当は付いていると想っていたのだ。しかし、無理もない。近右衛門に挙げられた報告はどれも抽象的で具体性に富んでないのだ。

「まあいい。奴らが使用したのは魂食者の理だ」^{ソウルイーター}

「フォツ！？」

エヴァの言葉に反応したのは近右衛門只一人である。その他の面々は何の話をしているのか分からぬのだ。

「……学園長、魂食者の理とはなんですか？」

その中の一人、力子が近右衛門に尋ねる。

「……つむ。魂食者の理とは、対象の魂、つまり生命力をエネルギーへと変換する術のことじや。対象の魂を隸属させ、そのエネルギーを自身の術の媒体とする禁呪中の禁呪じや。これに解除方法はなく、かけられた者はただその魂が尽きるまで術者にエネルギーを榨取され続けるのじや」

「…………なつ……」

術の正体に驚愕する人々。中には顔が青ざめている者もいる。

「rian君はどうやって魂食者の理を解いたのかの?」

「答えるつもりはない。答えたなら貴様らはそれを利用するだりつ?」

「利用とは心外じやの」

「どじが違う? 解呪の方法を探るよりそつならないよつにするのが

貴様の仕事だろうが。大体、貴様らが附抜けているから今回のよつ
な事態になるんだよ」

今回の事件、一番重要なことは、麻帆良に住む一般人が利用された
ということである。これが何を意味するか。それは麻帆良内部に既
に敵が侵入している、若しくは内通者がいるということに他ならな
い。

「しかし、それでも万が一に備えて、今回の二の舞にならないよう
にするためにも解呪方法は知らないと……！」

「黙れよ小娘……。私ですら魂食者の理は解呪できんのだ。方法を知
つたところで貴様に出来るはずがないだろ！」

「だったら、彼を警備に組み込むべきです。人々を守るのは私たち
正義の魔法使いの役目です！」

エヴァに高説をしているのは高音・ロ・グッドマンという女生徒で
ある。

「だから黙れと言っている！あれほどの術を解呪することが簡単な
わけがないだろうが。解呪するリアンにもかなりの反動があるんだ
よ。それこそ命の危険があるぐらいな。貴様はリアンに死ねと言っ
ているのだと。それすなわち、私への敵対宣言と取るが……？」

「マスターとリアンさんは協力関係にあります。そのことをお忘れ

無く……

「 もう話すことはない。後は貴様より考へるがこころ」

「 それでは失礼します」

エヴァが部屋を出て行く。それに続いて茶々丸も一礼して退室する。
そしてその後はなんとしてもリアンをこちらの陣営に引き込むべき
といつも意見が部屋を支配するのであつた。

SIDE リアン

「 はい。あ～ん」

「あ～ん」

「 どう?..」

「 ええ、おいしいです」

さて私は未だ別荘にいます。あれから別荘の中で3日が経過しました。しかし、未だ私は別荘内のベットの上です。そして千鶴さんに

より甘厚い看護を受けています。

「あの、千鶴さん？」

「何？」

「もう大丈夫なんぞ、起きてもいいですね？」

「駄目よ。茶々丸さんに看てもらいのまでは駄目」

「……分かりました」

跡は残つてますが傷自体は完治しています。ですが千鶴さんが最後に茶々丸さんにもう一度看てもらうまでは起きては駄目と言つのでこの状態のままです。押し切らつかと思ったのですが、千鶴さんの背後に揺らめくオーラに負けてしました……。お尻にネギは勘弁して欲しいです……。

「戻つたぞ」

「お帰りなさい。どうでした？学園側の対応は」

エヴァさんが帰つてきました。

「どうやら全体で9人の一般人が魂食者の理で死んだようだ。学園

側の魔法使いはびつかる」ともできなかつたようだな

「…まあ当然でしょ、うね。私しか対処出来ないでしょ」

「解呪方法を教えるだの、リアンを警備に組み込めだの言つてたがどいつする? 一応私は釘を刺しておいたぞ」

「それは無視します。私には関係ありませんし。それに何度も解呪できるわけではないですし。今回はつましくいましたが、次もそうなるとは限りないですからね」

「ナツナツと思つてたよ。……それで、那波はどうするんだ?」

「千鶴さんの意志を尊重します」

「なるほどな。なら、お前と一緒に面倒を見てやる。那波もそれでいいな?」

「当然よ。守らねばかりじや嫌ですもの」

「よし、では明日から始めるだ。那波は基本から、リアンは『力』の制御だな

「ヒューハさん、この制御方法を知つてあるのですか?」

「私を誰だと思っている。ほんのきつかけを『あえて』と『ぐりこせ出
来る。あとはお前次第だ」

「やつですか…。ではよろしくお願ひします」

「ついで、私と千鶴ちゃんの本格的な修行が始まりました。」

そして、ついに兄がやってきます。彼は私に何をもたらすのでしょうか？

……………やつはやつ

第十一話 一夜明けて（後書き）

次あたりで原作に突入します

第十一話 リアン・苦悶の日々？

SIDE リアン

「んにちは。リアン・スプリングフィールドです。あの千鶴さんの一件から田舎過ぎ、私の教育実習も開始されました。そしてそれと同時に私の兄、ネギ・スプリングフィールドもここ一麻帆良へとやつてきました。……ええ、期待を裏切らない素晴らしい厄介な方です。……まあそれを語るのはあとにして、とりあえず私の近況報告をしましょ。」

私は教育実習が始まると同時に、明日菜さんと木乃香さんの部屋を出て、女子寮近くの高層マンションを購入し住んでいます。こういったことにはお金の出し惜しみはしません。引っ越しときは凄く泣られました。ちゃんとご飯は食べていけるのか、一人で寂しくないとか。このあたりはなんとか説得しました。そして今は兄が一人の部屋にいるようです。

私が買った部屋は麻帆良でも高級マンションらしく、その最上階のフロアを一つまるまる買いました。部屋数も多く、広いので非常に住み心地がいいです。研究スペースも取ることが出来ましたし、エヴァさんに教えてもらつて私の別荘も造りました。私の別荘とエヴァさんの別荘は繋がつていて、中の転送陣を利用すれば双方を行き来することが可能です。同様の物を部屋にも設置したので、エヴァさんの家まで歩いていかずとも転送で済むようにしました。学校も近くで非常に便利ですが、この事を知った2-Hの皆さんはたまに大勢で遊びにきては騒いで帰つて行きます。

そして、それとは別に、千鶴さんがよく部屋に来るようになりました。確かに共にエヴァさんに教えを請つので一緒にいることは多いのですが、それ以外でも普通に居ます。仕事から帰つてきたり、「飯が並んでいたこともあります。私は合い鍵を渡した覚えは無いんですけど。どこから入つてくるのでしょうか。まあいいんですけどね。

あと、最近よく言われるのが、良い表情をするようになつたとのことです。特に教職員の方々によく言われます。私自身ではそう意識している訳ではないんですがね……。

修行の方は順調です。私も『闇』の制御が少しずつ向上しています。以前のように反動が来ることも少なくなりました。この分なら実戦で使つても大丈夫でしょう。

千鶴さんですが、彼女はめざましいです。もともと才能があつたのかあつという間に基本魔法は習得しました。エヴァさんの教え方もうまいのですが、それ以上に千鶴さんの覚悟が凄まじいです。一度とあの口を繰り返さないとでもいうように鬼気迫るものがあります。おそらく、兄よりも強いでしょうね。……近況報告はこんな感じでしちゃうか。

【リアンによるネギ・スプリングフィールド報告】

ネギ・スプリングフィールド - 麻帆良に来たる

やつてくれました。来日早々、問題を起こしてくれました。始業の一時間前には麻帆良に来て、学園の説明や諸手続をする予定のはず

が、兄が来たのは生徒達の登校時刻です。しかも生徒達に混じって来ました。

その際に明日菜さんに向かって『あなた失恋の相が出てますよ』と言つたそうです。

……本当に馬鹿ですね。

そのあと、それに怒つた明日菜さんの服をくしゃみによる武装解除魔法の暴走で吹き飛ばしました。謝罪の言葉もなく、『僕は親切で教えてあげたのになんで怒るの』とでも言わんばかりの表情でしたね。……明日菜さんの制服は兄の給料から差し引いてもらいました。

その後、学園長室に行つたのですが、兄は住むところすら考えて無かつたようです。まさかここまで世間知らずとは思いませんでした。しかも学園長は何を思つたのか今、現に、目の前で怒っている明日菜さんに兄を泊めてやつてほしいと言い出しました。その後頭部切り落としてやりましょうか。……結局木乃香さんが許可したので泊まることにほなつたようです。

そして、本番ともいいくべき2-Aでの挨拶。私は、知らぬ仲ではないので挨拶と言つても担当科目（兄と一緒に英語でした）を話して、改めてお願ひしますと頭を下げただけです。兄はいきなり魔法と口走りそうになりました。エヴァさんと私に念話で『大丈夫なのか?』と呆れていきました。龍宮さんも同じみたいでしたね。自己紹介が終わつた兄は一部の生徒を除いた人たちにもみくちゃにされました。知つたことではありません。私は被害が出ないよう教室の隅の方に避難してました。

クラスの暴走はしづな先生が静めてくれました。その後初めての授

業が始まりました。基本兄が教壇で授業を行い、私がクラスを回つて、兄の説明でわからない部分を補足するというスタンスです。
：私はちゃんと下準備をしてきましたが、恐らく兄は何も準備してないでしょう。

——ええ、授業は予想通りの結末を迎えるました。兄は黒板の上に手が届かず、クラスの笑いを取り、挙げ句の果てには雪広さんと明日菜さんが授業中に取つ組み合いのけんかを始めるという始末。私は放つておきました。あえて放つておくことで兄がどんな対応をするのか見たかったのですが、オロオロするだけで何も出来ませんでした。期待通りというか、何とも言えないですね。なんでこんなろくでなしが私の兄なんでしょうか？結局、今日の授業は何もせずに終わってしまいました。しかもその責任は私にあるという兄。本当に使えませんね。

ネギ・スプリングフィールド・魔法使いとばれた！？

教育実習初日の放課後、兄の歓迎パーティーが行われました。相変わらずのお祭り好きなクラスです。私も参加ですが、私たちの指導教員のしづな先生と高畠さんも参加です。私は兄を囲む和には加わらずにエヴァさん、茶々丸さん、龍宮さん、桜咲さんと千鶴さんの六人で一緒にいました。

あの事件以降、龍宮さんと桜咲さんは仲が良くなりました。最初は敵視（桜咲さんが）されてましたが、今はそんなことはありません。

歓迎会は無事に終わったのですが、その後が問題でした。マンショ
ンに帰るつとしたりに明日菜さんが兄を後ろに連れて私の所に
やつてきました。

『rianも魔法使いでしょ？』

……どうやら初日で兄は魔法使いだとばれたそうです。ここまでく
ると感心しますね。

ここまで分かっている以上嘘をつく理由はありません。素直にそ
ですよと答えて、その場は後にしました。本当に厄介事しか起こし
ませんね。

話を聞くに、階段から落ちそうになつた富崎さんを助けるために魔
法を使ったとのこと。その現場を明日菜さんに現認されたようです。
そして、そのあとに明日菜さんの記憶を消そうとして服を消し飛ば
したこと。富崎さんを助けたことは評価できます。まあ私には
関係ないからどうでも良いんですがね。むしろオコジョになつても
らつたほうが静かになつていいかもしませんね。

ネギ・スプリングフィールド 惣れ薬を作る

本当にやつてくれますね。毎日毎日問題ばかり起こしてくれます。
今日の授業はまともに進んでいましたが、和訳の問題を明日菜さん
に解いてもらつた際に、明日菜さんが答えが分からずにいたところ、
『明日菜さんは英語が駄目なんですね～』と言い切りました。本当
に馬鹿ですね。これはさすがに私も黙つてはいません。

~~~~回想~~~~

「ネギ先生、あなたは何様ですか？教師が生徒に向かって言ひ言葉  
じゃないですよ。皆さんもです。問題が解けないことなんて山ほど  
あります。あなた方は全ての問い合わせの正解を言えるんですか？第一、  
授業といつのは分からぬ所を理解するために行うんですよ？」

教室が一気に静まりました。

「問題の答えがわからない。当然です。そのために教師といつ職業  
があるんです。その教師が『あなたは……ができないんですね』な  
んて言つのはもつてのほかです。そんなことを言つなら教師なんて  
辞めなさい。あとは私が授業を行いますから問題ないでしょ？」「

「で、でも……！」

「まずは謝罪しなさい。言い訳は必要ないです」

~~~~~

このあとネギは素直に明日菜さんに謝罪しました。人に言われてか
ら謝罪するのはどうなんですかね……。

しかし、この程度はかわいいものでした。この翌日にもつと大きな
問題が起きました。

あろうことか、兄は明日菜への謝罪として、惚れ薬を作ったのです。惚れ薬の製造は犯罪です。他人の意志をねじ曲げる惚れ薬はその製造そのものを禁止されています。まあ一時的な好意を生じさせる軽易な物は販売されていますがね。しかし、兄が作ったのはそれよりも強力なものでした。結果としてその惚れ薬を兄が飲んでしまい、2・Aは力オスとなりました。2・Aの魔法関係者はレジストしましたが、それでも大半の2・Aの生徒はその影響下になり、兄を脱がしたり、求婚したりと大変な騒ぎになりました。

最終的には惚れ薬の効果が時間経過で消えましたが、その際に学園の備品がいくつか壊れてしましました。

私が壊したわけではないので放つておきましたがね……。

―――――― 簡単に挙げるとこんなところですかね。そして今、私は職員室で自分の仕事をこなしています。職員室の机の配置としては私と兄は隣同士です。そして兄の横にしづな先生の机があります。私の机の横には誰もいません。

教師という仕事も大変です。授業の年間スケジュールを立て、簡易テストの問題を作成したり、生徒達の評価をしたりと、休む暇がありません。私たちはそれぞれ兄が担任で私が副担任ですのでその業務もあります。教育実習生にクラスを持たせるなんて正気でしょうか？……まあ、心から早めに麻帆良に来て教師の仕事を勉強して良かつたと思います。

それで兄はといふと……

「リアン先生・ネギ先生はビリに?」

「あ…私も把握していません」

放課後になつた途端いなくなつています。教師の仕事は授業をするだけだとでも思つてゐるんでしょうか?教育実習が始まつてからの一週間は慣れてないということもあり、担任業務などは学年主任の新田先生としづな先生がやつてくれてましたが、今日からは自分たちであることになつています。その時の連絡はあつたのですが、忘れたんですかね?

私は順調に仕事を進めていて、もうすぐ終わりそうですが、兄の机の上には大量の書類が溜まっています。全てが今日中にこなさないといけない仕事ではありませんが、中には今日までに行う仕事もあります。……私の知つたことではありませんがね。私は私の仕事をこなせば良いですからね。

「仕方ない…呼び出しますか

そつ言つて新田先生は放送部へと連絡を取ります。教育実習生が職員室に呼び出しを受けるとは傑作ですね。

――――結果、学園中に兄を呼び出す放送が流れ、兄は職員室へとやつてきました。そして自分の机の上をみて驚いているよつです。

「ビリにいつてたんですか?教師の仕事は授業をするだけではない

ですよ

「知らなかつたから仕方ないじゃないか！？」

「知らなかつた？ちゃんと今日の朝、新田先生から連絡がありまし
たよ。忘れたんですか？まあ、頑張つて仕事を終わらしてください。
私は終わつたんで先に帰ります」

兄が職員室にきたときにはもう仕事は終わつていました。自分に支
給されたPCをシャットダウンして、荷物を整理します。

「ちょっと…？ リアン、手伝つてよ。リアンも2・Aの副担任じゃな
いか」

「私は副担任の仕事はしました。担任の仕事はあなたの仕事です。
自分に『えられた仕事はちゃんとこなしたい』。それが社会人として
のマナーです」

だいたい、仕事をほつたらかしてうるついているからこうなるん
ですよ。知つたことではありませんね。自分の不始末は自分でつけな
さい。

私はまだ残つている先生方に声をかけて職員室をあとにします。
さて、今日は何をしましようか。兄の存在を気にしなくて良い放課
後は実際に楽しいですね。

第十二話 リアンと学期末テスト

SIDE リアン

私たちの教育実習も順調?に進み、もうすぐ二学期も終わりです。同時に私と兄の教育実習期間も終わりになります。このまま教員採用となるわけではないでしょうな。多分、これからその説明があるんでしょうね。今、私と兄は学園長に呼び出されて、学園長室にいます。

「ネギ君とリアン君には才能あるマギスティル・マギ候補生として試験を受けてもらひ」

「マギスティル・マギ候補生? それは兄だけでしょうね。

「」の試験に合格したら正式に教師として採用するつもりじゃ。それで試験内容は、今度行われる学期末試験で2・Aを最下位から脱出せざることじや

……「」はなかなかの課題ですね。学年最下位を独走している万年ドベの2・Aは一筋縄ではいきませんよ。

「え…？ そんなことでいいんですか？」

全く兄は現状が理解できていませんね。担任なら生徒達の成績ぐら
い把握しておきなさいよ…。簡単にできていれば、私たちよりも経
験豊富な周りの先生方が既にそうします。

「つむ。一人で協力して頑張るのじゃぞ」

「それなら僕一人で十分です！！」

…は？ この人は何を言つてゐるんでしょうか。学園長の話を聞いてま
したか？ これは私たちの二人に出された課題ですが。大体、あなた
一人で何ができるのか不思議です。

「2・Aは『僕』のクラスです。担任の僕が責任を持つて最下位脱
出をさせます」

ああ、そういうことですか。私よりも自分の方が優秀だと言いたい
のですね。全く、安い虚荣心ですね。

「しかしのお、これは一人への課題じゃからそれはできんの」

「なら、クラスを二つに分けて、片方を兄が、残りを私が教えたら
いいんじゃないですか」

「これなら兄も私に負けないよう」に張り切るでしょうし、それが2-Aにプラスになりますしね。……まあ、兄が私に勝つなんて億につもないですがね。

「ふむ。 それならかまわんぞい」

「決まりですね」

「分かりました。…rian、「僕は負けないよ」

この人は勘違いも甚だしいですね。私たちは実習生とはいえ、生徒達の未来を預かる人間です。それを私より上に立つための手段とするなんて言語道断です。それを理解しているとは思えませんね。ホント、なぜこんなにも常識を知らないんでしょうか？

→ SIDE リアン陣営へ

「はい、これから学期末試験までの期間は、クラスを一つに分けて私とネギ先生がそれぞれ担当することになりました。この方が一人一人にきめ細やかな指導ができますので、わからない部分は遠慮せずに質問してください」

早速、2-Aは一つのグループに分けられた。ネギが教えるグループはそのまま教室を利用し、リアンのグループは別の空いている教室を使用している。

グループ構成としては、リアン組は、大河内アキラ、柿崎美砂、絡繹茶々丸、釘宮円、桜咲刹那、椎名桜子、龍宮真名、超鈴春、那波千鶴、葉加瀬聰美、長谷川千雨、エヴァンジエルA・K・マクダウェル、村上夏美、四葉五月、ザジ・レイニー・デイの合計15人。残りの16人がネギの担当である。

この分け方は簡単に生徒達に選んでもらつただけである。ネギに好意を寄せているのどかや雪広、まき絵といった面々は即決でネギの方を選んだ。逆にリアンと関わりのあるエヴァ、茶々丸、千鶴に真名と刹那はリアンを選んだ。あの面々は単純に雰囲気で選んだようだ。

「では、とりあえず英語の対策プリントを配りますので参考にしてください。自分で言うのもなんですが、結構当たりそうですよ。他の教科についても近日中に配布しますので期待をしていてください」

リアンは皆に特製の対策プリントを渡す。英語については前々から準備していた。学期末テストの問題を作成する教師の出題傾向を調査して作成したバイブルである。英語の他の教科は現在鋭意作成中であり、明日には完成見込みである。

「この時間は配布したプリントを元に進めていきます。分からぬことがあればその都度質問をしてくださいね」

リアンの落ち着いた雰囲気もあってか、一いつかりの生徒達は静かに勉強を始めた。

「SHIDE ネギ陣営へ

「今度の学期末テストで、Aが最下位を脱出しないと大変なことになるので（僕が）一大勉強会を行いたいと思いまーす！…リアンに負けないよう頑張りましょー！」

「…おお～っ…」

静かなリアンに対し、ネギの方はいつも通りである。お祭り騒ぎそのものでとても勉強を行う雰囲気ではない。しかも何か意味をはき違えている感じがある。ネギ個人の事情をこの場に持ち込むべきではない。ましてやリアンに負けないようこのことは明らかに必要である。

「ネギ先生！普通に勉強してもつまらない」のでゲームみたいにしてみよ

うよーー！」

「（…確かに鳴滝さんの言うとおりかも。楽しくてなおかつ勉強になれば一石二鳥じゃないか）いいですね。そうしましょうか？」

「さつすが、ネギ先生。話が分かるーー！」

……最早、お祭りである。本来の目的を見失っている以上、ネギとリアン。どちらが教師として優れているかは火を見るよりも明らかであろう。

SIDE 三人称

「それで？何があつたんだ？」

「何とは？」

一日の授業が終わり、リアンはエヴァの別荘にいる。そこで闇の制御を行つてゐるため上半身は裸で座禅を組んでゐる。そこにエヴァが近づいてきて、今日の授業について尋ねる。ちなみに千鶴は今、茶々丸との組み手を行つてゐる。

「今日の授業だよ。いくら学期末テストのためとはいへ、クラスを分ける必要は無いだろう?」

「ああ、それですか。今回の学期末試験は私と兄の最終課題となっています。課題内容が『2・Aを最下位から脱出させること』です。それを学園長から言われた際に、兄は『自分一人でできます』と言いきつたんですよ」

「それはそれは……」

「兄は自分が私より優れていることを証明したいんでしょうね。昔から兄は私の方が座学の成績が上なのが気に入らないようでしたしね」

鬱陶しいとでも言つよくな口調である。リアンにしてみれば別に兄の方が優秀と言われようが、自分が落ちこぼれと言われようが関係ないのである。人の評価なんて、本質を見ないものが多いのである。現実にリアンは落ちこぼれといわれているが、実際はネギよりも遙かに優秀である。リアンもそれは自負している。だが、リアンにとつてはそんなことはどうでもいい。リアンの目的はウェールズの村の人々の呪いを解くことただ一つである。

片や兄のネギは、妄想的に父を追っている。自分も父のような立派な魔法使いになるんだと。すでに相容れない道を歩んでいるのでりアンはネギのことなど氣にもしていない。ただ、ネギが突っ掛かってきたているだけである。

「まあ、自分の力不足を思い知らせるにはちょうど良い機会ですがね」

そう言つてリアンは制御に集中した。ただ、瞑想するだけだが、その背後には以前同様漆黒のオーラの様なものが漂つている。だが、それも煙の様に立ち上っているだけなので、害悪はないと判断できるし、上手く行っているのだと想像できる。

一方の千鶴は、と、その長い髪を纏め結い上げ、茶々丸との組み手をまだしていた。元々武道の経験もない普通の女子中学生だった

のでその動きはさきいちなさが残るが、それでも最初と比べたら図分
と良くなっている。

「はいー。」

繰り出されるのは右の拳。しかし茶々丸は特に交わしたりせず、自
身の左手で受け止める。お返しとばかりに繰り出した茶々丸の頭部
を狙った蹴りは千鶴が上体を反らすことによって交わした。
この一人の組み手は実戦的とはいえない。スピードもどちらかとい
うと遅い。一つ一つの動作を確認するように行っている。それもそ
のはず。この組み手の目的は体運びを目的として行っているからで
ある。rianがエヴァと行つよつた戦闘ではない。

「……千鶴さん。あなたは何故、ここまでするのがですか？」

組み手の合間に茶々丸が問う。

「こきなりね……。私がそうしたいからに決まってるわ

「その理由は?」

二人は互いに拳と蹴りを交互に繰り出しながら会話を続ける。

「あの子は、リアン君はこのままだといはずれ心が壊れるわ。本人は気付いてないでしようけど、あの子はなんでも自分で背負い込もうとしている。人に頼ることを知らない。今だつて彼は私のことなんか見ていない。そんなの寂しいじゃない。人は何でも一人でできるわけではない」

「…………」

「私はリアン君の全てを知っている訳じゃないけど、彼が孤独だということぐらいは理解できるわ。万が一彼の心が限界を迎えたとき、それを受け止める人間がないと彼は本当に終わってしまう。エヴァンジエリンさんには偽善だと言われたけど、それでも私は彼の、リアン君の側に居る。例え茨の道だとしても。それが私の恩返しよ。彼の過去を見てしまつた以上後、戻れないわ。それに、命をかけて救つてくれた男の子だもの。そんな勇姿に女の子は憧れるものよ」

この千鶴の言葉を最後に二人は再び黙々と組み手を続けた。千鶴が見たリアンの過去とは何か？千鶴とエヴァは何を話したのか。茶々丸は知らないが、それでも彼女、千鶴が本気だと言うことは理解できた。同時に自身の思考回路に表現できない違和感を感じた。故障というわけでもない。ガイノイドの茶々丸がその正体に気付くのはもう少し先のことである……。

第十二話 リアンと学期末テスト（後書き）

次の投稿は来週のはじめぐらいを予定しています。

第十四話 リアンと学期末テスト？

SIDE 三人称

「行方不明？」

「そ、うなんや。明日菜達バカレンジャーとのどかとネギ君が行方不明になつてしまつたんや……」

学期末テストまであと四日と迫つた朝、リアンの部屋に木乃香が駆け込んできた。

「その方達は何をしていたのか知つてますか？」

リアンは慌てる木乃香をまず落ち着かせる。そして口ぶりから事情を知つていそうなので聞いてみる。

「実はな図書館島に読むだけで頭が良くなる本があるんや。それでその本を読んで学期末テストで良い成績を取ろうって話になつて……」

「（頭が痛くなつてきた……）」

「今度の学期末テストで2・Aが最下位脱出しないとクラスが解散になつて小学生からやり直しつて話やから、明日菜達が慌てもう

て…

「…それは何の話ですか？そんなことは全くないですよ。そもそも義務教育期間である中学生を小学生からやり直しさせるなんてあり得ないです」

「わうなんー？じゃあネギ君が言つてた、『大変なことになる』ってどうこいつことや？」

木乃香は寮内で蔓延しているウワサがテーマであることに驚く一方で、疑問を抱いた。

「それは、2・Aを最下位脱出させないと私と兄がクビになると云うことです。だから『大変なことになる』と言つたんじゃないですかね」

呆れたように放すリアン。兄がそんな風に口走つているとは思わなかつたようだ。

「（だいたい、読めば頭がよくなる本なんてあるわけないじゃないですか。ほんと、そんなものを搜す余裕があるなら死にものぐるいで勉強すればいいものを…）…とにかく、図書館島に入る際にちゃんと届け出はしたんですか？」

「それは…」

「…全く、それは立派な不法侵入ですよ。ハア…大体の事情は分かりました。私から学園長の方に報告しておきます。ほら、もう登校しないと遅刻ですよ?」

「(めんな、リアン君。ウチも「んなことになると黙つてなかつたんや)」

「反省してゐるならそれでいいです。ただ、何かしらの処罰は覚悟しておいてください。さすがにそれは私でもどうにもできません」

「…うん」

「(朝から面倒なことになりましたね…)」

「新田先生、少しお時間よろしくですか?」

「どうしました?」

出勤したリアンは、まず学年主任の新田に報告することにした。社会人としてホウ・レン・ソウを欠くわけにはいかない。木乃香から聞いた内容を一部始終説明する。当然、魔法の本の下りは省いていふが…。学園都市内部、しかも学園施設で行方不明ということもある

り、いきなり警察へ連絡するわけにはいかない。リアンはまず、新田に報告して、次に学園長に報告するつもりである。

「… それですね、今から学園長にも報告しようと思つていまして、2・AのSHRをお願いしてもよろしいですか？ そろそろ時間になりますので」

「わかりました。ではSHRは私が代わりこなせておきます」

朝のSHRを新田に任せたリアンはその足で学園長室へと向かった。

「さて、説明していただけますかね？」

学園長室へ入るなり、リアンはそう切り出した。リアンは今回のネギ達の行方不明、近右衛門が絡んでいると予想している。いつもたときは下手に探らざ、正面から聞くのが上等である。

「何のことかの？」

「学園長が例の噂を流したんじゃないですか？」

「ウワサについては想像もつかんが、ネギ君達は無事じゃよ。ちやんと確認しておる」

「（やはり、学園長の仕業ですか…。私はウワサのことしか尋ねてないのに、勝手に喋つてくれましたね。大方心配になつたと思ってるんでしうね）…私はウワサのことしか尋ねてませんが、その口ぶりだと全部こ存じのようですね」

「フォツ！？」

「まあいいでしょ。それで？すぐに帰つてくれるんですかね」

「（ひらこ戻つてくるのはテストの前日になるはずじゃ）

この近右衛門の言葉にリアンは大きな溜息を吐く。

「じゃあ、その間の仕事及び授業への出席はどうするんですか？無断欠勤に無断欠席。容認できるものではないですよ。それに兄は担任の仕事が溜まりに溜まっています。これ以上溜まる様であればクラス運営はおろか、学校運営に支障をきたしますがね」

ネギも幾分か慣れてきたとはいえ、未だ一人で担任業務全部を処理できる訳ではない。ただでさえ溜まっているのに、今日から三日も手を着けなければどうなるかは目に見えている。

「ネギ君の仕事についてはリアン君に頼みたい。リアン君は副担任じゃから担任が不在の時は担任業務もこなす必要があるじゃない?それにネギ君達については公欠扱いにする」

予想通りである。11月まで予想通りの展開だと逆に怖くなるほどである。

「言つておきますが、私は勝手にいなくなつた兄の尻ぬぐいなんてするつもりは一切ありません。明らかに支障をきたしかねない業務しか行いません。それに公欠扱いをするなら今日から三日間、全年全クラスの授業を自習にして、テスト勉強の時間にしてください。そうじやないとフヨアじやないです。みんなは普段通りの授業を受けつつ、必死に努力してゐるのに、自分勝手な行動をして迷惑をかけている人たちが授業すら受けずにのうのうと一日中テスト勉強しているのはありえないです。教育者としてあるまじき姿です」

一気に捲し立てるようにコアンは告げていく。

「甘やかすのもいい加減にしてください。自分で課題をふっかけておいて助力をするなら、最初から課題を出さないで欲しいのですね。それでは己の本当の力に気づけませんよ?ただでさえ、兄は甘やかされて育つてゐるんですからね。ではそういうことで失礼します。……学園長の行動次第では私は事の一端始終を全職員及び全生徒に公表します。子供の戯れ言と思わないことですよ」

そついつてリアンはポケットからボイスレコーダーを取り出す。こ
こでの会話の一部始終は録音されていたのである。

「それと、兄たちの行動は明らかに犯罪です。処罰は当然受けなけ
ればなりませんよね？」

そう言い残してリアンは学園長室を後にした。

SIDE リアン

「慣れないことはするものじゃないな…」

全く、朝から疲れましたね…。しかし、これからどうしましょうか。
私が担当する15人はいいですが、兄が担当していた残りの生徒達
をほつたらかしにするわけにはいきませんしね。

「仕方ない…、クラスを元通りにしますかね。担任の仕事は期限が
迫っているものについてのみ私が処理しましょうか。あとは知った
事じゃないですね」

直接学園長が、事の全てが自分の計画と喋ったわけではないですが、
一応の言質は取れたからまあよしとしましょう。話の流れで今回の

件は学園長の関心が濃厚であると判明しましたし。

「さて、とりあえず授業の準備をしますかね。事情はSHRで新田先生が上手く説明してくれたでしょう」

馬鹿な兄のことは放つておいて私は自分の仕事をしますかね…。バカレンジヤーのみなさんも大丈夫でしょう。とりあえずテストさえ受けてくれれば、あとは他の皆さんでカバーできます。兄の方のグループがどのくらい勉強できているのか知りませんが、私のグループは全員成績アップすることは間違いないでしょう。

「ホント、自分で出来ると書いておいて、全然出来てないじゃないですか。出来ないのなら最初からできないと言えばいいものを…」

「これを機に、新田先生あたりに担任を変えてくれと言いますかね…。あんな兄が担任だと生徒達の人生を無駄にしかねないですからね。」

第十五話 リアンと学期末テスト？

SIDE 三人称

「遅い……」

リアンは一人苛ついていた。今日は学期末テスト当日である。生徒達は最後の足搔きと言わんばかりに、登校中やSHRと一限開始時刻の合間のわずかな時間も利用して勉強に励んでいる。もちろんいつもお祭り騒ぎの2・Aも同様である。

ネギ達が行方不明になつた翌日、つまりリアンと近右衛門のやりとりの後の最初の授業に於いて、リアンはウワサの真相を話した。リアンとしてはこんな自己都合を生徒達に放すつもりはなかつたのだが、変な勘違いをして、明日菜達のような行動を起こされではいけないので、やむを得ず話した。

その結果、雪広がクラス全体に発破をかけ、どんなことがあつてもネギ先生をクビにはさせないと張り切つたのである。動機は不純であるが、やる気になつてゐるのはいいことである。

そんなこんなでテスト当日を迎えたのだが、当の行方不明組はまだ登校していないのである。もちろんネギもまだ出勤していない。そしてテスト開始を告げるチャイムが鳴り響く。その時であった。

「　「　「　「　「遅れる――――」　「　「

「みなさん、もう少しです。急いでくださいー。」

リアンの眼前約100メートルあたりに一人の少年と六人の少女が必死に駆けてきている。その正体は件のネギとバカレンジャー+1である。そこに何故か早乙女ハルナも加わって合計8人となっている。

「完全な遅刻です。何をしてるんですかあなた達は…」

目の前で息を切らしている全員にリアンはそう告げる。内心、どこがテスト前日に帰つてくるんだと、学園長への不満を露わにする。

「あなたたちは別の教室でテストを受けなさい」

遅刻組は別室でのテストとなる。これは温情と思うが、このテストを受けないと通信簿が書けないので、生徒全員がテストを受けることになっている。リアンの指示に従つて生徒達はすぐに別室へと移動する。そしてそれにネギもついて行こうとするが…

「あなたがついて行く必要はありません」

リアンがそれを制止する。当然である。教師がこれからテストを受ける生徒についていく必要はない。

「まず、ネギ先生には説明していただきたい」とがいくつかあります。特に、この二日間一体何をしていたのか

「それは……」

「話せないようなことをしてましたんですか？」

周りにはリアンとネギ以外誰もいない。本来なら一人はテストの時間、職員室でいいといけないが、ここはリアンが無理を言って、正面玄関で遅刻者を待つように配置してもらつたのである。

「ちゃんと勉強を教えていたよ……」

「誰ですか？」

「明日菜さん達に決まつてこるよ」

「では、丸三日間放置されていた、あなたが担当したクラスの半分の生徒は？それに教師としての仕事はどうするんですか？」

「仕方ないじゃないか！図書館島の地下にいたんだから……」

リアンの責め立てるような言葉にネギは反論する。

「そこですよ。読めば頭がよくなる魔法の本を探しに図書館島へ行つたんですね？そんなものが存在するはずがありません。夜間の図書館島に無断侵入は立派な犯罪です。生徒達を止めることもせずに一緒に歩いてどうするんですか…。教師ならそこは意地でも止めなさい。そして、なぜ図書館島で三日間も居たんですか？すぐに出手段を捜しなさい。あなたたちはこの三日間、無断欠勤無断欠席扱いとなっています」

近右衛門はいろいろと思案したようだが、行方不明となつた面々を公欠扱いとすることはしなかつた。rianが言質を取つていたといふこともあるが、それに加えて学年主任の新田を始めとした面々が理由もないのに公欠扱いとするわけにはいかないと言つっていたのがある。このあたりもrianの考え方通りである。

「あなたは教師の仕事を魔法使いの修行の延長と考えていませんか？」

「ビーしか違つんだよ？僕は卒業課題でここに来てるんだよ」

「だからあなたは駄目なんですよ・卒業課題＝魔法使いの修行ではないんですよ。卒業課題になんて書いてありました？『日本の学校で教師をすること』ですよ。『日本で教師をしながら魔法使いの修行すること』じゃないんですよ。教師をすることと魔法使いの修行をすることは全くの別物です。そこを混同している時点で現状を把握できていませんよ」

rianは今までの鬱憤を晴らすかのように次々に口撃していく。

「教師という職業は生徒達の人生を左右する仕事です。あなたの行動一つで生徒達の人生を滅茶苦茶にしてしまうこともあるんですよ？そこを理解しなさい。軽率な行動は慎みなさい。何でもかんでも魔法で解決しようとするな。魔法は万能ではないんです。むしろ危険な力。そうほいほい使って良いものではないのですよ」

「それは違う！魔法は人々の為に使う力だよ。お父さんみたいに困っている人がいたらそれを助ける為に使うのが魔法使いの本分じゃないか」

「あなたは麻帆良に来てから人のために魔法を使つたことがありましたか？あなたは全て自分の保身のために使つてゐるじゃないですか。以前の惚れ薬騒動だつてそう。あなたは明日菜さんへの謝罪の為にそれを作つた。謝罪するなら誠意をもつて言葉で謝罪しなさい。今回だつてそう。あなたは最終課題に落ちたくないから魔法の本なんかに頼つた。そんなものに頼るならなぜ、必死に生徒達に補習とかをしないんですか？あなたは結局自分が樂をするために魔法という力に頼つているだけでしょうが」

「ちゃんと富崎さんを助けるために魔法を使つたさー！」

「それは褒めるべきですが、その後が問題です。現場を見られた明日菜さんの記憶を消そうとしたのでしょうか。魔法が一般人にバレたときにはちゃんと対処手順があります。記憶を消すというのは最終手段です。それを知らず、自分がオコジョになりたくないという理由で一人の少女の記憶を消そうとした。ただでさえ未熟な魔法使いが記憶消去の魔法を使えば特定の記憶以外、つまりその人の記憶全てを消すことになりますよ。そうなったときにあなたは

責任が取れますか?「

「そ・それは……」

全てをリアンに論破されたネギは次第にその声が細くなつていき、黙りこくつてしまつた。

「自分の行動がどんな結果を招くか考えてみてください」

リアンはネギに背を向け、職員室へと足を進める。もう遅刻者はいないようだ。

「何をしてるんですか?あなたはあなたの仕事があるでしょ?一日分の仕事が溜まつてますからそれを早く処理してください」

その場に立ちつくしてこるネギにリアンは告げる。

「あなたが三日間不在にしていた」と仕事が溜まつて、学年全体にも影響が出始めているんですよ。早くしてください――

この後、職員室に戻ったネギに新田の雷が落ちたのは言つまでもない……。

さて、学期末テストの結果については2・Aは無事に最下位脱出を果たした。学年全体の3位という結果であった。クラス個人の成績としては全体的に向上していた。特にリアンが担当した半分はかなり成績が伸びていた。

これにより、リアンとネギは正式に教員採用となつた。そして、ネギとバカレンジャー+1の処罰に関しては、それぞれ反省文の提出と一ヶ月の部活動禁止、ネギは給料カットという処罰になつた。甘い気もするがリアンとしては特に気にしていなかつた。

そして変わったことが一つある。ネギがリアンをことわりに避けるようになつたのだ。自分の考えを否定されたのが特に気にくわなかつたらしい。今まで自分の自分は間違つていない。自分のように行動しないリアンが間違つていると信じ込んでいるようである。これまで甘やかされてきた弊害がここにきて顕著に表れ始めている。

ネギは、今までの自分は何をしても怒られることはなかつた。それは自分の行動が正しかつたからだ。現に学園長は何も言つてこない。タカミチも何も言わない。いろいろ言つてくるのはリアンと、魔法を知らない一般人の先生だけだ。…… そうなのか、リアンは僕の才能がうらやましいんだ。リアンは魔法が使えない。僕のように自在に魔法が使えないから、それができる僕がうらやましいんだ。…… こう考えるようになつっていたのである。

第十六話 才能を（兄）を凌駕する努力（弟）（前書き）

リアン対ネギです。

吸血鬼騒動は起しません。その代わりの話になります。

第十六話 才能を（兄）を凌駕する努力（弟）

SIDE 三人称

「……はい？」

「だから、お前と坊やが戦うことになった」

学期末テストも終わり、麻帆良学園中等部はまた新学期を迎えることになった。2・Aの面々も最上級生の三年生となつた。そして同時にリアンとネギも正式に教員として迎えられた。担任はネギで、副担任がリアンである。……職員室内の話によると、学年主任たちはリアンを担任にと推したそうだが、最終意志決定者である近右衛門がそれを認めず、ネギを担任にしたそうだ。まあ、リアンとしては担任になつて仕事が増えるのは嫌だったのでどうも思わないが、他の教師達はうなだれたそうだ。

そして新学期が始まつて一週間経つた今日。リアンはいつもの日課通り、一日の勤務を終えてエヴァの別荘で修行をしている。今日は千鶴は保母のボランティアのため不在である。リアンが修行を初めて一時間経つたぐらいにエヴァと茶々姉妹が別荘へとやってきて、そう告げたのである。リアンは最初、エヴァが何を言つているのかが理解できなかつた。

「なぜ、私が兄と戦う必要があるのでですか？」

「坊やの強い希望だそうだ。なんでもじじいに直談判したらしいぞ。
当初の予定だと私が坊やと戦う予定だったんだがな」

「……ちょっとどうやらも理解に苦しむのですが」

「当初の予定では、正式にリアン先生とネギ先生が教員採用となつたときにマスターが一人と戦闘を行う予定でした。これはお一方が麻帆良に来ると決まった時からの予定です。目的としては自分たちよりも実力が上の存在がいるということを理解させ、これから魔法使いとしての修行におけるカンフル剤とする。とのことです」

茶々丸が簡潔にエヴァが戦う理由を述べていく。それを聞いたリアンは納得した。確かに漠然とした修行よりも明確な目標があつた方が修行に力は入るのだ。

「それとネギ先生は、学園長に直談判する際に『リアンに現実を教えるためにリアンと戦わせてください』と言つたそうです

「……何が『現実を教える』だ。何様のつもりですかね」

「絶対二勝ネエノニヨク言ウナ。アノ餓鬼」

「だが、坊やには戦う理由があつたとしても、リアンには理由がないだろう？そこでだ。戦闘を行う見返りとして、図書館島の深部の禁書の閲覧を許可してくれるらしいぞ」

「……ふむ。それはなかなか魅力的ですね」

図書館島には世界でもここにしかない書物が多くある。そしてそれらは一様に図書館島の深部に保管されており、一般人はおろか魔法関係者すら公開されていない。

「そこまでして私と兄を戦わせたいのは何故でしょうか？」

「坊やに自信をつけさせたいんじゃないか？それにお前は学園の魔法使いの前では一回も戦ったことがないから、お前の実力も見ておきたいんだろうつな」

「自信ですか…。つけるどこのか、兄は自信の固まりだと思つんですね」

「ネギ先生は自分が頑張っているのに副担任に過ぎないリアン先生が教員の方々に信頼されているのがお気にならないようです。それに加えてリアン先生が魔法が使えないから、自在に使える自分がうらやましいのだと思われているようですね」

「なるほどね。だから現実を教えるですか…」

リアンはこう予想した。魔法を自由に使える自分が優秀だと私に思い知らせたいのだと。そのためには戦闘を行い、私を自由自在に使える魔法によって打ち負かすことが一番だと。

「まあ良いでしょ。その申し出を受けましょ」

「ルールは相手を致死に至るような攻撃をしないこと。それのみじや。審判は儂が務める。異論はないの」

「はいー。」

「ありません」

リアンが申し出を受けた翌日。リアンとネギの模擬戦は今、まさに行われようとしている。舞台はさすがに麻帆良とするわけにはいかず、学園が所有するダイオラマ魔法球の中で行われることになった。なお、この模擬戦を観戦するのはエヴァと茶々姉妹、そして高畠と審判を務める近右衛門のみである。リアンは遠くで観戦している者達に気付いているが、ネギは気付いてない様子だ。

父からもらった杖を構え、これから出来事を想像して目を輝かせているネギと、ただ静かに佇んでいるリアン。対照的な二人である。

「では……始め！ー！」

近右衛門が開始の合図を発する。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル。光の精霊19柱。集い來たりて敵を擊て。『魔法の射手・連弾光の19矢』！！」

ネギが放つた魔法の矢はrianに向けて一気に飛来する。そしてrianが立っていた地点にそれが降り注ぐ。

「これなら……」

その光景を見てネギは勝利を確信するが……

「どこを見ているんですか？」

その背後にrianはいた。特に衣服の乱れもなく、息一つ切らすことなく立っていた。

「くつ！ラス・テル・マ・スキル・マギステル。風精召喚。剣を執る戦友」

それを確認したネギはすぐさま次の魔法を使ふ。風の中位精霊による複製が8体。それぞれ手に持っている剣でrianに襲いかかる。

「そんな！？」

しかし、襲いかかった風の精靈は無手のリアンにことりとく殴り、蹴飛ばされる。魔法を使わない純粹な体術のみで。

「魔法を使えるといふことはそれ即ち強さではないですよ」

リアンはネギに接近して、ネギが反応できるであらひつ速度で拳を繰り出す。

「仮に最強の魔法が使えても、体術が未熟だとこうなる」

ネギも慌ててリアンの拳を受け止めるが、次の速度を上げた蹴りは止められず側頭部にまともにそれを受ける。蹴られたネギは地面をバウンドするように吹き飛び。

「逆に魔法が使えなくても体術を極めれば、魔法使いでもたどり着けないような高みに到達できます。あなたは魔法の知識ばかり追い求め、それを行う自分の肉体を鍛えることを怠った。だからその魔法を取り上げると……」

リアンは先ほどの蹴りの際にネギの魔力封印を行った。

「…あれ？ま、魔力が！？」

それに気付かなかつたネギは自分の魔力が感じられないことに驚愕しつらたえている。

「どうです？魔力のない体は。あなたは常に魔力により身体能力を強化しますが、それが無くなればあなたの肉体は10歳の子供のそれです。とても戦闘を行える体じやありません」

「そこまでじゃ！」

ネギの魔力を封印したところで近右衛門が終わりの合図を出した。これ以上の戦闘は無理だと判断したのだろう。事実、ネギはこれ以上戦闘できない。肝心要の魔力を封印されてしまつてはネギに攻撃手段はないのである。故にこの模擬戦はリアンの勝利という形で終わつた。

「分かりましたか？これがあなたの力です」

そしてリアンはネギの魔力封印を解除する。当のネギは信じられないといった目でリアンを見ている。ネギもリアンと同レベルの頭脳を有しているので、あの一瞬の魔力封印がどれほどの技術かは理解

できる。ネギに同じ事をやれと言っても絶対に出来ないその技術は、ネギにリアンの方が魔法技術が優れていると認識させるのには十分すぎるものであった。

自分が思い描いていた結果とは大きく異なる結末に、ネギはただ俯くしかなかった。

第十六話 才能を（兄）を凌駕する努力（弟）（後書き）

結構、あつたりと終わらせてみました。

第十七話 ネギの相棒来る

SIDE 三人称

「はあ～…」

リアンとの模擬戦の翌日、ネギは一人部屋で溜息をついていた。先日の一件はネギにとって衝撃的な出来事であった。ネギとしてはあの模擬戦で自分がリアンを倒して、自分が優秀だとリアンに思い知らせるはずだった。しかし結果はリアンの力をまざまざと見せつけられ、ネギは一撃もリアンに攻撃することが出来なかつたのである。

「（リアンはどうやってあんなに強くなつたんだろう…。魔法が使えないのに、なんであんなに強かつたんだろう。もしかして、誰かに教えてもらつているのだろうか…。そういえばあの後、エヴァンジエリンさんと一緒に帰つて行つたつけ）」

朝からずっとこの調子である。この部屋の主の明日菜と木乃香は出払つていて、今ここにはネギしかいない。部屋の雰囲気もネギの雰囲気同じく、かなりどんよりとしている。

「フッ……。何かお困りのようだな兄貴」

堂々通りをすること幾十回。そろそろ血殺でもするのではないかと思つてしまつ。そうなほど落ち込んでいるネギに声をかけるモノがいた。

「え？」

「エウカヒドタア 兄貴」

ネギは誰に声をかけられたのか分からず部屋の中を見渡すが、人影は全くない。するとどうだらう。なんとその声はネギの足下から聞こえてくるのだ。

「ああ～～っ！…カモ君じゃないか！？」

「お久しぶりです。兄貴！…」

そこにいたのは一匹のオコジョであつた。喋るオコジョとはなんとも珍妙な生物であるが、どうやらネギとは旧知の仲のようである。それもそのはず、ネギとこのオコジョ、名をアルベル・カモミールというが、このオコジョが罠にかかっているときに助けたのがネギなのである。その件以降、このオコジョはネギを兄貴と慕つよつになつたのである。

「なんでカモ君が日本に居るの？」

「冗貴の為にはなるばくやつてきましたー。」

ビシッと敬礼するオゴジコ。それに感動するネギ。ジーンの三文丸西
だろうか。だが、さつきまでの鬱な雰囲気はなくなつた。

その頃、リアンは一人図書館島の深部に来ていた。ネギとの模擬戦
闘の報酬というか見返りとしてここへの立ち入りを許可してもらつ
たので、早速やってきたというわけだ。

「へえ…。これは凄い」

目に付く本全てが初めて見る本ばかりでリアンは久しぶりに興奮し
ていた。これだけあればどれかに石化のことについて書いている本
もあるはずだ。持ち出しを許可されなかつたのは残念であるが、見
れるだけでもよしとしよう。

「では、早速…」

リアンは、とりあえず田の前にあつた本から読んでいくことにした。幸い今日は休日であり、予定もない。リアンは今日一日を「じで過ごす」と決意した。

「なるほど……兄貴の弟はそんなに強かつたんですか」

「うん。どうしてあんなに強くなつたのか不思議なんだ……」

「そいつは誰かに戦い方を教えてもらつているに違いないですね」

「だとしたら一体誰が？」

「そいつは……弟さんはだれかと一緒にいなかつたですかい？もし、だれかを師としているなら多分、弟さんとよく一緒にいる人間がそうに違いない」

「うへん……。リアンとよく一緒に居るのは……」

「」でネギは今までのリアンを振り返つてみる。特に誰と一緒に行動することが多かつたかがネギはリアンの姿はほとんど授業中しかみていない。放課後は自分の仕事をこなすのに精一杯でリアンのことを気にしている余裕がないのだ。しかし、その僅かな記憶でもある程度の人物は絞れた。

「ウチのクラスの那波さんやエヴァンジエリンさんと
かとよく一緒にいるけど…」

その言葉にカモは目を見開く。

「あ、兄貴…。エヴァンジエリンって…」

「エヴァンジエリンさんがどうかしたの？」

カモはエヴァンジエリンといつ名前に聞き覚えがあつたが、ネギは
違うようだ。

「兄貴、そのエヴァンジエリンって知る人ぞ知る有名人だぜ！？」

「ええっ！？」

カモはネギのパソコンからまほネットに接続して一つの情報を表示
させる。

「…」いつで間違いないかい？」

「う、うん。この人だよ」

「ほら、冗貴！」を見てくれ。15年前までは600万ドルの賞金首だつた奴だ。闇の福音と呼ばれ、恐れられた真祖の吸血鬼。最強の魔法使いの一人つすよ！！」

「ええええええええええええええ！」

この日一番のネギの絶叫が部屋に響き渡った。あまりの音量に近くにいたカモは耳鳴りが治まらない様子だ。

「なんでそんな人が、麻帆良で学生をやつてるのさー？」

「俺つちもそこは知らないが、こんな話は聞いたことがある。闇の福音エヴァンジエリンは極東の日本という島国で冗貴の父親『サウザントマスター』に倒されたってね…」

カモの言葉にネギは一瞬思考を停止する。そしてあることに気がついた。

「…つてことはお父さんのこと何か知ってるかも！？」

父親の名前がでた瞬間、今まで考えていたリアンのことなどどこかに飛んでしまったようだ。だからこそ気付かない。エヴァンジエリンがナギと出会ったのは15年前で、ネギがナギと最後に会

つた6年前よりもさらに昔のことであると。故に行方など聞いても絶対に分からぬことも。しかし、ネギは止まらない。父の杖を持つて、部屋を駆けだした。制止をする力ものことなんか眼中になく、一心不乱にエヴァンジエリンの所へと向かう。

第十八話 ネギと明日菜

SIDE 三人称

「ああ～暇だ…」

エヴァンジエリンは春の麗らかな日差しの元、自分の家でだらけていた。今日はリアンはいないので別荘に入る予定もないのに、自堕落な生活を送っている。

「マスター、お茶が入りました」

「ああ…」

茶々丸が淹れた紅茶にも特に反応を示さず、テーブルに突っ伏してしまである。

「ああ…マスター。そんなにもリアン先生が恋しいのですね」

「ぶふうーーっ…！」

茶々丸の突然の言葉にエヴァは飲んでいた紅茶を吹き出してしまう。

「…」応聞いておこいつか。なぜそつ題ひへ？」

「何故つて…。マスターの今の状態はいわゆる恋煩いとこつものでしょひ？」

「誰が恋煩いだ！？」

「いえ…。リアン先生を相手にするマスターは凄く楽しそうなうのでつきりそういうものだと…」

「このボケ口ボー！いつから貴様はそんな口を利くようになつた！？とこづかどこからそんな知識を得た！？」

「それは禁則事項です」

「だあああああつーーーー！」

エヴァンジヨリンの家に於いて最近見られるようになつたやりとりである。茶々丸がエヴァをからかう。これまでの茶々丸からは考えられなかつた。リアンと出会つたことにより茶々丸は『人間らしくなつた』。

「ヨク飽キネエナ…」

エヴァと茶々丸のやりとりを静観するチャチャゼロ。今日もエヴァ

ンジーリン家は平和である。

「ちよつと待つなとこよ、ネギー！」

「兄貴〜！！」

ネギは一路エヴァンジーリンの家に向かっていた。そしてそれを追いかけているのは明日菜とカモである。ネギが部屋を飛び出た直後に明日菜が部屋に帰ってきて、そこでカモを見つけたのである。最初はカモを訝しんでいた明日菜だったが、事情をカモから説明されると明日菜は直ぐにネギを追いかけたのである。カモもまさか明日菜が魔法のことを知っているとは思ってなかつたが、ネギと同じ部屋に住んでいるならそれもありえるということもあって、思いの外すんなりといったのである。

「だから待ちなさいつて！」

「何を…って明日菜わんー…？」

ネギに追いついた明日菜は、ネギの右腕をつかんで急停止させる。

「話は」のオーバージョから聞いたわよ」

「ええつー?」

「兄貴。今自分が誰の所に行こうとしてるのか分かってるのか?あのHヴァンジエリンだぜ?」

「それでも、お父さんのことを知ってるかもしれないんだよ?」

「だからって、そんなに焦る」とはないぜ兄貴。Hヴァンジエリンが逃げるわけでもないだろ?」

「確かにそうだね…」

「大体ねえ、あんた焦りすぎなのよ。少しは落ち着いて行動しなさいってのよ」

そう言つて頭をポカンと叩く明日菜。明日菜は基本子供、ガキンチヨは嫌いだったが、ネギはそこらの餓鬼とは違っていた。最初は怪訝に感じていたが、何事にも一生懸命に取り組むその姿は、その認識を改めるには十分だった。まあ、そんなネギでもリアンと比べるとどうしても子供になつてしまふのだが…。同じ年なのに不思議なものである。

「私もついで行つてあげるからとりあえず落ち着きなさい。いいわね!」

「は、はい」

明日菜は何故かネギのことを放つておけなかつた。どのよつに言い表したらしいのか分からぬが、このつ、他人の様な気がしないのである。

こうして、ネギは明日菜とカモと共にエヴァンジエリン宅を目指すのである。

「む……」

茶々丸とのじやれ合いを終えたエヴァンジエリンは自宅に近づいてくる気配を察知していた。暇だ暇だと唸つていた先ほどの様子はなりを潜めでいる。基本エヴァンジエリンの元を訪れる人物は少ない。ここ麻帆良でエヴァンジエリンと関わりを持つているのは、学園長の近右衛門とタカミチ。茶々丸の制作者である超鈴音と葉加瀬聰美。最近ではリアンと千鶴ぐらいである。そのどれとも違つて気配にエヴァンジエリンは一体誰が来たのかと首をかしげる。

「茶々丸」

一言自らの従者に告げると、従者たるガイノイドは無言で玄関へと

向かう。茶々丸も自身のセンサーで人の気配を察知していたので、詳細を話す必要は無い。そして家のインターホンが鳴り響いた。同時に茶々丸が玄関の扉を開ける。

「これはネギ先生、それに神楽坂さん。よつよつそいらつしゃいました」

「い、こんにちは。え、エヴァンジエリンさんはいらっしゃいますか？少しお聞きしたいことが…」

そこで茶々丸は家の中にいるエヴァーと視線を向ける。実際にエヴァを見ているわけではないが、今の一連のやりとりはエヴァーも聞いている。そこで初めてエヴァーは重い腰を上げて玄関へと向かう。

「私に何の用だ。ぐだらん話なら帰れ…」

玄関へと出てきたエヴァーは一言もしゃべらなかった。

「じ、実はお父さんのことで聞きたいことが…」

それに対してネギはおどおどした様子でそう答えた。ネギの父親の話、ナギの話ならエヴァーも興味はあるが、リアンから奴が生きていることは確認している。それにリアンの話通りネギの手にはナギの杖がある。リアンから聞いた話だと、ネギはナギの行方を追いま

たナギの様な偉大なる魔法使いになることを最優先している。そしてネギの側には神楽坂明日菜とその肩に乗るオゴジョ妖精。おどおどとした様子ではあるが、ネギのその瞳には希望の色が見て取れる。それと対照的にオゴジョ妖精はビクビクしている。以上の情報から、エヴァは的確にネギの思考を推理する。

「（坊やは私に父親の行方を知らないか聞きたいか…。と言つことは私の素性に気付いたというわけだ。そしてその情報源は肩に乗る小動物。神楽坂は着いてきただけだな）…話すことは何もない。生憎私も奴のことは知らん」

故にこう答えた。まあ事実である。呪いをかけるだけかけて、そのあと蒸発したんだから行方なんぞ知るわけもない。

「そ、そうですか……」

畠に見えて落ち込むネギ。深い溜息をついて肩を落とす。

「それだけか？なら帰れ」

「ま、待ってください。実はもう一つ聞きたい」とが…」

ネギ達に背を向けたエヴァをネギは引き留める。

「リアンはエヴァンジョンさんの弟子なんですか？」

この言葉にエヴァは足を止める。茶々丸も若干驚いているようだ。まさかネギがそこまで考えが回るとは思っていなかつたのだ。一応ネギはメルティアナ魔法学校を首席卒業しているので頭が悪いといふわけではない。むしろかなり良い方である。……非常識な部分は多々あるが。

「…奴は私の弟子ではない。私は奴の目的に協力しているだけだ」

エヴァはこう答えた。事実リアンは弟子ではない。『闇』の制御については手ほどきしたが、リアンは既に大成しつつある。そこにエヴァの教えが入る余地はないのだ。むしろ、リアンは魔法使いとしては特異な存在であるため、例えエヴァでも、指導することは難しいのである。できることといえば体術などを教える程度である。だが、それも師弟関係といつほどではない。

「なら、リアンはどうやってあんなに…」

さうに悩むネギを放つておいてエヴァはその場を後にする。これ以上話すつもりはないとの意思表示である。そして茶々丸も一礼して玄関の扉を閉める。

「兄貴、残念だな…」

「うん…。リアンに勝つにはどうしたらいいのかな…」

「ふつふつふ…。それならいい手がありますぜ」

エヴァーの家を後にしたネギ達は来た道を戻っている。落ち込むネギの肩上でカモは嫌らしい笑みを浮かべる。

「パートナーですよ。パートナー。一人で駄目なら一人で相手をすればいいんです」

このカモの言葉にネギは一筋の光明を見つけたように俯いていた顔を上げる。

「そつかその手があつた！！！でもカモ君。肝心のパートナーになつてくれる人がいないんだけど」

「それならここにいるでしょう…」

「ええっ！？私！？」

カモは明日菜をパートナー候補に挙げる。それが何なのか分からない明日菜であるが、なんとなく厄介な雰囲気を感じ取っていた。

「俺っちの日に狂いはねえ。姉御は肝も据わってるし、兄貴を追いかけたときの足の速さは見事だつたぜ。姉御なら兄貴のいいパートナーになるはず!! パートナーになると強力なアーティファクトつてものが手に入る。姉御もこちらの世界に関わつてしまつた以上、自己防衛の手段は持つてゐるに越したことはないですよ」

「…う、確かにそれはそうね。でもパートナーって何をすればいいのよ?」

「簡単なことよ。兄貴と姉御がキスをすればそれでOKでさあ

「「ええ~つ!~?~?」

「嫌よ。こんなガキンチョなんか!! 他の方法はないの!~?」

「そうだよ。キスの他にも血の交換でもできただはずだよ!~!~

「なに?他の方法があるなら、そっちでやるわよ」

すっかり明日菜は仮契約に乗り気のようである。カモとしてはキスの方が都合（お金の面）。オゴジヨ妖精は仮契約の仲介をすると報酬がもらえるのだ。その報酬は仮契約の方法によつて金額が上下する。一番高額なのはキスによる仮契約である）がいいのだが、他の方法でも結局報酬は手に入るので一人の言うとおりの方法ですることにした。

そしてこの日、ネギは神楽坂明日菜というパートナーを得た。同時に神楽坂明日菜。本名アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エントテオフュシアの運命の歯車も再び回り始めることがなった……。

第十八話 ネギと明日菜（後書き）

最後は「都合主義になつてしましました。次から修学旅行編に突入します。

第十九話 いざ行かん！古都京都（前書き）

短いです

第十九話 いざ行かん！古都京都

SHIDE リアン

「よく来ててくれたの二人とも」

現在私は学園長室に呼び出されています。もちろん兄も一緒です。といつーことは何かが起りますね。ええ、十中八九そうですね。

「実はのお主達にちと頼みたいことがあるんじやよ。今度の修学旅行、お主達のクラス2—Aは京都に行くことになつてゐる

ちよつと明後日からですね。クラスの面々が私たちに日本の文化を見せたいということでわざわざ修学旅行先を国内の京都にしてくれたんですね。本来なら自分たちの行きたいところを選択して欲しかったのですが、クラス全体が京都で一致していたので問題はないでしよう。

「しかしじゃ。実は先方が今回の修学旅行の受け入れを渋つておつての…」

「先方つて市役所とかそんなところですか？」

「それは違う。先方といつのは関西呪術協会。日本古来より存在する陰陽師などの組織じや。ここ関東魔法協会と似たような組織じや。

実はの、関東魔法協会と関西呪術協会は仲が悪くての、それで今回の修学旅行の引率教諭に魔法使いが故にその受け入れを渋つてあるといつて訳じや

「実にくだらないですね。修学旅行を通じて何か工作をする訳でもないのに…。自分たちはさんざん麻帆良に侵入しようとしているくせに生意氣ですね。

「儂としてもこの問題はどうにかしたいと思つておる。やいでじや、今回の修学旅行を良い機会として、儂からの親書を西の長に届けて貰いたい。君たちに東と西を架け橋となつてもらいたいのじや」

「面倒ですね…。大体西の長は学園長の娘婿だったはず。こんな回りくどいことはせずに話し合ひを持ってばそれで済むはずですがね。

「わかりました！その役目僕に任せてくれさい…！」

「うむ。それとこれはいつも頑張つている君たちへの褒美じやが、京都にはサウザントマスターが日本に滞在するときに使つていた別荘がある。この修学旅行でそこを訪れてみるのもいいじゃろつ

「えつ…ほ、ほんとですか…？本当に父さんの別荘があるんですねか…？」

「嘘ではないぞ。そのためにもしつかり頼んだぞ…！」

「はい……」

父の別荘とこいつHサで釣り、組織の長から娘への親書の受け渡しと
いう仕事をさせることで自信を付けさせる。よく考えていますね。
兄にはうつてつけのカンフル剤ですね。西の長は確か父の友人の一
人だったはず。おそらくそのあたりも学園長は計算に入れているの
でしょうね。千鶴さんのこと也有って、私としては西にはいい印象
がありませんが、ここは私情を持ち込むべきではありませんね……。

「…………はい」

「よいしょ。親書については後日ネギ君に渡すから、しかと頼んだ
ぞ……」

頼まれるのはいいんですが、しっかりと引率教諭の仕事をするのが
最優先事項なのを兄は理解できているのですかね……。

学園長の話も終わり、一日の仕事を終えて自宅に戻ってきたのです

「…………これは何事ですか？」

が、玄関を空けて、リビングに入つてみると、そこには千鶴さんがいました。まあこれはいつものことなんですが、リビングが服や、…その…下着で溢れています。

「おかれり、rian君」

「はい」

「ちよづかよかった。rian君も一緒に選んでくれる？修学旅行の準備をしてるんだけど、どの服がいいのか迷ってるのよ」

「こうより、あなたはどういうからだけの量を持つてきたんですか？そして何故私は選ばそつとする。私も10歳ですが一応男ですよ。異性に自分の下着を見せびらかすような真似は謹んでほしいのですが…。」

「ほり、これなんかどう？…」

そう言って千鶴さんは一着の服（下着）を私に見せてきます。

「え、基本的に千鶴さんの好きなのを選べばいいんじゃないですか？男の私の意見より御自身の感性で選んでください」

さすがに面と向かって直視できません。

「いいじゃない。男の子の意見は参考になるものよ。『ここにいる』とね」

…あなたは修学旅行で何をする気ですか。

「千鶴さんなら向でも似合つんじゃないでしょうか？」

私に近づいてくる千鶴さんに背を向けますが、ふり向いたところでフローリングに無造作に置かれてあるモノが畳に入ります。…これは計算してるんでしょうか？

「じゃあ、rian君はどうるのが好きなの？」
「…こんなのが？」

…最近の私、なんか千鶴さんのおもちゃになってしまってこのようないいな時は逃げるに限ります。

「すいません！私は別荘に行っていますね！」

「敵前逃亡です。名誉ある撤退です。そのままあそここてば私の何かが壊れてしまうのです。

「あ～あ。行っちゃったわね…」

ふふ。やっぱリアン君も男の子ね。いつもあんな風に感情を表に出せばいいのに。リアン君は自分の感情を抑えすぎている。あのときの怒りや今のような恥ずかしさ。少しずつだけど感情を表現してくれるようになってきてる。

リアン君はエヴァンジエリンさんにすら自分の感情を見せない。事情を知る私たちにぐらりと甘えてくれてもいいのに。

「でも、少しずつだけど進展してるかな」

私だって、自分の下着をこんな男の子の部屋に広げるような真似なんて絶対しない。恥ずかしくてしかたなかった。でも、このくらいの刺激じゃないとリアン君は普段通りの淡泊な反応しかしてくれない。

「ふふふ。顔を赤くして可愛かったわね」

さて、今日は「のべひこ」さんと修学旅行の準備をしましょ
うか。いつか、心からrian君が笑える口が来るようになればいい
わね。：違うわ。その日を来させるのよね。つん。また明日からも
頑張りましょ。

第一十話 修学旅行一田三

SHDE リアン

「みんなおはようございます……」

「…………おはようござります…………」

毎度のことながら元気ですね。一応言つておきますが、現在朝の7時です。今日から最大の学生イベントの一つ、修学旅行が始まります。待ちに待つ修学旅行ということでテンションが上がっているのは分かりますが、もう少し節度を持っていただきたいですね。直接駅に集合ということですので一般的の利用者さんもいるわけです。ほら、驚いているじゃないですか。

「それではクラスごとに割り当てられた車両に乗り込んでください。それと各クラスの委員長さんは点呼をして各クラスの担任の先生に報告してください……！」

そして一番はしゃいでいるのは兄というのがみつともないですね…。生徒達からは微笑ましい視線で見られてますが、これはこれで問題ですがね…。学園長からの直々の依頼に父の別荘、はしゃぐには十分すぎる理由ですね。それに兄の肩に乗つているオジジョ。どっかで見たことあると思つたらアルベル・カモミールですね。確かに、いつは下着泥棒の罪でオジジョ収監所に収容されていたはずですがねえ…。学園長あたりが手引きしたんでしょうか。何にせよ使い魔の責任は主の責任。あの変態オジジョの不始末を兄は責任取れるの

でしょうか。まあ私には関係ありませんがね。しつかり引率教諭の仕事をしてくれればそれだけで十分です。あまり期待はしてませんが……。

「リアン先生」

「はい。何でじょうか？大河内さん」

「実は亜子が気分が悪いって」

「原因は何でじょうか？」

「肉まんがおいしくて食べ過ぎたんや……」

ああ、あれですか。超包子のみなさんが肉まんを売り歩いてましたね。かくいう私も一つ頂いたんですが、朝に合つよつに薄味で生地がすこしさくらくとしていてかなりの味でした。あれを食べ過ぎるのは理解できますが……。

「だったらとりあえず、お水を少しづつ飲みながら席でゆっくりとしていてください。もしそれでも気分が優れないようならもう一度私に言つてきてください。楽しくてはしゃぎすぎる気持ちは理解できますが、ほどほどにね。今からそんな調子だと最後まで持ちませんよ」

食べ過ぎなついたことはないでしょう。私の持っていたミニラ

ルウォーターを渡しておきました。大河内さんに背中をさすられながら亜子さんも新幹線に乗り込みました。

「フハハハッ！－！」これが新幹線か！－リアン－お前はこれに乗ったことはあるのか？」

忘れてました。ある意味兄よりはしゃいでいる人が一人いたことを。

「私は麻帆良に来る際に短距離ですが乗りました。快適ですよ」

「そりがそりが。実に楽しみだ。行くぞ茶々丸」

何故か知りませんがエヴァさんもかなりテンションが高いです。てっきり面倒だとか言いながら不承不承参加するものだと思っていましたがこれはびっくり。意気揚々と参加しています。茶々丸さんに聞いたところによると、なんでもエヴァさんは日本の伝統家屋とか仏像といったモノが好きだそうです。つまりそれらの集合体ともいえる、京都・奈良への修学旅行は行きたくて行きたくて仕方なかつたみたいですね。

「大変かと思いますがエヴァさんの制御をお願いします。茶々丸さん」

「畏まりました」

現在でこれなら、現物を見た瞬間のエヴァさんは想像できます。私は教員の仕事もあるのでエヴァさんだけを見ているわけにはいきません。ここは常に一緒にいる茶々丸さんにストッパーとなつてもらうのがベストです。

「最悪、アレを使つてもOKです」

「アレ…ですね。分かりました」

とりあえずこれでエヴァさんはOKですね。そして最後にして最大の難関があと一人……

「さあリアン君行きましょうか。あやかがグリーン車を貸し切りにしているそうよ」

「駄目です。私は仕事がまだありますから先に乗つてください。私も少ししたら3・Aの車両に行きますから」

千鶴さんです。彼女が最大の難関です。基本的にクラスが暴走し始めたときは委員長の雪広さんがストッパーとなってくれます。そしてその雪広さんが暴走したときにはストッパーとなるのが千鶴さんです。そのため千鶴さんが暴走をしたときはそれを止める人がいないためその役目が私に回ってきます。まあ、千鶴さんの暴走は私に対してのみ発生するので別に構わないのですが……

「千鶴さん。みなさんの視線が痛いので離れてください」

そう、千鶴さんがこうなったときの周囲の視線が非常に痛い。現に今も千鶴さんは私と腕を組んでいる状態です。これを見る3-Aの面々は何か黄色い歎声を小さく上げながらこつちを見ています。「あらまあ、お熱いことですね~」「禁断の関係!?」「これはやはりスクープよ!?」など。思い思ひに口走っています。

「あら、残念……」

千鶴さんは腕を放してくれました。ですが、この修学旅行。いろんな意味で無事に終われるか不安ですね……。

「ほら、次は那个カードでいいじゃん」

「ああーっ!ー?それ、私のお菓子ーーー?」

「これが新幹線か!ー?素晴らしい。人間はこんなものまで造つていたのか!ー!」

「ネギせんせい！先生も一緒にやろうよ……！」

カオスですね。一応貸し切りにはなっているからいいものの、好き放題しそうですね。まあ良いんですけどね。どうやら他のクラスの車両も似たようなものみたいですし。これも毎年恒例みたいで、乗務員の方々も手慣れた様子で仕事をしています。もしかして彼らはこちら側の人間なんでしょうか？まあ、関係ないです。一応兄も仕事はしてるみたいですね。

「しかし、兄と明日菜さんとの間に魔力バスを感じますね…。仮契約でもしたんですかね？」

仮に私の見通しが真実だとしたら、兄は自分、つまり『英雄の息子』と仮契約をすることの危険性を理解しているのですかねえ…。あのオゴジヨが一枚噛んでいる気もしますし…。

「私の邪魔さえしてくれなければ別に……ん？」

今、魔力の流れが変わった。明らかになんらかの術が行使…

「「「あやーーつーーー」」」

遅かったか！……ってカエル？…………この程度なら問題ないですね。ほつときましょ。現にエヴァさんも無視を決め込んでますし。こ^レは兄に処理させて、私は術者を捜しますか。

「これは陰陽術の一つですね。となると召喚符を使用する必要があるから、術者は近くに……見つけた」

あの隣の車両の販売員がそうですね。あの制服の内側の魔力は別の符ですね。西の術者と見てもいいでしょうね。さて、目的を聞かせてもらいましょうかね……

SIDE 三人称

「ふふふ。慌てとるわ。そりやそうやうな。いきなりカエルが溢れだすんやからな。後はこの符で親書を……」

3-Aが乗る車両の隣の車両。そこに居る一人の販売員はカエルが溢れてパニック状態の車両を見て一人笑みを浮かべていた。どうやらこの販売員の狙いはネギが持つ親書のようである。

「親書を……どうするんですか？」

新たに手に持つた符を力エル蠹く車両へと放とうとした瞬間、リアンが背後から声をかける。位置関係としては変であるが、リアンはこの販売員の影を媒体として転移魔法を使用したのだ。最近になってようやくモノにできた魔法である。

「なつー?」

「どうあえず、このお菓子とコーヒーを頂けますか?」

驚く販売員を余所にリアンは普通に車内販売品を注文する。だが、販売員はそれに応えることはない。眼鏡の奥の瞳がリアンを睨みつけている。

「そんなに眉間に皺を寄せるとせつかくの美人が台無しですよ?別にあなたに危害を加えるつもりはないです。まだ何もしてないです。とりあえず聞きたいのは、あなた達の目的です。その内容如何によつては…」

「ここまで喋つて、リアンは一呼吸置く。そしてゆっくりと次の言葉を吐き出す。

「潰しますよ…?」

明確な殺氣と威圧感を込めて言い放つ。

「（な・なんや）このガキは！？」「なんがおるなんて聞いてへんで！？」

販売員は明らかにリアンの雰囲気に飲み込まれていた。同時に目の前の少年が異質な存在であることを理解した。「の句が続かない販売員。この場を離脱しようと/orこの狭い車内では思うように身動きも取れない。

「どうしました？話してくれないんですか？」

詰め寄るリアン。後退する販売員。完全に狩る側と狩られる側にわかれている。しかし、これは新幹線の車内。この場に居るのは二人だけではない。

「ま・待て〜〜！！親書を返せ〜〜！」

突然車両デッキの扉が開いたと思つたら、ネギが飛び出してきたのである。何かを追つているようだ。そして、リアンの注意が一瞬ネギに向いた瞬間販売員は、懐から一枚の魔法符を取り出す。

「…準備のいいことで」

販売員が取り出したのは転移魔法符であった。即座にソレを使用した販売員は転移して車両から消えた。逃げられたにもかかわらずアンは冷静であった。それよりもネギが親書を追いかけていたということは、少なくともあと一人術者がいたということである。

「あれだけ隣の車両で騒いでいるといつのことこの車両の乗客はその様子に気付いていませんしね。それと親書を兄から奪つていった式紙は逃げた販売員の仕業ではない。…となると複数人が動いているということか」

「面倒だ。言葉には出さないがリアンは見るからにこいつ思つてている。力エル騒ぎも収まつたようなのでリアンは3・Aの車両に戻る。ネギは勝手になんとかするだらうと踏んでいるので無視である。

「どうやら逃げられたようだな…」

車両に戻つたリアンにエヴァはまるで一部始終を見ていたかのよつに話す。さつきまで新幹線にはしゃいでいた人物とは思えない。このあたりの切り替えはさすがといったところだらう。

「たいした術者がありませんでしたので問題ないでしょう。あの程度なら兄でもどうにかできます」

「ふん…。リアンも苦労してゐるな」

「やう思つなら手伝つてください。一応学園長の目の前で『はい』と言つた以上最低限のことはしないといけませんからね。西の術者も大人しくしていればいいものを…」

溜息一つ吐いて、リアンはエヴァの向かいの席に座る。どうやら力エル騒ぎの後始末は源しづながしてくれたようなのでリアンも京都に到着するまで大人しくしていることに決めたようだ。ちょうどそのときネギも3・Aの車両に戻ってきた。

「桜咲さんつて…。それに気をつけてくださいって、桜咲さんは何か知つてゐるのかな…」

ブツブツと一人で呟いている。内容からするに刹那と何かあつたようだが、rianには関係ない。そんなネギの様子に溜息を一つ追加する。そしてrianはこの先の修学旅行にどれだけの苦労が待つているのだろうと想像し、思考の海に沈んでいくのであつた…。

第一十一話 修学旅行一日目・？

SIDE 三人称

「……これほどお風呂が気持ちいいと思つたのは初めてですね。風呂は命の洗濯どころのあながち嘘ではないですね」

現在、麻帆良学園女子中等部修学旅行一行は、宿泊するホテルに到着している。今日一日のスケジュールを消化し、あとはホテルで夜を明かすのみである。そしてリアンは自分にあてがわれたホテルの一室で部屋備え付けの風呂に入っている。

備え付けの風呂はユニットバスで、大人が入るには狭く感じる大きさであるが、10歳のリアンに取つては十分なサイズである。このホテルには露天の大浴場があり、そこを利用することになっているが、リアンは背中の魔法陣を見られるわけにはいかないので部屋の備え付けのものを利用している。

首まで湯につかりながら京都に到着してからのことを振り返つてみる。

「今日は清水寺の観光だけだったのになぜ、こんなに疲れたんだじようね……」

さて、ここで本日唯一の清水寺観光を振り返つてみよう。
まず、清水寺に到着した一行は清水寺の代名詞ともいえる、清水の舞台を訪れた。順路からいつてもここが最初に訪れる場所になる。

「おお……！」がウワサの飛び降りるアレかー？」

「誰か飛び降りれ！－！」

「では拙者が……」

「やめなさい！－！」

「これが清水の舞台か！－！素晴らしい景色だ！京都が一望出来ると
は－！」

「ああ……マスター。あんなに楽しそう……」

清水の舞台に到着して早々、騒ぎまくる3-Aの面々。清水の舞台
から飛び降りる。これを実行しようとする忍者に、腰に手を当て、
踏ん反り返つて自分の世界に入っている金髪幼女。まさしくカオス
である。

3-Aのストッパーである雪広がなんとか飛び降りようとした忍者
を制止するが、金髪幼女には誰も近寄らない。どうやら下手に近づ
いて同類に見られたくないようだ。

「はい、みんなで記念撮影をするから集合してねー！」

しかし、そんな混沌の場は、しづなの一声でまとまりた。そしてそ
のころのリアンは、と、暴走しかけている千鶴を抑えるのに必
死だった。ネギは生徒達談笑していた。

清水の舞台を後にした一行は、バカブラックこと綾瀬夕映の一言、

「（）清水寺には恋愛成就で有名なところもあるです」

これで青春真っ盛りの女子中学生に火がついた。我先にとその場所へと駆け出す3・Aの生徒達。やはり女の子なのだとリアンは一人納得していたのは別の話である。

さて、綾瀬夕映の言つていたのは清水の舞台を出て、直ぐ左手にある地主神社のことである。ここは縁結びの神様として若い女性やカップルに人気のスポットの一つである。そしてここの中境内にある一つの守護石のことを恋占いの石と呼ぶ。

一つの石の間の10メートルほどを、目をつけつて、その石から石までたどり着ければ恋が叶うとされている。

「フフフ…。これで私と某ノ先生との恋は成就ですわーー！」

「ああー！？いいんぢょするーー薄田にしてるでしょーー？」

「古今東西あらゆる武術を修めた私にとつてこの程度の距離はなんの障害にもなりませんーー！」

片方の石をスタートに飛び出したのは雪広とまき絵の二人。最初こそゆっくりと歩いていたが、次第にその速度を上げ、今では完全に走っている。そして二人が反対側の石まであと2mほどの地点で二

人がいきなり消えた。……落とし穴である。

「「キヤアアアアー！カエルーー！」」

どうやら落ちた穴の中にカエルがいたようだ。一人は直ぐに近くの生徒に引き上げられた。

「なんでこんなところに落とし穴が…？」

一人が落ちていた落とし穴をまじまじと見つめているネギ。リアンは特に関することなくネギがどういった行動をするのか見ていた。結局、ネギはうんと唸つたまま、生徒達と一緒に次のスポットへと移動していった。

「こんなときはまず報告でしちゃうが…」

その背中を最後尾で溜息を吐きながら見ているリアン。リアンはスツと着ているスーツの内ポケットから携帯電話を取り出して、新田先生に連絡をする。生徒がいたずらの被害に遭ったと伝える。そして現場に来てもらひように伝える。

「しかし、この程度のいたずらで何がしたいのか理解に苦しみますね…」

親書が西の長の元に渡るのを阻止したいならもつと直接的に干渉してくれればいい。それをせずにこんな搦め手みたいなことをする必要は全くない。まあ、ネギみたいな愚直な人間には効果的ではある。
…」ヒリアンは考える。

「…私もその程度にしか見られていないということですかね」

一人呟く。現在rianは一人で3・Aの最後尾を歩いている。さつきまで側にいた千鶴は村上夏美と一落とし穴に見事にはまつた雪広をいじつている。

そして一行が次にやつてきたのは音羽の滝である。これまでの展開から想像は付くだろうが3・Aの生徒はいぞつて恋愛成就の御利益がある三つの内の一つに集中している。

「みなさん。他の一般の方もいらっしゃるんですから静かにおねがいします！！」

音羽の滝が3・Aの生徒で一ぢゅついている現状を見たネギは、意外にも教師らしいことを言った。だが、そんなことで止まるなら苦労はないし、麻帆良学園の教師達も3・Aの対応に苦労はしないだろう。

「！」これは！？

「す、」いおいしい……」

「いかにも靈験あらたかな味はつ……？」

「お代わり……！」

水を飲んだ生徒達はその水の味に興奮し、次々にお代わりをしていく。そして……。

「起きてください……！」

音羽の滝周辺には寝てしまつた3・Aの生徒が現れた。酒の匂いがするところを鑑みるに酔いつぶれてしまつたようである。その数はクラスの半数にもおよぶ。それを起こそうとするネギと一部の良識ある3・Aの生徒。どうやら飲酒がばれたら修学旅行が中止になると考えてこりようである。

「……またですか」

遅ればせながら現場に到着したリアンはこの惨状を見て、再び携帯を取り出し新田先生に報告する。そして至急来て欲しいと伝える。電話からものの数分で新田先生が到着した。息があがっているので走ってきたようである。

「何事ですかな、リアン先生」

「見ての通りの現状ですが、どうやら音羽の滝の水にお酒が混ぜられていましたようで、それを飲んだウチの生徒達が酔いつぶれてしまつたようです」

リアンは新田先生が来るまでに屋根の上有る酒樽を見つけておいた。

「なるほど。では私がこここの管理者と話をしますので、リアン先生は生徒達をお願いできますかな」

「それなら、無事な生徒達に手伝つてもうひとつバスに運んでもらえますね」

「ええ。それでお願いします」

実際に頼りになる。こうリアンは思った。どつかの誰かさんとはえらく違う。その後の関係機関への連絡は新田先生に任せて、リアンは無事な生徒達と共に、酔いつぶれている生徒達をバスへと運んだ。幸い、今日の予定は清水寺の観光を終えるホテルに直行である。生徒達をバスに運ぶ際に、ネギがリアンに勝手に連絡をしないでくれと言つてきたが、懇切丁寧にネギの行動の問題点を列挙し、真正面から論破してやつた。

以上、今日の出来事である。ホテルに到着するとまず、夕食を済ませ、未だに酔っている生徒達を各部屋に押し込んだ後、教師陣は今日の振り返りを行い、明日の予定の確認を行つて、解散となつた。そして現在リアンは自室で風呂に入っているのである。

時刻はすっかり夜である。就寝時間が近いこともありホテル内も静かになっている。リアンは風呂から上がって京都の山々を一望できる窓辺に立っていた。風呂上がりの体に窓から流れてくる夜風がひんやりと心地良い。

「今日は団体行動だつたからいいけど、明日の班別自由行動と明後日の完全自由行動日は注意が必要だな。特に千鶴さん……。それについても兄は一人で親書を届けに行くつもりみたいだな。いつ行くのか全く私に言つてしませんし」

麻帆良学園の修学旅行は全体での行動日というのがほとんどない。日程の大半を生徒達の自主性に依存する形となつていて、これはこれまで大変だが、生徒達は常日頃学園都市という一種の閉鎖空間で生活しているため、こういった日程が組まれているのである。

生徒達が自由に行動する以上、教師も一力所に留まるわけにはいかない。生徒達が提出した旅程表を見て、生徒達が立ち寄るであろうポイントで生徒達の行動を監督しないと行けない。言い換えれば、教師も仕事という大儀を得て、自由に動き回れるのである。

これがあるからこそ、修学旅行の引率中に、親書を届けるという行動ができるのである。だが、ネギはいつその親書を届けに行くのか

をリアンに言つていない。一応学園長は『君たちに』とネギだけでなくリアンも含めて今回の親書の配達を依頼した。だがネギは自分一人で今回の学園長の依頼をこなすつもりなのだろう。

「まあ、兄と一緒に行動しなくても良いから、こっちは楽で良いんですがね」

ネギは今回の依頼についてかなりのやる気に満ちあふれているが、リアンはその正反対である。どうでもいい些事である。

「大体、西の長つて学園長の娘婿ですし、わざわざ親書という形を取らなくても意思疎通は取れるから、形式的なものですし、失敗しても問題ないですしね。それにしてもお風呂に入っていて気付かなかつたが、いつの間にか侵入者探知用の結界が張られてますね。刹那さんあたりでしょうか。術式は陰陽術のようですし」

いつのまにかホテル全体を覆うように探査結界が張り巡らされたいた。簡易な侵入者察知用のそれである。

「着眼点はいいですが、これには欠点が……って言つてるそばからですか」

リアンの眼下で、人のようなものを抱えた着ぐるみとそれを追う、刹那と明日菜がいた。様子から察するにただごとではないようだ。

「桜咲さんが動いているということは、着ぐるみが抱えていたのは木乃香さんですかね…。となると、敵の狙いは木乃香さんの魔力か、それとも西の長の娘という肩書きか…」

眼下で駆けていく者達を見てもリアンは冷静に状況を分析する。とはいっても、一応着替えを始めている。

「しかし、兄はどこに行つたんですかねえ…。ホテル内には兄の魔力を感じませんし」

兄がホテル内にいないことに若干の疑問を抱きつつも着替えを終えたリアンは窓から飛び出す。

「縮地・无彊」

地面に対し垂直に精製した魔力壁を足場に超長距離瞬動で一気に着ぐるみの後を追つた。

結論から言つならリアンはあつという間に追いついた。だが、直ぐに参戦するのではなく、状況把握を行つていた。それも現場から1?程度離れた地点で。

「あのときの販売員か…」

いつの間にかネギも追跡に加わっていた。京都駅の大階段の最上段に位置する眼鏡をかけた着物を着崩した女。それを階段の中腹あたりで対峙する、ネギと明日菜、そして刹那。女はその腕に木乃香を抱えている。なんの反応も無いところを見ると何かの術で睡眠状態にしているのだろう。現在、女が起こした巨大な炎をネギが吹き飛ばしたところである。

「もう逃げられないわよーこの猿女!!」

「なかなかしつこいですな…。猿鬼、遊鬼!!」

女は式神を一體召喚する。『レリ』で迫ってきたネギ達を始末する」とにしたよつだ。

「姐さん……カードを掲げて『アテアツト』と唱えてくだせえ！そしたらアーティファクトが出てきます……兄貴は姐さんに魔力供給を……」

ネギの肩に乗るオゴジヨ・カモがネギと明日菜に指示を出す。それに従つてネギは明日菜に魔力供給をし、明日菜は言われたとおりアーティファクトと唱える。

「武器つて・ハリセン！？」

明日菜が喚びだしたアーティファクトは巨大なハリセンだった。カードの絵には身の丈ほどある大剣が描かれているのに、ハリセンが出てきた。基本アーティファクトというのは仮契約カードに描かれているものが呼び出されるのが普通といふか当然である。

「…つまつまだ明日菜さんには足りないものがあるところ」とか

リアンはそれを見て呟く。アーティファクトが完全な状態で喚びだ

せないといふことはそれの使用者になにかしら不足しているものが
あるといふことである。

「ちゅうとー、これのどこが武器なのよー?」

明日菜さん前前！！

出でたものが武器と呼ぶにはファンシーなものなため明日菜は振り返つてネギを怒鳴る。しかしその背後からは女が召喚した猿が迫る。

「うー。着ぐるみなんかに！！」

ネギの声に気付いた明日菜は迫り来る着ぐるみに立ち向かう。一体をそれぞれ刹那と明日菜が担当する形になつた。気合一閃。明日菜と刹那のハリセンと野太刀の攻撃はそれぞれ白羽取りされるが……。

「... ?」

明日菜のハリセンを受け止めた猿の方が消滅した。

「すこし...」

その光景に太刀を受け止められた刹那は感嘆の声をあげる。

「これならいけるー刹那さん。この猿は私に任せて、刹那さんは木乃香をーー！」

「分かりましたーー！」

残つた猿を明日菜に任せた刹那は一気に階段を駆け上がり、女に接敵する。

「覚悟してもらひついで。そしてお嬢様を返してもうひついでーー！」

一気に斬りかかる刹那。しかしそれは横から突撃して来た何かに阻まれた。

「！」の太刀筋、「神鳴流かーーー？」

「どうもー。お初にお会にかかりやすー。月詠と申します」

「ゴスロリの衣装を着た小太刀」刀の少女がペコリと頭を下げる。

「こなんのが神鳴流とは……」

刹那は目の前の少女が自分と同じ神鳴流の使い手であることが信じられなかつた。

「では～…」

「くつ……ーー！」

ゆつたりとした口調とは裏腹に繰り出される斬撃は苛烈である。刹那の持つ野太刀と月詠の持つ小太刀二刀では手数が段違いなため刹那は防戦一方になつてゐる。同時に事態が自分たちに不利な状況になつてきていることを刹那は自覚する。

「ほな、後はまかせますえ。月詠はん。うちはお嬢様を連れていいくさかい」

完全に足止め状態の明日菜と刹那を見て、女は木乃香を抱えたままこの場を後にしようとする。

「ふむ。明日菜さんはやはり仮契約してましたか。それと刹那さんは突発的なイレギュラーに弱いということですね。そして兄は…」

リアンがネギを見ると、ネギは詠唱を終えようとしていた。詠唱を

終えるタイミングを見計らいつつ、女に接近している。

「自分の小柄な体型を利用して死角から接敵するとは良い判断ですね」

そして、女が油断している隙をついて、一気に魔法を放つが、女は木乃香を楯にした。

「曲がれーー！」

それをみたネギは間一髪で魔法の射手をそらす。

「捕縛の矢なんだから、そのまま当てても問題ないんですがね。さて、私も行きますか」

やはり詰めが甘い。自分の使う魔法についての知識が浅すぎる。ネギは魔法を人に向けて放つ覚悟が足りていらない。魔法は人を救うものであって、人を傷つけるものではないと思っているのだろう。リアンはこのままだと千日手になると予想し、自分も参戦すべく移動を開始する。

「石の槍」

しかし、どこからともなく現れた石の固まりがリアンの行く手を遮る。元々直撃コースでは無かつたため回避運動を取る必要もなかつた。

「どうやら君はこちらの情報以上の力をもつているようだね」

リアンの田の前に白髪の同年代と思える少年が現れた。学生服のようなものを身に纏い、浮遊術を使用しリアンの前方約10mのところに佇んでいる。

「なぜ、そう思うのかな？」

「簡単なことだよ。君は浮遊術とも違つものを使っているからね」

事実、リアンは精製した魔力壁の上に座っていた。一応浮遊術を使用していると見せかける為の措置も施してあるが、それを目の前の少年は一目で看破したのである。

「（ふむ。なかなか喰えない人間ですね…。いや、人形か？）」

リアンは田の前の少年が只者ではないことは一目で理解していた。そして少年に違和感も感じていた。通常の人間の魔力の流れ方では

ない。人工的な流れを感じる。そして展開している魔法障壁は人間の業とは言い難いものである。

「とりあえず名前をお聞きしましょうか」

「フェイト・アーウェルンクスだよ。『落ちこぼれ』と呼ばれているリアン・スプリングフィールド」

「なら私はあなたのことを『人形』のフェイト・アーウェルンクスと呼びましょう」

「へえ……君は面白いね」

「君こそ面白いよ。といつか『そこ』を通してもらつても良いかな?」

「それは無理なお願いだね。僕の役目は君の足止めだからね」

「なるほど。でもその役目はどうやらもう終わりのようですね」

リアンの視線の先では、ネギ達が木乃香の奪還に成功していた。月詠は壁に激突していく、女は何故か全裸だった。そして木乃香を奪還されるや、直ぐに退却をしたようである。

「どうやらそうみたいだ。でも……」

突然少年は距離を詰め、リアンに正拳を繰り出す。リアンはそれを

片手で受け止める。同時に一気に体内の魔力を練り上げる。

「少し付き合つても、うつよ」

「戦神舞踏曲」

そしてオリジナルの身体強化魔法を発動する。同時にフェイトの腹を蹴り上げるがそれは防がれる。しかし、腹部への蹴りが防がれた瞬間、踵落としが障壁を破壊してフェイトの頭部に直撃する。刹那の一連撃である。蹴り落とされたフェイトはそのまま地面に激突するかと思われたが、ぎりぎりのところで制止した。

「その魔法はただの身体強化ではないね……」

「これを使うのは今日が初めてです。いい実験台になつてくださいね」

戦神舞踏曲。リアンが独自に開発完成させた身体強化魔法である。通常の身体強化魔法である『戦いの歌』などは術者の身体を魔力で覆つて、その身体駆動を補助・加速させる術式構築となつていて、つまり魔力というパワードスースを着てている状態である。

この点リアンが開発した『戦神舞踏曲』は着眼点が違う。全身の何億という細胞すべてに莫大な魔力を流し込み、細胞レベルでの身体強化を施すのである。そのため常軌を逸したレベルでの身体強化が可能となる。そしてこの『戦神舞踏曲』の最大の特徴は、神経伝達速度そのものを向上せることにある。擬似的に光速に近い速度

での神経伝達を可能にする。

「 もうね…

魔法の類は一切使わない。純粹な肉弾戦を開催するリアン。フェイの攻撃の予兆を察知し、潰す。詠唱すらさせない。極端な先の先を取る戦い方である。幾重もの障壁をただ力のみで殴り、蹴り壊して肉体に叩き込む。

「（一応肉体に届いてはいますが、おわりへダメージは通つてないです）」

一方的に攻め立てながらもリアンは自分の攻撃が届いていないことを悟っていた。ここでいつたん攻撃を止め、距離を取る。

「体に直接攻撃を淹れられたのは初めてだよ」

「全然効いてないくせによく言います……ねーー」

一呼吸置いた後、再びリアンが攻め立てるが、今度はフェイトも殴られっぱなしではない。徐々にではあるが、リアンの攻撃を防ぎつつある。

「障壁突破。石の槍」

リアンのほんの僅かな攻撃の間隙を縫つてフェイトが石の槍を放つ。障壁突破の付加効果付きである。

「ネック防壁網」

しかし同時に生み出した網に絡め取られ、リアンの眼前数？でそれは停止する。

「そろそろお時間のようです。私も明日に備えて睡眠時間を確保しないといけないので今日はこのあたりで……」

「随分とつれないね……」

「餓別です」

その言葉と同時に繰り出されたのは右ストレート。だが、それにはリアンが身体強化に回していた魔力の全てが込められており、瞬間に亜光速に達する。

「爆光撃」

光速に迫る拳をどうして避けられようか。フェイトはその拳をまと

もに腹部を受けた。着弾と同時に、凝縮された魔力が爆発を起こす。巻き起こる爆発も拳の一点に凝縮されているのでその威力は凄まじく。やしものフェイトも一瞬でリアンの視界から消え飛んでいった。

「……」これは乱発できませんね

自身の右手の状態を見てリアンは一人呟く。リアンの右手は技の威力に絶えられず、ひどいことになつていて。万が一のことを考えて持つてきていた最高級の治療薬エリクシールを懐から取り出し飲み干す。すると瞬く間に右手は元通りになつた。

「しかし、フェイト・アーウェルンクスか。エヴァさんと戦つてゐるみたいでしたね」

月夜が照らす闇の中でリアンは一人、強敵の出現に危機感を抱いていた。

一方のフェイトは山の斜面に激突し大きなクレーターの中心にいた。来ていた制服はボロボロになり、リアンの一撃を受けた腹部からは大量の血が流れている。

「…あれで『落ちこぼれ』…か。まさか僕が血を流すことになると
はね」

フェイトはリアンに対する認識を大幅に修正し、リアンを危険人物と認識していた。

「おそらくまだ彼は力を隠している…。まあ僕も人のことは言えないか。次は本気でやつて見ようかな」

フェイトは強敵の出現に『心』を踊らせていた。

第一十一話 修学旅行一日至四日（前書き）

今回はせりつと流します。

第一十一話 修学旅行二日目

SIDE 三人称

「ネギ先生＆rian先生とラブラブキッス大作戦〜！〜」

一日の班別自由行動を終え、就寝時間も過ぎたホテルのテレビに3-Aのパララッチこと朝倉和美が映し出される。そして盛大にタイトルコールを行い、番組がスタートした。

「さあ、いつたい誰が新田を始めとする教師の監視をかいくぐり、そしてスプリングフィールド兄弟の唇を奪うのか！？」

ノリノリで司会進行を行う朝倉。さて、なぜこんなことになつたのかを説明しよう。

班別自由行動を終えた一行は、ただ一人の子供先生を除いて無事にホテルに帰ってきた。子供先生ことネギ・スプリングフィールドは何故か明日菜に抱がれてホテルに帰ってきた。何でも熱を出したそうだ。

風邪かと思っていたが、実際は違う。なんと奈良の東大寺を見学しているときに3・Aの生徒の一人、富崎のどかがネギに告白したのだ。ネギは日本の女性を奥ゆかしいと思っている。そのため、そんな奥ゆかしい女性に告白された以上、英國紳士としては責任を取らなくてはいけない。でも自分は教師でのどかは生徒。教師と生徒の恋愛はタブーであると姉のネカネにも教えられてきた。なら自分はどうしたらいいのだろうか?と悩んでいる内に知恵熱を出したようだ。

そしてフラフラとホテルを出て、散歩をしているところ、トラックにひかれそうなネコを魔法で助けた瞬間を朝倉に目撃された。

「なお、食券トトカルチョにも参加よろしく～！～！」

スクープを囮撃した朝倉がじつとしているわけがない。魔法を囮撃した朝倉はネギに真相を迫った。このときいろいろあつたようだ。

しかし、結果として朝倉はネギの味方となつた。そしてカモと意気投合して、今回の騒動へと至る。

「グフフフ…。仮契約の仲介料は一人に付き五万\$。それに冗貴の

戦力増加にも繋がつて一石二鳥。俺つち天才！」

「分け前は打ち合わせ通りに頼むよ。カモ君」

「任せとけい！」

ある意味危険な二人がコンビを組んだ。だが、二人に共通しているのは、自分たちの行動が危険きわまりないことに気付いていないといふことである。目先の欲に眩んだが故の結果である。

「では早速、選手紹介といくよー！..」

「不穏な気配ですね……」

そんな騒ぎが起きていることを知らないリアンは自室でくつろいでいた。しかし結界などの術式に敏感なリアンは違和感を感じていた。

「…」これは仮契約の陣？」

意識を集中して魔力の流れを追う。陣はホテル全体を覆うほど巨大なもので、その魔力構成から、仮契約の陣だとリアンは結論づける。

「あのオゴジヨの仕業ですかね…」

なんとなく犯人を予想するリアン。そして気分転換にテレビをつけると…

『それではラブラブキッス大作戦！開始～！！』

画面一杯に朝倉と肩に乗ったオゴジヨの姿が映し出された。次には画面を六分割して、3-Aの生徒達がどじぞの蛇大佐のごとくホテルの廊下を忍び足で進んでいく姿が映し出された。

「ホテル全体を覆う仮契約の陣に、この騒ぎ。そして朝倉さんとオゴジヨが一緒にいるとなると…」

リアンはテレビの画面に一瞬思考がフリーーズするが直ぐに状況把握

に努める。そして答えを導くために現状の情報を統合していく。

「イベントの一環として仮契約の仲介料と戦力確保といったところですか。そして朝倉さんに魔法がバレたんでしょうね」

即座に朝倉とカモの狙いを察するあたり、さすがといつべきである。そして改めて画面を見ると参加メンバーは3・Aの修学旅行班から各2～3人ずつ出でているようだ。

「一応対処はしておきますか…」

リアンは自分の部屋に結界を構築し、仮契約の術式範囲から隔絶した。同時に人払いの結界も張る。

「私にとばっちりが来ては困りますからね。あれを怒るのは新田先生に任せますか。ちょうど今田の当番は新田先生ですし」

リアンは仮契約ができない。それは精霊の加護がないからか、それともリアンの『力』が関係しているのか定かではない。それでもリアンがこの騒動に対してもこのまでの対処をするには当然理由がある。一度、エヴァと千鶴と仮契約をしようとして、魔力が暴走し爆発した経験があるのである。そのとき寸前で気付いたのと、エヴァも千鶴も魔法が使えたので大事には至らなかつた。それに、今回の騒動を考えると、仮契約の方法としては『キス』である。教師の身

分を持つ自分が生徒とそんなことをする理由はない。それにいくら10歳の子供相手とはいえ、異性には違いない自分にキスをするのはどうかと思っているからである。

リアンもそのあたりは心得ている。思春期の青春真っ盛りの女子中学生。ファーストキスはやはり、好きな人をしたいと思うのが普通である。

なので、今回は過剰ともいえる対処を取つたのである。それでも自分のことしか対処しないあたり、リアンのネギに対する感情が表れていると見てもいいだろう。

「使い魔の責任は主の責任です」

リアンはホテルの周囲をフラフラと動いているネギの魔力を感じつつ、一人呟いた。

結局、リアンのところにたどり着けた者はいなかつた。逆にネギは

とこうと、ちやつかりのどかとキスをしてしまい、彼女との間に仮契約が成立した。このほかにも式紙による分身体の暴走によりスリカードを大量に作る羽田となってしまったのである。

そして、この騒ぎに参加した面々はお約束通り新田に見つかって、しゃべりくローバーで正座の上、説教をされたそうだ。

翌日、ホテルのローバーの一角ではネギが明日菜に責められていた。当然理由は昨日の騒動である。

「あんたは」「んなにカード作つてビリするのよー?」

「「」みんなさー…」

「まあまあ、明日菜。良いじゃんか」「のぐらこ」

ネギを責める明日菜に、責められるネギ。それを仲裁しようとする諸悪の根源の朝倉とカモという図式が成り立っている。そしてそこにリアンが通りかかる。リアンとしても少し確認したいことがあるので、今回はこの渦中に飛び込むことにしたようだ。

「ちょっと、リアンも何か言つてやつてよ」

「せういえば、リアン先生も魔法使いだつたんだよね〜」

「私が言つことは何もありません。ただ、確認したいのが、明日菜さんは何故兄と仮契約をしたのですか？」

リアンはこれを確認したかった。昨夜の騒動の一件。富崎のどかが結果としてネギと仮契約をすることになった。これはあくまでもゲームの一環ということで仮契約の趣旨を理解したものではない。しかし、明日菜はリアンもいつしたのか分からなかつた。それにその理由も。

「と、とりあえず魔法のことを知つたから、自分の身を守るためにね」

明日菜としては仮契約を行う際に、カモがリアンと戦うときの戦力になると言つていたのは覚えていないし、そもそもそんなつもりはない。カモの口車に乗せられた感はあったものの現在では仮契約をして良かったと思っている。

「それに、昨夜のよつな」ともあつたし…」

正直、魔法の世界というものの甘く見ていたと明日菜は実感した。まさか、身近なクラスメイトが誘拐されるとは思わなかつた。それに対抗する手段として、アーティファクトというものの必要性をひしひしと感じていた。まあ出でたのはハリセンではあるが。

「だから、兄貴には戦力が必要なんだよ。姐さんもやうんといふは理解しているでしょ？」

「お前には聞いていない。耳障りです」

途中で口を挟むカモを一蹴するリアン。

「明日菜さんはとりあえず魔法の世界について理解しているようですね。まだまだ甘いですが…」

とりあえず、明日菜が裏の世界というものの一端を理解している点は評価できる。しかしながら、魔法に関わる=人の生死に深く関わることである。自分の親友が殺されることもあるし、自分が人を殺すこともある。おそらく、明日菜の認識だとここまで考えていないようである。

「それに比べてそこの小動物と朝倉さんは理解していますか？今回あなた達が起こした騒動がどんな結果を招きかねないか…。魔法の世界に関わるということはいつ死んでもおかしくないといつことですよ？漫画やアニメの世界のようにファンタジー溢れる世界じゃないんです」

「今の平和なじみ時世にそんな物騒なことはないよ。リアン先生は心配しすぎだつて」

「…忠告はしました。あとは自己責任です。それと、兄さんは自分が仮契約をした人達の責任をしつかり見ることですね。そのオオジヨも含めて。使い魔の責任は主の責任です。使い魔の犯した罪により、主たる魔法使いが処断された例は多いですよ？」

リアンははやる」とは終わったとばかりにその場を後にする。そして残されたネギ達はと云つと、リアンに場をかき乱されてしまい、明日菜もこれ以上怒るに怒れず、結局解散となつた。

そして一行は、激動の修学旅行三日目に突入する。

第一十一話 修学旅行二日目（後書き）

次話が修学旅行編の山場です。

第一二三話 修学旅行三日目 ～リアン・暗躍～

SIDE リアン

「さて…」

兄には『言つべき』とは言いましたし、あとは勝手にしてもらいましょ。とりあえず目的地は関西呪術協会総本山です。

「立方体^{キューブ}、術式構築パターンを『隔絶』に設定」

私の周囲に魔力壁を構築します。言つなれば箱です。そして、術式構築パターンを『隔絶』にします。これは、世界を箱で区切つてその内と外の繋がりを断つ術式です。

これの利点は、箱の内側の存在を、外側にいる者は認識出来ないという点にあります。かなり便利な魔法ですが、これは魔力消費が非常に多く、並の術者ではこれは使用できません。私はこれを使って、今日の日中の、完全自由行動日を過ごすつもりです。教師の仕事についてでは身代わりの分身を用意してます。一枚100万する符でしたが、この性能は素晴らしいものです。

「とりあえず、兄は明日菜さん達と行動するみたいですし、一応エヴァさんに木乃香さんとのこともお願いしますから大丈夫でしょう」

エヴァさんなら、あのフロイトという少年にも対応できるでしょう。それに日中は一般人の目もあるので派手には行動できないはず。本格的に動くのは今日の夜でしょうね。

「なら、私は先に本山に警告を出しに行きますか」

私が本山に先に乗り込むのは今回の件についての見解を聞くためです。それと西の長という人物を見極める為でもあります。自分の組織の人間がこんな動きをしているのに、関西呪術協会からの連絡は全くありません。学園長が根回しをしている可能性もありますが、自分の娘が拉致されかかったのに行動を起こさないのはさすがに不思議です。あと、あの女術者達の狙いについても把握しているかも知れませんしね。

「確か本山はあっちの方角でしたね」

私の姿が全く認識されないので、空から向かうことにしましょう。浮遊術で飛んで、超長距離瞬動で一気に向かえば、一時間もかかるないでしょ。

浮遊術で高々度へと上がり、超長距離瞬動をすること五回。関西呪術協会の総本山へと到着しました。丸々一つの山を拠点として、その頂上あたりに広大な日本家屋があります。その他にも離れという

「思ったよりも早く着きましたね」

ものがありますね。

「解放」

とりあえず、屋敷の門の前で術を解きます。屋敷へは正面から行きます。まあ当然ですね。

「何か」用ですか?」

屋敷の門をくぐると直ぐに巫女の格好をした女性が応対してくれました。

「（ふむ。外からは見えなかつたんですがね…。これも結界のひとつですか）麻帆良学園女子中等部で教師をしている、リアン・スプリングフィールドと申します。」この長、近衛詠春殿に面会できますか?」

「は、はい。少々お待ちください」

私の言葉使いが意外だつたみたいですね。見た目で人を判断すると痛い目見ますよ?

待つこと十分。さつきの女性が戻ってきました。

「長がお会いになるやつです。どうぞいらっしゃく…」

少し意外でしたね。いきなりやって来たのに直ぐに会うとは思いました。少しは手こずると思っていたのですが、まあ、いいでしょう。

案内されたのは10畳ほどの和室でした。中央あたりにぽつんと座布団があるので、ここに座れといつてじょうね。

「お待たせしました」

私が座るタイミングを見計らつたように一人の男性が部屋に入つてきました。年齢的には40をこえたぐらいでしうか。一件穏やかそうな雰囲気をしていますが、その目は私を見定めるような視線です。

「rian・スプリングフィールドです。突然の来訪申し訳ありません」

「関西呪術協会の長、近衛詠春です。麻帆良では木乃香が世話になつてます。それでご用件は何かな?」

とりあえず挨拶。そして詠春さんは私の田の前まで来て、腰を下ろします。さて、試させてもらひましようか。

「私は無駄な話が嫌いなので単刀直入に言います。一昨夜の一件。あなたはどう捉えておいでですか?」

「…あれは彼女、天ヶ崎千草の独断によるものであります。関西呪術協会の意志ではありません」

把握はしているようですね。

「しかし、その口ぶりだとその天ヶ崎千草というのは関西呪術協会の所属で間違いないようですね。独断と断定するのは結構ですが、あなた方は何も行動を起こさないんですか?特にあなたは自分の娘が利用されかけているのですよ?」

まさか10歳の私にこんなことを言われるとは思つてもいいでしょ。組織が一枚岩でないといつのは理解できます。麻帆良も実際はそうですし。しかし、組織の意向に沿わない行動をする輩を放つておくのは愚の骨頂。

「確かに彼女は魔法使い達に恨みを持っていました。しかし、だからといってこんな行動を起こすとは思つていなかつた」

「…まあ、このあたりをネチネチ言つつもりはありません。ですが、

「これからはどうするんですか？実際に行動を起こした以上、何かしらの対応は必要だと思いますが？」

「確かにそのとおりですが、生憎、こちらの手練れの者は出払っていまして、招集しても早くて明日にならないと…」

この人は駄目ですね。戦闘力は凄いのでしょうけど、政に關しては論外です。

そもそも、修学旅行で木乃香さんが京都に来る、しかも英雄の息子二人と一緒に。こんな状況、魔法使い達に恨みを持つ人間からすればこの上ない好機です。強硬手段にでる人間もいるでしょう。現に出てますが…。

英雄の息子、次代の英雄候補とはいえ未熟な見習い魔法使い。それがわざわざこちらに飛び込んでくる。始末するにはちょうど良いです。このくらいの事態はすぐに想像できます。

そして万が一それが実行されたとすると、間違いなく西と東の戦争に突入するでしょう。西の一部の強行派の行動とはいえ、関西呪術協会の人間には変わりないのでですから。

となると人員を用意して、なにかしらの対策をこの修学旅行期間中は講じる必要があります。これは学園長もそうですが、事態を楽観視しそぎですね。

「人手が足りないから何もできないというわけですか」

「ええ…。しかし、幸いなことに、一昨夜の件はネギ君と刹那君が対処してくれました」

そこまで把握してんんですね。ですが、あの白髪の少年のことは把握していないようですね。

「天ヶ崎千草の手勢はそれほどの力ではないようすで、こちらの人員が到着するまではそちらでの対処をお願いしたい。こちらの手勢が到着次第、彼女の身柄確保にあたりますので…」

……」Jの言葉を待つてました。

「現状それしか手ではないんでしょうが、関西の内部のごたごたに、何故私たちが協力しなければいけないんでしょうか？そんなに協力が欲しいなら、学園長に応援の要請を出せばいいじゃないですか。修学旅行中の私たちに頼む問題ではないですね」

「しかし、それでは時間がかかります。そちらにはネギ君や刹那君も居るのですから…」

なるほどね…。これには学園長も関与している可能性が濃厚ですね。この場で兄の名前が出てくる必要はない。この程度の障害を見越しての今回の親書となるわけですか。恐らく、詠春さんは木乃香さんが巻き込まれていることは心配していますが、実際に兄と護衛の刹那さんがそれを退けたから大丈夫だと思つてゐるんでしょうね。」

……甘い。甘すきます。

「何の見返りもなく協力を依頼できると思つていいのですか？さつきも言いましたが、こちらは修学旅行中に巻き込まれた、いわば被害者です。そのところをちゃんと理解していますか？あなた方が組織内の異分子をほつたらかしにしておいた結果がこれです。自分たちの都合ばかりを押しつけるなんていいご身分ですね」

「子供だからと思つて舐めるなよ……。第一、なぜ末端の私にそれを言ひのか理解できない。

「等価交換といふ言葉を知つてますか？何かを望なら相応の対価を用意してください」

……ああ、何を差し出しますか？

「……それなら、君たちの父親、ナギの別荘を案内しましょう。そ

れとそこにあるものを自由に持つて行つてもうってかまこません」

SIDE 三人称

「……舐めてるのか？」

リアンの纏つ雰囲気が変わった。そこには年長者を敬つ態度など微塵もない。詠春もリアンの変わりように驚いている。さつきまで理知的に話していた人物とは思えない。そしてリアンはおもむろに立ち上がる。

「この京都に、ろくでもない父の別荘があるのは知ってる。だが、それはあんたのものではない。父がいない以上、その相続は私と兄にある。私に所有権があるものを対価として差し出す？ふざけるのもいい加減にしろよ」

詠春が見誤った点は大きく一つ。まずはリアンを10歳の子供だからと甘く見ていたこと。次に、'リアンもネギと同じように父親のこ

とを思つてゐると認識してゐたこと。」の一点である。まあ、両方とも必然的に情報が少ない関西としては仕方ないとはいへ、それ前提で話を進めた詠春の手腕は稚拙と表現するに相応しい。『名監督、名選手にあらず』と言われるように戦争の英雄と呼ばれた詠春が優秀な組織の長といふわけではない。

立ち上がったリアンはそのまま部屋の出入口へと向かう。これ以上話すことはないということだろう。

「（これ以上話しても無駄ですね。ならば……）」

リアンは詠春という『政治家』の器をしかと見た。その上で埒がないと判断した。リアンにも当然狙いがあった。リアンとしては協力の見返りとして、ここにある陰陽術の秘伝を見せてもらうつもりだった。最近石化の研究に行き詰まってきたリアンは、西洋魔法とは違う、日本古来の陰陽術を研究に取り入れようと思っていたのである。もちろんいきなり見せてくれるとは思つてはいない。

「（まさか、ここまで使えない人間だとは思わなかつたな。所詮武の英雄か……）」

交渉の第一段階で、あのようなことを言われるとはさすがのリアンも予想していなかつた。故に近衛詠春という人間は、リアンにとつて取るも足らないモノだと判断した。

「人を見かけで判断するような人間が組織の長だとは思いませんで

した。こんな長だからこそ、今回の騒動が起きたんでしょうね。木乃香さんも随分と可哀相ですね。自分の父親がふがいないばかりに、政争に巻き込まれてしまつたんですから」

「…………」

詠春は何も答えない。否、答えることが出来ないのである。

「（まあ、何があつたら、木乃香さんは助ける）ことにしますから、このおっさんが協力を依頼しなくても動くつもりなんですけどね。……では次に行きますか」

リアンの目的地はこの総本山の他にもひとつある。次はそこへと向かうべく、黙りこくれている詠春をほつたらかしにして総本山を後にした。

「やうござんば、白髪の少年のことを忘れましたね。まあいいでしょ。自業自得です」

第一十四話 修学旅行二日目 リアン 暗躍する～（前書き）

遅くなりました。短いですが投稿します。

第一十四話 修学旅行三日目 リアン 暗躍する？

SIDE 三人称

「…が…」

総本山をあとにしたリアンは、大きな湖に来ていた。特に名も無き湖であるが、その中央には巨大な石があり、その石を封じるようにな注連縄が巻かれている。

ここには飛騨の大鬼神リョウメンスクナが封じられている。リアンの目的の一つはここである。

「古より神には神通力という力が備わったといふ話です。『鬼』と
いう冠がついてはいるものの、『神』であることは変わりありませんしね」

リアンの目的とは大鬼神の力、つまり『神通力』を得ることである。
『神通力』とは、およそ人ではなしえない事象をなし得る力である。
この力を使えば永久石化も解けるかもしれない。

「さすがにリョウメンスクナそのものがいなくなると面倒なことに
なりますから、力の一部をもらいましょうか」

一人呟いたリアンは、胸の前で両の掌を合わせる。そしてそのまま両手を巨大な岩に押し当てる。

「……さすがは大鬼神。流れ込んでくる『力』が濃いですね」

若干額に汗を浮かばせつつ、リアンは作業を続行する。作業としては極単純。アンリ・マンコの封印を解除して、それに封印されるスクナの力を吸い上げるだけである。

アンリ・マンコはあらゆるものを持有する。人間の感情すら取り込むことが可能である。三千世界に渡つて存在する暗黒神たるアンリ・マンコにとって、たかが極東の一鬼神の力を取り込むのは簡単なことである。ただ、リアンの体には相応の負担は掛かるのが唯一の欠点である。

「…っ！」

肉体の内側から刺されるような痛みがリアンを襲う。分かつていたことではあるが、さすがにリアンも顔をしかめる。しかしリアンは作業を止めるのではない。たった一つの目的のため、ただ愚直に作業を続ける。一種の異常ともいうべきリアンの姿がそこにある。何かを得ようとするとなるなら相応の代償を払わなければならない。いわゆる等価交換。若干10歳にして、この世の真理ともいえるソレをリアンは正確に理解していた。

「…ふう」

リアンが作業を始めてどれくらいたつただろうか。

ようやくリアンは作業を終えた。その額にはうつすらと汗が滲んでいる。しかし、その顔は一種の満足感にあふれている。

「これが神通力ですか…。魔力とも氣とも違つ、暖かい感じがしますね」

リアンは、アンリ・マンコを通して感じるスクナの神通力に感心していた。

今回リアンが取り込んだのはスクナの『陽』の神通力。それに対をなす、『陰』の神通力は取り込んではいない。

……洋の東西等を問わず、力には一面性がある。例を挙げると、魔法にも属性がある。基本四属性と呼ばれる、火・水・風・土や五行相克など、その属性の数は無数にある。しかし、その無数にあるものも、大きく二つに分けることが可能である。

端的にいうと、『陽』と『陰』の一つである。もちろん、『陰』の力を使つても治癒などはできるし、逆に『陽』の力を使つても攻撃はできる。ただ、『陽』の力は『陰』の力よりもそういう方面に向いているという程度である。

「下手にスクナそのものを取り込む訳にはいきませんからね」

スクナは封印処置を施されているとはいえ、その管轄は関西呪術協会にある。スクナが東の抑止力になっていることも考えると、全てを取り込むというわけにはいかないのである。だからこそ半分の力を取り込むにどめたのである。

しかし、rianは気づかない。自分の行為が、例の襲撃者達の計画の根本に打撃を与えたことに。

「さて、すっかり日も暮れてしましましたし、どうしますかね？」

rianは身代わりを滞在先のホテルに置いてきてるので、自由に行動ができる。そして、rianの予想ではそろそろ、例の襲撃者達が動くと考えている。奴らの目的が木乃香の魔力であることは理解している。

その魔力を何に使つかは分からないが、十中八九、先日の一件のように木乃香を誘拐しようとするだろう。

「一番は木乃香さんのそばにいるのがいいのですが、今、木乃香さんがどこにいるか分かりませんしね…」

木乃香のそばにはエヴァもいる。べつたりというわけではないが、庇護下にあることは間違いないだろ？しかし…。

「エヴァさんがいれば大丈夫なのでしょうが、エヴァさんのあの様子だと目を離しているかもしれませんね…。そうなれば護衛の刹那さんと兄達では、彼らは手に負えないでしょうね…」

エヴァはこの修学旅行を本当に楽しみしていた。特に日本の寺社仏閣をみれるというのは彼女にとってかなり重要なことである。故にあのテンションなのである。

大丈夫だと思いつつも、rianが不安視しているのはこれが理由である。

「とりあえず、総本山の様子を見に行きますかね。そろそろ兄も親書を届けていいでしょうし…」

この場にとどまっていても意味はない。rianはとりあえず総本山に向かい、兄の様子を見に行くことにした。

自分の予想を大きく超えた事態が待っているとも知らず……。

第一十四話 修学旅行二日目 リアン・暗躍する～（後書き）

今回の話は後々、重要な話になります。

第一十五話 修学旅行二日目 ～動乱のはじまり（前書き）

お待たせしました。

第一十五話 修学旅行三日目 ～動乱のはじまり～

SIDE 三人称

夜の関西呪術協会総本山。ここには今、親書を届けにやつてきたネギを始めとして、ここが実家の近衛木乃香、神楽坂明日菜、桜咲刹那、富崎のどか、綾瀬夕映、早乙女ハルナ、朝倉和美が訪れている。ネギもなんとか親書を西の長である近衛詠春に渡すことができた。リアンが詠春と会談し、スクナを取り込んでいる際、ネギは例の襲撃者達の攻撃を受けた。

ネギが退治したのは狗族の少年犬上小太郎。ネギとは相性が最悪とも言える格闘家であつたが、ネギ自身の機転と一人の協力者の力よつて辛くも退けることに成功する。

その協力者は富崎のどか。昨夜、偶然?にもネギと仮契約を果たしてしまった彼女のアーティファクトの力がネギを大いに助けた。そしてのどか自身多量の本を読んでいるため魔法に対する順応性が高く、なんやかんやでネギと一緒に総本山へと来ている。

一方、そのネギ達とは別行動をとっていたのはリアンだけではない。木乃香も刹那（+その他）と一緒にシネマ村を訪れていた。そして例によつて例のごとく、木乃香たちも襲撃に遭うことになった。結

論から言つと、こちらも何とか迎撃に成功し、総本山へと至る。

そしてリアンから木乃香のことを任されていたエヴァンジョンは、
「……」。リアンの悪い予想が的中した形となり、悠久の歴史を感じさせる奈良の寺社仏閣に熱中していく。襲撃のことなど露も知らなかつた。

そして、現在、ネギ達は危機に瀕していた。例の襲撃者達が総本山を急襲したのだ。

「ネギ君……。白い髪……の少年に気をつけなさい……。あの少年は別格だ。君たちのような子供に任せるのは……情けないが、木乃香を頼みま……」

ネギ達の目の前で、近衛詠春は石化した。襲撃者の一人フュイト・アーウエルンクスが放った石化呪文により、かつての英雄もこの舞台から一時降りることとなつた。

「兄貴。命には別状はないはずだ。今は急がないと……。」

目の前で石化した詠春に6年前の光景を重ね、動搖するネギだった
が、力モの言葉でそれを一時的に頭の隅へと追いやる。

「刹那さん。急ぎましょ！」

「はい！？」

ネギは自分の隣に立つ刹那に声をかけ、おそらく木乃香がいるであ
り、大浴場へと駆ける。

総本山からさほど離れていない森の中、一人の少女が必死に走つて
いる。何かから逃げるようにその足は決して止まることはない。

「（あれは一体…！？それに、助けを呼べと言われても、こんな非常識な事態に対応してくれるのは誰も……）」

森の中を駆けるのは綾瀬夕映。彼女は自分の現在の状況にひどく混乱していた。さつきまで自分たちは木乃香の実家の一室でトランプをしていた。

そこに突然白髪の少年が現れて、何か煙が部屋に立ちこめた。その瞬間、部屋にいた自分の親友やクラスメイトが石のように固まつたのである。綾瀬夕映は朝倉和美のとっさの機転によつて難を逃れた。その際に朝倉から『助けを呼べ』と言われたのである。

綾瀬夕映は3・Aではバカレンジャーと呼ばれているが、その実頭はいいのである。だからこそ、助けを呼べと言わされて、混乱しているのである。

普通助けを呼べと言わされたら、警察などに連絡を入れるだろう。しかし、夕映は動搖しつつも冷静に物事をとらえていた。さつきの現象はどう考えても常軌を逸している。ならば、普通に助けを求めても、何の役にもたたないことは目に見えている。しかし、自分では手に余る事態であるが故、助けを呼ばないことにせざりつむなさい。

この矛盾が綾瀬夕映を混乱させているのである。

「……そうだ。あの入達なら…」

そんな夕映に一筋の光明が差した。自分がすぐに連絡の取れ、かつ、この事態に対処できそうな人物達が夕映の脳裏をよぎったのだ。

夕映はすぐさま唯一持ち出せた携帯電話を取り出し、その人物達へと連絡を試みる。

「なんや新入り、やるやないか。こない簡単にに行くなら、最初からお前に任せといたら良かつたわ」

襲撃者達のリーダー天ヶ崎千草は木乃香を手に戻ってきたフェイトに興奮した様子だ。これでようやく、計画が実行できると行き込んでいる。

「早く、ここを離れた方がいい。一応総本山の人間は無力化してき

たけど、もつすぐ『彼』が来るだらうからね

「あないな『ガキ』が何かできるとは思わへんが、早いこことしたことはあらへんしな。ほな、スクナのところに行こうか」

フェイトとの『い』う彼とはネギのことではないrianのことである。彼が来るとなると千草程度では盾にもならぬ。小太郎にしても然り。月詠なら相手はできるだろ。逆に千草はフェイトが言った彼をネギのことだと思いこんでいる。しかし、目的のモノを手に入れた千草、その興奮故に、フェイトの言葉について深く考へることなく移動を開始した。その後ろを追うフェイトは、何かを思案するようその後を追った。

「やはり、予想通りの展開になつたか……」

総本山へと到着したリアンは総本山の惨状を見て、こう呟いた。ネギとは違い、石化した総本山の人々を見てもただ冷静に、静かに総

本山の屋敷内を歩く。

「「」の石化は……」

石化された人達の状態を逐一調べていくリアン。

「（一時的な石化術式ですが、解呪までの時間が長く掛かれば、それだけ根深く石化が進行する。ずいぶんとまあ悪趣味な術式を組んだものですね……）」

これは比較的軽い石化呪文であるため、解こうと思えばすぐにでも解けるが、リアンはそれはしない。助ける義理もないし義務もない。それに解くなら解くで、専用の魔法具を使う必要があり、その魔法具はリアンのオリジナルであるので、非常に高価な魔法具である。ほいそれと使うような魔法具ではないのだ。それに、その魔法具はリアンが永久石化を解呪する研究の副産物的なもので、自分の研究成果ともいえるそれを見ず知らずの他人の為に使いたくないという感情もある。

「どうせこそこそ、この状況は使いようとは使えますね」

リアンは今後の展開に思考を巡らす。この状況は使いようによつては非常に使える手札となる。

「ですが、今はそんな場合ではありますんね。どうあえず兄を追いますかね」

リアンはネギの魔力が総本山を離れていくのを感じていた。そこから導き出されるのは、ネギが襲撃者を追跡しているという状況である。リアンとしてもネギに協力するつもりは皆無であるが、木乃香を救出することには異論は無いため、すぐにネギの魔力の残滓を追う。

「元々賽は投げられた。果たして、この動乱を制するのは誰か……」

第一十六話 修学旅行三日目 ～開戦の狼煙～

SIDE 三人称

古都京都。はるか昔、平安の時代には魑魅魍魎が渦巻き、人と妖怪が入り乱れ、そこはまさしく光と陰の都であった。そして今、その光景を再現したかのことく夜の京都の山中で一つの戦いが口火を切ろうとしていた。

「なんや、久しぶりに喚ばれたと思ったら、相手は子供かいな」

近衛木乃香を攫つた一行に追いついたネギ達は、夫ヶ崎千草が木乃香の魔力を使って喚びだした、優に100を越える鬼達と向き合っていた。

初めて見る鬼という存在にネギ、明日菜は内心穏やかではない。一方、こういったものに慣れている刹那はただ、木乃香の身を案じるだけである。

「ほな、ここはあんたらに任せたで」

召喚した鬼達にネギ達の足止めを指示した千草は木乃香を抱えて離脱する。それを追いたい刹那であつたが、周囲360度を完全に囲まれた状態ではいかんともしがたい。

「（くつ……これではお嬢様が……！）」

焦る刹那。脳裏によぎるのは自身の忌まわしき力。それを使えばこの包囲はたやすく突破できる……が、

「（あの姿を見られてしまっては、私は……）」

刹那は、無意識のうちに明日菜達を見る。その存在が自身に、力を使うことをためらわせている。

そのときだった。刹那達を囮むように竜巻が発生し、召喚された鬼達と刹那達とを隔離した。

「これはマズイぜ。」のまま足止めを食らつたままじや、ジリ貧だ。
「これは二手に分かれるしかない」

渦巻く風の中でカモが提案する。そして三人と一匹は現在自分達にできうる限りの作戦を立て始める。

一方・千草達を追つているリアンも・ネギが生み出した巨大な風の壁をその視界に収めていた。

「時間稼ぎ…ですかね?だとすれば…何か手に負えない状況になつているのか…」

ちょうど風の壁の位置にネギと明日菜・そして刹那がいるのを感じたリアンはこいつ結論づけた。そして・その場所を離れていく木乃香の魔力。

「せいぜい頑張つてもらいますか。私は木乃香さんを追わせてもらいましょう」

手出しあしない。自力でなんとかできないなら・所詮ネギはその程度の器。今回のような状況では弱い者から消えていく。

「さて・撃きましよう。どうやらスクナの所に向かっているみたいですね。こうなつてくると結果的に・私が計画を潰したことになるんでしょうかね…」

冷静に状況を把握しながらも・リアンはさらにスピードを上げた。

「なんにせよ、この機会に取り込んだスクナの力を試させてもらいましょうか」

リアンは、かつてエヴァを相手にしたときと同様、大気中の魔力を
かき集め身に纏っていく。全身にまんべんなく魔力を行き渡らせ、
『以前』のリアンの全力の状態へとコンディションを調整する。

「十中八九、あのフェイトもいるでしょう。……なかなか厳しい状況ですね。せめてエヴァさんが早く到着してくれるといいんですが……」

ないものをねだって仕方ない。リアンは覚悟を決めた。

「戦神舞踏曲。……じゃあいきますか。あとは出たとこ勝負」

身体強化魔法を施し、一気に接敵する。

「よし、到着や。ほな、すぐに儀式に入るでー。」

スクナを奉る湖に到着した千草はすぐさまスクナの封印を解除する儀式の準備を始める。そばにはフェイト。そして少し離れた森の中に犬上小太郎を配置。小つるさこ少女一人と英雄の息子の一人は大量の妖怪に足止めをさせ、保険として用詠を置いてきた。もう一人の英雄の息子は落ちこぼれと名高い出来損ないなので特に注意する必要はない。若干、新幹線でのやりとりのことに不安を覚えるも、千草にはどうとでもできる算段があった。

「スクナや…。ここにつかえ復活させれば、誰もウチを止めることはできん！なんせ、こいつはあのサウザントマスターですら滅することはできず、封印したぐらいやからな」

しかし、彼女は気づかない。落ちこぼれと、出来損ないと評した英雄の息子が迫りていることに…。

そのことこのち早く気づいたのはフェイトだった。

「来る……」

「あ？誰が来るんや、新入り？」

フュイトの独白ともとれるつぶやきに過剰に反応する千草。しかし「一の言葉は出る」とはなかった。

襲撃にいち早く気づいたフュイトは敵の来る方角、距離、速度を見極める。そしてその進路上へと瞬動で移動した。そして次の瞬間……

「な、なんやつ……？？」

湖に巨大な水柱が出現した。それだけではない。何かと何かが衝突した衝撃波が湖面を大きく波立たせ、その様は荒れ狂う大海原を彷彿とさせる。

「止められたか……」

「フ……君なら来ると思つてたよ」

「そりです……かつ……」

初撃は失敗、見事にフュイトに止められた。少ない言葉の応酬。次

の瞬間にはリアンの蹴りがフェイトの側頭部を捉える。フェイトも右腕を跳ね上げ防御を試みる。

「（…なつー？）」

完全に受け止められると思つたリアンの蹴りは防御もろともフェイトを吹き飛ばす。そしてリアンは即座に千草のもとに移動する。

「なあああんたは！？」

「木乃香さんは返してもらいま…っ！」

一息に木乃香を奪還しようとしたリアンだが、次の瞬間にはお返しとばかりにフェイトの蹴りが腹部に直撃。有無をいわさず吹き飛ばされる。

「……千草さんは儀式を続けて。彼の相手は僕がする」

「新入り…」

未だ、現状の把握ができるていない千草であつたが、自分の成すべきことを思いだし、フェイトに全てを任せることにした。

「やつぱり、簡単にはいかないか…」

「驚いたよ。一昨日とは比べものにならないね。それが君の本氣かい？」

「さあ、どうでしょうね」

いつの間にカリアンはフェイトの眼前に現れた。フェイトに吹き飛ばされたカリアンに特に負傷は見あたらない。両者はそのまま互いを見合ひ。

「…君となら『樂しく』戦えそうだ」

「『樂しく』？人形のあなたが面白いことを言つ」

「僕も少し『本氣』というものを出してみるよ。君の『本氣』を知りたいしね」

「…あいにく、私はあなたを相手する理由はないんですがね。私は木乃香さんを連れ戻せればそれでいいんですが」

「まあ、そうつれないとこをいわないでよ」

互いに醸し出す雰囲気に、否応にも周囲の空気は張りつめていく。二人が立つ木製の桟橋も軋み、静まりかけていた湖面も再び波打つ。離れている千草にもそのプレッシャーはひしひしと感じられる。張りつめた空氣に耐えられず、桟橋が一際大きく軋んだ瞬間。

一人の足下の桟橋は爆ぜ リアンとフォイトは衝突する！

「よし、作戦も決まった。兄貴と刹那の姉さんの仮契約も済んだ。
準備はいいか？これからは時間との戦いだ！」

竜巻の中の三人と一匹も作戦が決まり、動き出すようだ。

「それじゃ、兄貴でかいのを頼む！」

「分かった。ラス・テル・マ・スキル・マギステル……」

三人の作戦はこうだ。この場に残つて鬼達の相手をするのは本来、
こういった相手が本職の刹那。そしておあつらえ向きのアーティフ
クトを有する明日菜の一人。そしてネギはその間に木乃香を奪還
し即時離脱。実にシンプルな作戦である。

「雷の暴風！！」

竜巻の防御壁が消えると同時に、ネギの最大魔法がその斜線上の鬼達を消し飛ばす。そしてネギは父の杖に跨りその場を離脱、木乃香のもとへと急行する。かたや地上の二人の少女は決意をこめて鬼達を見やる。

その瞬間、湖の方から轟音が夜の京都の山に響き渡った。そして僅かながら大地が振動する。

それはまぎれもなく、rianとfeytが激突した瞬間だった。

第一十七話 修学旅行三日目 リアン覚醒

リアンとフェイトの激突。生じた衝撃波は先ほどとは比べものにならないレベルだ。一度目の正面からの衝突は互角。そして一人は互いに反発するように距離を取る。

リアンは魔力で刀を創り出す。対するフェイトも無骨ではあるがかなりの鋭さを持つ石の剣を創り出す。

「（これは…）」

リアンは今回、魔力を創り出す際にスクナを取り込んだ際に得た神通力を従来のそれに組み込んでいた。割合では微々たる量であるが、それは確かにそして大きな変化を与えていた。

「なかなかの剣だね。いや刀かな…？」

フェイトですら思わずそつ漏らすほどの魔刀がそこにあった。

これまでの魔刀はあくまでもリアンの魔力をただ『刀の形』に押し固めていただけであつた。しかし、現在の魔刀は違う。限りなく本物に近く、それはリアンの思い描いた『刀』の形をしていた。

「（うれなら他のも…）」

表情には出さないがリアンも内心驚いていた。そして同時に感心していた。さすがは神格を有するだけのことはある。リアンはこれが終わつたら神通力の研究も始めようと、なんとも場違いな決意を固める。しかし、今は感心すべき時ではない。今は戦う時である。

そして三度、二人は衝突する。

リアンとフェイトは互いの剣で切り結びつつも互いに多彩な攻撃を繰り出す。リアンが右足をフェイトの頭部めがけて蹴り上げると、フェイトはそれを僅かに後退しかわす。そしてがら空きになつた胴体めがけて横薙ぎを放つが、リアンは蹴り出した右足のそばに魔力壁を構築し、それを足場にフェイトの剣を背面跳びの要領で回避。リアンの身体能力の高さが伺える動きである。

「障壁突破・石の槍」

「魔爆」
ボム

無詠唱によつて素早く放たれたフェイトの石の槍は、その進路上に設置されたリアンの魔力によつて爆発。

「投擲槍」
ランス

爆発の煙が一瞬リアンの姿を隠す。それに合わせてリアンは一気に50もの槍を生み出しフェイトに向かつて放つ。同時に手に持つ魔刀も投げつける。

「…へえ」

煙の中から次々と飛び出してくる槍を見て簡単の声を漏らすフェイト。その目には焦りや恐怖といったものは全く見られない。相も変わらず無機質な瞳である。

リアンが放った槍を次々にはじいていくフェイト。50ある槍を全て捌いたところに先ほどまでリアンが持っていた刀が飛来する。

それもさきほどと同様に弾いついた瞬間…

「崩壊」
バースト

それが突然爆発したが、その爆発は障壁によって無効化される。しかし、次の瞬間フェイトは地面に叩きつけられた。

「^{フレス}
圧殺」

リアンが生み出した不可視の薄い魔力板が頭上からフェイトを地面に押しつけたのである。さらにリアンは追撃する。

「魔砲」

従来のそれとは比べものにならない巨大な砲撃がフェイトに向かう。

「君の技は厄介だね。詠唱もないし、不可視の攻撃までは…」

フレスが消え、魔砲が直撃する間の刹那にフェイトは移動し、リアンの放った魔砲は湖の水を吹き飛ばし、巨大なクレーターを創り出す。

「ヴィシュ・タルリ・シュタル・ヴァンゲイト。おお、地の底に眠る死者の宮殿、我らの下に姿を現せ……『冥府の石柱』」

さつきのお返しと言わんばかりに大質量の柱状の一枚岩をリアンに放つ。その数は6。しかしおはんに焦りはない。

「破ッ！..」

一本目は正面から殴り壊す。二本目は蹴り碎く。三本目は投擲槍で串刺しにして爆破。四本目と五本目は魔砲で消し去る。そして最後の一本は…

「これは返しますよッ！..」

強化した身体能力でもって受け止め、フェイトへと投げ返す。そして石柱の陰に隠れるように接近する。

「千刃黒曜剣」

投げ返された石柱は漆黒の剣によつて細かく切り刻まれる。八本の剣がフェイトの周囲を多角的に動き回り、ある種異次元の斬撃を可能にする。

「それはいいですね。では私も……」

リアンはフェイトの真似をする。魔刀をフェイトと同じ数だけ創り出し、それを意思で操れるように即座に術式を構築。そして実行する。リアンの剣とフェイトの剣が凄まじい速度で衝突し合う。

「ねえ、君の目的はなんだい？」

「突然なにを言い出すかと思えばそんなことですか……くだらないですね。ただ生徒が誘拐された。それだけの理由ですよ。…そういうあなたこそ目的はなんですか？見たところあなたの目的はこの騒ぎとは別のところにあるようだと思えるのですがね」

「…君に嘘をついても仕方ないね。僕の目的はあのスクナの調査だ」

「なるほど。あわよくばスクナをかすめ取るつもり、よしんばでき
なくてもその力を見極めるといったところでしょうか」

「そんなどころで。それよりいいのかい？千草さんが詠唱を終えた
みたいだよ」

その言葉どおり、スクナの封印石がまばゆく輝き湖をあまねく照ら
す。時同じくしてネギが到着した。

「別に構いませんよ？」

「ガアアアアアアアアア…！」

『どうせあれは抜け殻ですね…』といつリアンの呟きはスクナの咆哮により、目の前のフロイトにも聞こえることはなかった。

第一一十七話 修学旅行三日目 ハーリアン覚醒（後書き）

次で戦闘は終わりにして、交渉（脅迫？）に移ります。

お楽しみにーー！

第二十八話 修学旅行三日目 ～終戦～

S I D E
三人称

封印から解放されたスクナの咆哮が湖に響き渡る。リアンにその力の大半を奪われたとはいえ神格を有する大鬼神。その残り僅かな力でさえも圧倒的である。

さすがは、あのサウザントマスターをして封印しかできなかつた怪物といったところだらうか。

「ハハハハハハッ！…どうや、この力！。この力さえあれば魔法使いなんぞ恐るるに足りまへん」

スクナを復活させた千草は高らかにしゃべる。その傍らには木乃香もいる。

「ラス・テル・マ・スキル……」

一瞬の逡巡の後にネギは自身の最高の魔法の詠唱に入る。スクナの力はネギにも分かる。自分の実力よりも遙かに上であると。しかしだからといって何もしないという選択肢は存在しない。そこに自分の生徒がいるのだから。

「雷の暴風！！」

ネギが放った魔法は一直線にスクナに向かう。これはネギが出せる最高の出力の魔法であった。込められた魔力もこれまでのそれと比べても遙かに上回る。

しかし、それでも相手は大鬼神。ネギの雷の暴風に対し、僅かに防御する素振りを見せたものの、取るに足らない攻撃だと判断したのか、甘んじてそれを受けた。その視線はリアンを捉えていた。

スクナに直撃したネギの最大魔法は特にスクナに傷をつけることなく霧散。それを見て、千草はさらに高笑いする。英雄の息子とはこんなものかと。

「そんな…」

「（マズイ状況だ。……！）そうだ、兄貴！ カードだ！！！」

自分の全力の魔法がいとも容易く霧散し、全く効いていないことに驚きを隠せないネギ。そして肩に乗るカモはこの状況を開すべく思考を巡らせ、一つの案を思いつく。

「とても見習いとは思えない魔力だね…」

「よそ見は厳禁ですよつーー！」

「ーーー」

その一方で上空に位置するリアンとフェイトは一つの結末を迎えた。ネギが魔法を放つ瞬間、フェイトはそちらに意識を向けた。まるでその力を推し量るような目で。

リアンはその隙を見逃さない。一瞬で間合いを詰め、フェイトをネギの方に向かつて叩きつける。

「さて、兎にはかなりきつい相手でしょうが。これも経験です」

厄介者フエイターをネギに押しつけて、rianはスクナを見据える。さつきからスクナが自分を見ていることに当然rianは気づいていた。

「本能的に私の中の力を感じたのでしょうか？」

スクナとrianの視線が交差すること数秒。先に動いたのはスクナであった。その巨大な右腕をrianめがけて一直線に振るつ。

「な、なんや！？」

千草は自分が指示しない動きをするスクナに動搖する。術で自身の支配下に置いているはずの鬼神が自らの意思で行動している。驚くのは仕方ないが当然と言えば当然。そもそも千草のような三下の術者に神格を有する大鬼神を支配できるはずがない。

「チツ……」

無意識に舌打ちをしたリアンはスクナの右腕を大きく回避する。

「（倒せない）ことないが、‘手の内を」」で見せたくはないですね。エヴァさんは何をしているんでしょうか。そろそろ来てもいい頃ですかね）」

リアンがいた場所を暴風を伴ってスクナの腕が通過する。

「わ… とりあえずやるだけやってみますか」

リアンは決めた。現状の力のみでスクナを相手取ることを。

「ふう、全く彼は容赦ないね」

リアンに棧橋めがけてたたき落とされたフェイトは服の埃をほたきながら立ち上がる。

「え、君は…？」

「ああ、君かい。ネギ・スプリングフィールド」

田の前に落ちてきたフェイトに田を見開くネギ。

「よくも、刹那さんや明日菜さんにひどいことを…それに木乃香さ

んまで……」

フェイトに向かつて杖を構えるネギ。その肩ではカモガアワアワ言つてゐるが、逆上しているネギにはその言葉に耳を傾ける余裕はとうになくなつてゐる。しかしそこは優等生。

「召喚！－！『神楽坂明日菜』、『桜咲刹那』－－！」

カモの助言を忘れてはいなかつた。一人では手に余る相手でも複数人でなら…といったところだろう。ネギの近くに直径一メートルほどの魔法陣が浮かび上がり、そこから足止めを喰らつっていた明日菜と刹那が召喚される。仮契約カードの便利機能の一つだ。

「な、なによアレ！？…つてあんたは！？」

「く、お嬢様！？ 貴様つ……」

召喚されて早々、一人して同じような反応をする。巨大な鬼神は気になるものの、田の前には憎き白髪の少年がいる。

「やれやれ、君たちでは相手にならないよ」

「そんなのやつて見なきやわからぬでしょ……」

言うは易く行うは難しとはまさにこのこと。一氣呵成に三人は波状攻撃をフェイントに仕掛けるが、ことごとくそれはかわし防がれ、逆にカウンターを喰らつて三人仲良く吹き飛ばされる。

「石の息吹」

「あれはマズイ！！」

「ネギ！..！」

三人がうまく固まつた所に石化効果のある煙が襲いかかる。とつさに三人は大きく後退したが、かすつてしまつたのかネギが右腕を押さえている。

「ネギ先生..！」

「大丈夫です。かすつただけです」

一応戦闘経験のある刹那はネギの僅かな異変に気づき声をかけるが、ネギは大丈夫と一蹴。本能だろうか。ネギも今は弱音を吐くときではないと悟っているのだ。

実力差は明白。三人がかりでも掠りもしない。しかもこいつちは満身

創痍と言つても過言ではない。

そして、刹那は一つの決意をする。

「ネギ先生、神楽坂さん」

やつくりと語り出した刹那。そして、バサツと云う独特の羽ばたき音とともに刹那の背中に純白の翼が現れる。

そしてやつくりと自分が恵み子であることを語る。おさらへこのときの刹那の心境はかなりぞわついていただらう。

「す、綺麗です」

「やうよ。それに『そんなこと』で木乃香が刹那さんを軽蔑すると
思つの？木乃香なら絶対綺麗やな～っていうわよ」

正直なネギと明日菜の言葉に思わず感極まる刹那。これまでこの翼
は忌み嫌われるものであった。褒められることなど一度たりともな
かつた。

「鳥族のハーフか…。気づかなかつたな」

ここに致命的なミスを三人は犯した。どんな状況であれ、敵を目の
前にして自分たちの世界に浸るのは愚の骨頂。そんな状況を見過ご
してくれるほどフットイトは甘くない。

この二人では避けようのない完璧な一撃。しかし…

「随分と楽しそうだな。小僧？」

「つーーー！」

突然現れた乱入者によつてその一撃は防がれ、次いで放たれた乱入者の拳はいとも容易くファイトの障壁を突き破り、その腹部に突き刺さる。

まるで石が湖面を跳ねていくようにファイトは吹き飛んでいく。

「え・エヴァンジエリンさん！？」

乱入者はエヴァであった。まるで狙っていたかのよつたタイミングでの登場であった。

「なんやこれは…？」ときかんかい……」の……

千草は自分の命令を全く効かないスクナに困惑している。こんなはずではなかつた。スクナを復活させたら、まずは東の魔法使いを殲滅し、次に西の関西呪術協会を滅ぼして仇をとるつもりが、苦労して復活させたスクナは自分の命令なんか聞く素振りもない。現に目の前の落ちこぼれと呼ばれる英雄の息子を執拗に攻撃している。まるで何かを取り戻すよう。

だからこそ千草は見逃した。

「お嬢様は返してもうひとつ…。」

「なつ…？」

エヴァが現れたことによつフロイドを相手にする必要がなくなつた刹那がその純白の翼をもつて、千草に接近。そして木乃香を奪還したのだ。

「（桜咲セラガヒルニテハシテハシメ…）」

リアンはスクナの攻撃をかいくぐりつつ、下を見る。

セリには確かにエヴァアがいた。

「【遅いですよエヴァさん】」

「【ふん。それは悪かったな】」

「【とりあえずこの場をお願いします。エヴァさんがあれば問題ないでしょ。私は行くべきところがありますので】」

「【…まあいいだろ。そいつは壊していいんだな?】」

「【ええ。もちろんです。派手にやつてください】」

念話での簡単なやりとりを経て、リアンはスクナから大きく距離を取る。その後、スクナに何かが衝突し、スクナは大きなうめき声とともに結界に拘束される。

「茶々丸さんか…」

湖の畔に巨大な狙撃銃も持った人影が宙に浮いているのを確認したリアン。それはリアンもよく知る茶々丸であった。

「… もようならですね。大鬼神リョウメンスクナよ。あなたの力は
せいぜい上手く使ってあげますよ」

そう言い残しリアンは本山に向かつて超長距離瞬動を敢行。一瞬で
戦場を離脱した。

そして残されたスクナは、その後エヴァの魔法によつて粉々に打ち
砕かれ、再封印が施されることになるのであつた。

第一十九話 修学旅行三日目（後始末）

SIDE リアン

「これで最後…」

現在私は総本山へとやつてきています。そして、総本山で石化している人々を全員大広間に集めていて、やつと最後の一人を運び終えた所です。ざつとみて50人弱はいる。おそらくこの屋敷にいる人間全員ですね。

その中から目的の一人の石像を探します。

「…あつた」

そして、その石像に対して、本来であれば使つつもりはなかつた、私が作成した石化解呪用の魔法具を使って、石化を治癒します。これは針のような形状をしていて、対象に刺すことによつてその石化を解呪する代物です。

頭に刺してもいいですが、シユールなんで肩に刺します。瞬間、ガラスが割れ飛び散るように石がはがれます。

「う……う……ほ……」

お決まりの台詞ありがとうございます。ですが、そんなのんきなことを言つ暇は与えません。

「『氣づかなかったか』

「リアン君…。」「…これは…？」

遅いよ、『氣づくのが』。というより全てが。まあいいでしょう。

「見ての通りです。」の総本山の人間は全員石化されたようですね。
もちろんあなたも」

「では、木乃香は…？」

「…とりあえず無事なんじゃないですか？」

私は最後まで見ていませんが、先ほどスクナの反応が消えたからと
りあえず事は終局を迎えたみたいです。しかし、それを素直に教え

る必要はありません。この人は何もしてないです。

「…私の石化はリアン君が？」

「ええ。私のオリジナルの魔法具を使用しました。とりあえずあなただけね」

「では、ここにいる者達の治療をお願いできないうちか？」

「別に対価をえいただければ構いませんよ？ああ、既にあなたに対して使用してしまった分については、こうして話をする必要があるから、とりあえず必要経費でいいとしても、ここにいる人達を治療するなら相応の対価を要求します」

無償で治療なんて誰がしますか。ただでさえ石化治癒の魔法具は高価ですしね。

「…君はこの状況を見て何も思わないのかねー君にはこの状況を、

石化された人々を治す力、方法をもっている…「少し黙りましょうか」…」

「この状況を招いたのは誰ですか？他でもないあなたでしょう？十分に対策を練る時間はあった。それをあなたはろくに使えもしない役立たずの護衛と見習いの英雄の息子に頼るだけ。その結果がこれですよ？だいたい、今回の騒動はそちらのお家騒動です。それに何故修学旅行で京都を訪れているだけの私たちが巻き込まれるのか？これ昨日も言いましたよね？忘れたとは言わせませんよ」

「それは…」

「別に治療なんてせずにこのまま帰つてもいいんですよ？この人の達には何も関わりはないですし。感慨もないですね。死ぬなら死ぬで結構。永遠に石化が治らないならそれはそれでいいです」

所詮他人事。ましてやこいつがきちんと対策を取っていればここまでの被害にはならなかつた。自業自得ってやつです。

「それにこの石化は永久石化ではありませんが、右化してから解呪

までの時間が長ければ長いほど石化の進行は進み、解呪が難しく、そして後遺症がでてきます。そういう術式になっています。明日来るという手練れの術者に任せるのもいいですが、果たしてそのとおりに上手く解呪できますかね？」「

あなたが選べる選択肢は二つ。ここで私に解呪を依頼するか。明日まで待つて、来る増援とやらに解呪させるか。

前者のメリットはこの場で全員石化を完全治癒できること。それによつて今宵の騒動の処理に迅速?に動ける。デメリットは私が要求する対価が何か分からぬことぐらいですかね。

逆に後者のメリットは特にない。むしろデメリットとして、今宵の騒動の処理が遅れる。完全に石化が治癒されるかは分からないといったところですね。

ここに後者を選択するなら、この人はよほどの馬鹿です。一応選択肢は二つありますが、選択できるのは現実的に考えて前者だけです。

スクナの再封印処理もしなくてはいけないし、おそらくエヴァさんが捕らえているであろう天ヶ崎千草の身柄や今回の件に関与した組織の者の処罰などることは多々ある。ここでぐずぐずしていくは新たな政争がおこることは明白。そもそも近衛詠春という人間は、関西呪術協会において疎まれていると言つてもいい。强行派の人間からすれば早く蹴落としたい人物であることは間違いない。

そんな强行派からすれば今回の天ヶ崎千草の起こした事件は格好の材料である。このような反乱ともとれる行動ひとつ満足に鎮圧できないどころか、それを鎮圧したのは東の魔法使いである。

十分すぎる材料だ。私ならすぐさま行動を起こしますね。政争において重要なのは速度ですし。

「さつきから考えすぎでしょ。10歳の私がすぐに考え
つくのに、なぜ倍以上生きてるこの人がこんなに考え込むのでしょ
うか。」

「決断は早いほうが全てにおいて好みいですよ？いつまでもわたしがあなたの答えを待っていると思わないことです。さつきもいいましたが、別にあなたたちがどうなるうと知ったことではありません

「…」の者たちの石化を治してください

… ようしい。しかし時間が掛かりすぎです。

「では対価ですが、この関西呪術協会にある陰陽術の巻物の複写を頂きましょう。もちろん秘術・禁術も含めて全てです」

「なつ！？」

日本古来の陰陽術には反魂の術を初めとして、人の生命・身体に作用する術が多數ある。これらの術式の成立プロセスを解き明かすことによって永久石化の解呪も進展があるかもしません。

「ああ、安心してください。別に悪用するつもりはありません。私の研究に使うだけです。もし、関東魔法協会がその技術をどうこうしようとするときは、完全に叩き潰してやりますから」

「…わかりました」

とうより、関東魔法協会つてあの世界樹が無くなれば存在意義を無くしますよね。あの程度なら余裕でアンリ・マンコを使って取り込めそうですね。

これは珍しい。渋ると思いましたが、思いのほか素直ですね。まあ、渋ったところで断ることはできないのですがね。

「交渉成立ですね。ああ、言つておきますが後で、この件をうやむやにしないことです。あなたとの間で今の交渉に関して、ギアス『制約』を掛けさせてもらいましたから、素直に従うことをおすすめしますよ。契約を反故にした瞬間、この石化になつている人達が、せっかく石化を解呪したのに再び石化しますよ。もちろん、そのときはほぼ永久石化に近い形の石化になります。ちなみに、私がこのまま石化を治さなかつた場合の代償は私の命です」

このギアスについては術者、つまり制約をかける側の代償が大きいほどその効力は比例して大きくなります。その点、術者の命というものは代償としては最上級のものになるので、制約を当然大きく掛けることが可能。

「「」理解いただけたところで、早速履行しましょうか。私も自分の命は惜しいですからね」

さて、交渉も成立しましたし、ときぱき作業に取りかかりますか。それにしても、学園長と言い、この人といい組織のトップがこれでは、組織の未来は真っ暗ですね。

第三十話 修学旅行最終日 リアン 考える

SIDE リアン

「ふむ……」

いろいろあつた修学旅行も最終日を迎えました。今日も完全自由行動日となつていて、ある人はおみやげを買いに、ある人は朝から温泉につかってのんびりしたりと、自由な時間を過ごしています。ちなみに兄たちは父の別荘に行っています。エヴァさんもそれに着いて行きました。

昨夜の一件。私が湖をしてからの経過は茶々丸さんから詳細を聞きました。

結論を言うと、スクナはエヴァさんが『永遠の氷河』で碎いたそうです。そして、あのフェイントについては、そのときには既に戦線を離脱していたとのこと。首謀者天ヶ崎千草についてはチャチャゼロさんが捕縛。犬上小太郎という狗族のハーフの少年は自首のことです。神鳴流剣士のゴスロリ少女、月詠も行方不明。

つまり犯行グループの内、フェイントと月詠という、実力で言えばトップ2はまんまと逃がした結果となりました。

幸いにして死者は一人も出ませんでした。しかし問題がいくつあります。

一つは、長瀬楓及び綾瀬夕映、古菲の三人がこちらの世界を知ってしまったこと。次に、木乃香さんが兄と仮契約をしたことです。

前者については、もともと長瀬さんは忍者であって、半分裏の関係者があるので、まあ問題があるといえばありますが、許容範囲でしょう。綾瀬夕映さんについては、本山に来ていた3・Aの生徒の中で、唯一石化を免れたようです。そして、本山を逃げ出し、応援を呼んだ。その応援の中に、長瀬さんと古菲さんがいたとのこと。こ

の辺は私の関するところではないので、兄次第です。

次に木乃香さんと兄の仮契約については、これは完全に予想外でした。何でも、兄はフェイトの石化の息吹にかすついたらしく、全てが終わったときには右腕が石化していらっしゃいです。本来であれば一気に石化するはずが、兄の魔法抵抗力が高いためにそのような状態にあつたとのこと。そのため、全身に石化が回る前に、首まで石化した段階で窒息死する可能性があつた。

そして、ここで問題が起きた。その場にいた顔ぶれ、明日菜さん、エヴァさん、木乃香さん、桜咲さん、長瀬さん、古菲さん、綾瀬さん、長瀬さん達とともに応援に来てくれた龍宮さん、あと生ゴミが一匹。

このメンバーの中で一番魔法に詳しいのは言うまでもなくエヴァさん。しかし、エヴァさんは治癒魔法が苦手です。元々、真祖の吸血鬼であるエヴァさんは負傷しても自己再生ができるから治癒魔法が必要になる場面が低かつた。そのため数ある魔法の中でも治癒魔法に関しては、言い方は悪いですが、役に立てなかつたというわけです。

では、どのようにして兄の石化を治したのか。すばり、木乃香さん

との仮契約です。この話と合わせて聞いた話ですが、昨日の昼間に木乃香さんがシネマ村で襲撃を受けた際、刹那さんが木乃香さんをかばつて矢を受けたらしいです。しかし、その傷は、おそらく自己防衛本能による、木乃香さんの魔力の軽い暴走によって完全に治癒されたとのこと。

そして、仮契約を行う際には主と従者の魔力バスがつながる瞬間、従者の能力が一瞬だけ表層化されます。その表層化した能力がカードの形になつたのが仮契約カードというわけです。

つまり、木乃香さんの能力が治癒にあると仮定して、兄と仮契約をする」とこより兄の石化を治癒しようとした。

結果として、この試みは成功。兄は無事に石化が解除されたようです。しかしこれによつてもつと大きな問題が生じました。英雄の子同士が仮契約をしてしまったのです。しかも、魔法使いと、陰陽士という相容れない組織の者が。木乃香さんについては陰陽士というわけではありませんが、父は呪術協会のトップ。普通に考えて、木乃香さんは次代の関西呪術協会の長です。それが魔法使いと仮契約したというのは、西の呪術協会からしてみれば気に入らないことは当然。となると今回以上の事件が起こる可能性もあるというわけです。

とまあ、一応まじめにこいつやって考えましたが、所詮他人事。確かに木乃香さんにはお世話になりましたし、何とかしてあげたいと思いますが、こちらの世界、自身の立場を理解した上で踏み込んでくるなら、それは自己責任。あとは主である兄に任せましょうか。従者を守るのは主の役目です。

昨夜の顛末はこんな感じですね。まあ、あと挙げるなら、桜咲さんが木乃香さんと仲直りしたみたいですね。いろいろと吹っ切れただんでしょう。

そして、私は現在、自分の部屋にて昨日の契約内容である「陰陽術

の巻物を一つ一つ確認しています。今朝届いたばかりです。近衛詠春もやればできるのだから、いつもこの位の早さで仕事をすればいいのですがね。

「…」これで終わり

最後の巻物を確認して、これで契約は完全履行となります。ギアスは解除されました。

「しかし、この禁術はすごいですね」

思わず一人で簡単の声を出します。目を見張るのはやはり禁術。特に反魂の術にいたっては、術式として完成系に近い。惜し

むらくは死んだ人間の蘇生是不可能であることに気づくべきだった。この術式の研究過程でかなりの人間が死んだであろう事が容易に想像できる。しかし、それを除いても、この術式については非常に興味深い。

他の禁術にいたっても同様である。これらの技術を上手く応用できれば研究もかなり進みそうだ。

「今回の事件はある意味感謝ですね……」

今回の契約、明らかに魔法具を使つたことによる損よりも、この眷物の山による利益のほうが大きい。いい契約をしたと思います。

「これらをじつくり見るのは麻帆良に帰つてからじこしますかね」

旅行バックの中から、野球ボールほどの大きさのガラス玉を取り出します。これは別荘の一種です。使用目的はまさに倉庫。だいたい、これ一つに、東京ドームとやら一杯分の荷物が入れられるそうです。ちなみにお値段1,000万円。

値は張りましたが、それに見合つだけの「コストパフォーマンスを見せてくれます。」この中には現在、私が先日使った魔法具を始めとして、治療薬や薬草、各種魔法薬の材料などが入っています。

これに巻物を全て入れたことを確認して、封印術式を起動。これで私以外には荷物を取り出すことはできなくなります。ついでに見た目もただのガラス玉のように無色透明になりました。それを元に戻して…と。

「…さて、私も仕事をしますかね」

修学旅行最終日・自由行動日とはいえ教師としての仕事が無くなるわけではありません。はやく研究をしたい気持ちがありますが、まずは『えられた仕事をこなさないといけませんね。

ああ、これが社会人の辛さってやつですかね。自分のやりたいことができないこの感じ。

まさか、10歳でこのようなことを考ふるになるとは思つてもいませんでした。

第三十一話 ネギ弟子入り！？

SIDE 三人称

「ちょっとネギーどこ行くのよー？」

修学旅行の振替休日。新緑が芽生え、夏の兆しが見え始める今日この頃。ネギは朝から自分の部屋を飛び出し、ある場所へと向かっていた。それに着いてきたのは明日菜。

「ある人の所です。この修学旅行で僕は自分の実力を痛感しました」

修学旅行の一件。ネギはもできなかつた。スクナを倒したのはエヴァ。木乃香を取り戻したのは刹那。では自分は？

答えは何もできなかつた。あの白髪の少年にいいようにあしらわれた挙げ句、石化魔法にかかつてしまつた。それに、聞くところによると、石化された近衛詠春他何十名を治療したのはリアンというではないか。

「今の僕では誰も守れません。ですからある人に弟子入りをしようと思つています！」

リアンには負けたくない。第一リアンは魔法が使えないはずだった。しかし、現実は違う。新学期にあがつて早々の模擬戦でネギはリアンに完敗した。それに、修学旅行の湖畔での一戦。リアンと白髪の少年の戦いをほんの一部だけ見ることができた。それはリアンと自分の実力差を実感させるには十分だった。

「まあ、あんたがその気なら私は何も言わないわよ。それで？ その人って誰よ？」

明日菜の疑問は、すぐに解消されることになる。一人がたどり着いたのは、麻帆良の郊外にある森の中のログハウス。

そう、エヴァの家である。

「ええ～つー？ エヴァちゃんに弟子入り！ ～？ ？」

エヴァの家について早々、ソファーでくつろいでいたエヴァに向かって片足をついて弟子入りさせて欲しい旨告げた。

「ほつ…。この私に弟子入りか。その理由はなんだ」

一人で驚いている明日菜を放つておいてエヴァはネギに問いかける。

「はい！修学旅行でのHアンジエリンさんの戦いを見て、僕が強くなるにはこの人しかいないと思いました！！」

「ほつ。つまり私の戦いに見惚れたか」

エヴァはその高すぎるプライド故におだてられるといそれに乗つてしまふ。ましてや、そのおだてている人物があるサウザントマスターの息子であればなおさらだ。同じ息子であるリアンはこのよう

なことは一切無かつた。

そもそもrianについては、自身のスタイルが確立されていて、教えることがなかつた。むしろ教えることができなかつたというのが現状である。rianが麻帆良に来てから、エヴァが行つたことも、体術を教えたり、魔力運用のコツを教えたりと、言つては何だが見栄えのしないものばかりであつた。

しかも、rianは一つ教えればそこから十は行かなくともハは知るので、今となつてはエヴァでさえ教えることは無くなつているのである。たまに模擬戦をする程度である。

そんなエヴァだからこそ、ネギは素材としては面白かつた。今はまだ原石にしかすぎない状態。これを自分の思うように削り磨き上げることができるのである。600年を生きるエヴァにとっては一種の道楽でもあるのだ。

しかし、ここで素直に『わかった。弟子にしてやる』と言ひのけつまらない。

「いいか、坊や。私は悪の魔法使いだ。悪の魔法使いに頼み事をするときは何か代償が必要だ」

ちょうど暇だったから少し遊んでやろう。そういうた顔だ。何か得体の知れないオーラのようなものも背後に見える。横にちょこんと座っているチャチャゼロに至っては、主の雰囲気が変わったのを感じてその顔に笑みを浮かべている。

「だ、代償ですか……？」

「ああ。まずは私の僕として忠誠を誓え。そして……」

ネギもエヴァの雰囲気に圧倒されている。

「私の足を舐めろ。話はそれからだ」

.....

.....

：

エヴァの一間に部屋の空気が凍つた。その空気の中、いち早く動き出したのは……

「なに、子供にアダルトな要求してんのよ……」

明日菜であった。アーティファクトであるハリセンを召喚し、エヴァの横っ面に一撃。スパークと心地よい乾いた音が響き渡る。

「何をすむーー？」

「エヴァちゃんじー、何言つてゐのよー子供に要求する内容じゃないでしょー？ もう、ネギ・エヴァちゃんに弟子入りするのはやめなさいーおかしくなるわよー！」

「ええつーー？」

「おかしくなるとはなんだーー？」

「そのまままよーー！」

そして神楽坂明日菜／エヴァンジエリンの幼稚な言い合いで始まつた。その横でネギはアワアワ言つてゐるだけである。その間も髪を引っ張り合い、頬を抓りあう。非常に幼稚な喧嘩である。

一人でもみくちゃになること数分。意を決したネギは声をかける。

「あ・あの～…」

その一言で一人は止まる。そして一人はぱつが悪そつに離れる。

「チツ…。とんだ邪魔が入った」

「自業自得よ！」

「まあいい。弟子入り試験に合格したら考えてやるよ

「本当ですか！？」

「ああ、一週間後に試験を行う。…それよりも聞きたいことがある

數から棒にエヴァがネギに質問する。

「坊やはなぜ私を選んだ?別に私じゃなくともジジいやタカミホとか、師匠なんぞいくらでもいるだろ?」

「…それは、リアンもエヴァンジョンセスに弟子入りしているからです。」

ネギはリアンとエヴァの真実の関係を知らない。いろいろと察するに二人の関係は師弟関係であると推測した。

「言つておぐが、リアンは私の弟子ではない。単に私の庇護下にあるだけだ」

「えつ?弟子じゃないんですか!?」

「違うな。あいつは私の知識を必要としただけだ。その代償として私と協力関係を結んでいる。確かに最初は魔法について師事してたが、今では独り立ちしている。私にはもう教えることはない。お前も少しは見たんだろう?リアンの実力をな」

「それは…」

確かに見た。そして自分とリアンとの差を痛感したからここにいるのだ。落ちこぼれと言っていた魔法を使えないリアンがあそこまで強くなれたのはエヴァさんに弟子入りしてるからだとネギは思つた。

だからこそ、自分もエヴァに弟子入りすれば、魔法の使える自分はリアン以上に強くなれると思った。魔法も満足に使えないリアンよりも自分が優秀だ。師が同じなら、実力は弟子の才能で決まる。短絡的にネギは考えていた。

「あれでもリアンは全力でもなければ本気でもない。いい機会だからついでに教えてやるが、リアンは強いぞ。本気になればそれこそタカミチなんか相手にならないだろ？」

エヴァの一言は重い。しかし事実そうなのだから仕方がない。ネギはエヴァの言葉にうつむいている。

「なに落ち込んでるのよー」

ପ୍ରକାଶନ

そんなネギの頭に明日菜のハリセンが振るわれる。

「別にいいじゃない、そんなこと。今負けてるなら、今から強くなればいいのよ。それじゃコアノに何やらふんって言わせるぐうこね」

この前向きな姿勢こそ明日菜の長所であらう。そんな明日菜につられて、億劫としていたネギも改めて決意を固める。今は負けていてもこの先勝てばいい。それにリアンはもうエヴァさんに何かを教え

られることはない。考えてみればリアンはエヴァさんに魔法について教えたのはせいぜい数ヶ月だ。その程度の差はすぐに埋められる。

「弟子入り試験は一週間後ですね！」

そして元気よく別れの挨拶をしてネギはエヴァの家を後にする。

その内心でリアンが自分の成長に驚き、そして、自分が父のような偉大な魔法使いになる未来を想像しながら……

第三十一話 利用する者

SHDE リアン

「…というわけで坊やの弟子入り試験を行う」

「…似たようなやりとり春先にもありましたよね」

確かあのときは私に兄と戦えといつことでしたね。

それよりも兄が弟子入りですか。兄なりに思つところがあつたので
しううね。ですが、それを私に話すと言つことはまた、私は巻き込
まれるのでしううね。

「それでだ。その試験については千鶴に坊やの相手をしてもらひ。
試験方法は坊やと千鶴の手合させ。勝敗は戦闘不能。魔法について
は相手を直接攻撃する魔法以外の使用は良しとする」

…といふことはほぼ体術のみの試験。直ひしてしまえば喧嘩。といふより喧嘩になればいいですが。

「なぜ、千鶴さん?」

「そろそろ奴にも私たち以外の魔法使いとの戦闘を経験しておいたほうがいい。それに今の坊やはちょうどいい相手だ」

「ちよつといことうか、勝敗は明らかだとと思うのですがね…。今の千鶴さんなら学園の主戦力になつてゐる魔法先生達と勝負してもそこそこやれると思います。」

「…つまり、エヴァさんは最初から弟子など取る気はないのですね」

兄が千鶴さんに勝てる可能性はゼロに限りなく近い。今聞いた話だと抜け道もあるようですが、兄はそれに気づかないでしょう。『自分の才能に自信を持つている兄』にはね。まあ私の知つたところではあります。なるほどね…。ただ一つ気になるのは…

「兄の試験の相手をするといふことは学園長、強いては学園側に千

「千鶴さんの実力がばれますね」

「十中八九、じじいは遠見の魔法で試験を見るだろうな。しかし、だからこそ意味がある。千鶴は魔法の存在を知り、それを学んでいる。このことを知っているのは私と茶々丸、チャチャゼロとリアンだ。じじいでさえ、事件に巻き込まれたことは知っていても、魔法を学んでいるとは知らない。つまり、千鶴は今の段階ならまだ引き返せる状態にある。しかし、今回の坊やの弟子入り試験の相手をすれば、千鶴の存在はじじい、ひいては関東魔法協会の知るところとなり、これより先は引き返せなくなる」

「千鶴さんなら、この程度のこと造作もなく思いつくでしょう。

「つまり、今回の弟子入り試験は渡りに船といつわけですね。それで、千鶴さんには伝えたのですか？」

「ああ、ここに来る前に伝えた」

「千鶴さんは何と？」

「『『そんな些細なことで悩むつもりはないわ』だとさ』

「『『些細なこと…か。やはり強いですね。』』つ、心が。だからこそあの爆発的な成長があるのでしよう。

「千鶴さんが承諾したなら、私が口を挟むつもりはありません。ですが一応私も見に行きます」

「ああ、そのほうがいいだら」

研究も進展がありましたし、息抜きにもなりますのでしょう。

「それで？話は変わるが研究の方はどうだ？」

「ええ。関西呪術協会からの陰陽術の巻物おかげで進展がありました。それに私にも役立ちそうな術もいくつありましたしね」

正確には取り込んだスクナの力を有効利用するための術ですけど。

「強いて言えばあと二つかのピースが揃えば、試験薬はできそうですね」

悪魔の心臓でもあれば一気に研究も進みそなうのですがね。まあ、無い物をねだつても仕

方ありません。持ちうる手札で最高の結果を見せる。これが研究の真髄ではないでしょうか。……研究者でもない私が言つても説得力はありませんね。

なんにせよ、児には千鶴さんの踏み台になつてもらいましょうか。

第三十二話 利用される者

SIDE 三人称

「踏み込みが甘いアル！！」

「つ…はい…！」

弟子入り試験が今夜に迫った日。世界樹の近くにある小高い丘。一面鮮やかな緑の絨毯に覆われたそこでは少年と少女が組み手を行っている。言うまでもなく少年はネギ・スプリングフィールド。そして少女は古菲だ。古菲の中国拳法をネギが学んでいると言うわけである。本日は休日ということもあり、最終確認を行っているのである。

先だって、ネギの下にエヴァからの封書が届いた。そこには試験内容が記載されており、それを見てネギは、クラス（表）でも一、二を争うと思われる古菲に師事を仰いだのである。それに修学旅行においてわずかではあるが対峙したあの白髪の少年と同じ動きをする古菲の拳法であれば、彼にも対抗できるかもしないとネギは考えたのである。

利用できるものはいくらでも利用する。その心意氣は買うが、いかんせん時間が足りない。えてして武術というのはいかなる流派にせよ、一朝一夕で習得できるほど容易いものではない。基本修練を反復して行き、下地となる強靭な肉体を作り上げ、その上に技を乗せていく。ましてや中国拳法にいたっては四千年の歴史がある。四年にわたり磨き上げられた技術をたった一週間程度でものにできるはずがない。

「足への意識があのそかになっているアルよ……」

「はい……古老師……」

だからこそ、古菲は教える技を絞つて教えた。組み手は約一時間に渡つて行われた。

「よし。じゃあ、後はゆっくり体を休めるアル。相手が誰か分からぬアルが、この一週間で教えられるることは教えたアルよ」

「あ……ありがとうございました……」

純粹な技術においては達人の域に迫っている古菲との組み手に疲労困憊のネギ。二人の組み手が終わるのを見計らつて、明日菜と刹那それに木乃香が近づく。木乃香も修学旅行の一件で魔法の存在を知つた。そして木乃香は魔法について学ぶことを決めたのだ。しかし、目下、師となる人物がいなため何もできていないのが現状となっている。

「ネギ君。お弁当持つてきたえ～」

「わあ～！ありがとうございます！」

木乃香が作ってきた弁当をレジャーシートの上に広げ、五人は重箱に入った豪華な弁当を食べ始める。

「ネギはどうなの？ 合格できそつ？」

「微妙アル。相手が誰か分からぬからネ。でもネギ坊主は卑怯アルよ。一ヶ月は習得にかかる技も三時間で覚えてしまうネ。でも、この一週間でやれることは全てやつたアル。あとはネギ坊主次第ネ」

「そつか…」

「頑張ります！」

明日菜の疑問に答える古葉。そしてやる気を高めるネギ。

「やういえば明日菜もせつやんに剣を教えてもらってるんやろ？…ちはどないなん？」

「明日菜さんは元々の身体能力が高いのでこのままいけば、なかなかの強さになりますよ」

「明日菜もす」「なあ。それじゃうちだけやな。まだ何もできていのね」「な

「焦る必要はないわよ木乃香。ゆつくり自分のペースが一番よ」

かくいう明日菜も修学旅行の一件で自分の無力を痛感し、刹那に剣術を教えてもらっている。剣術を選んだのは自身のアーティファクトが剣であったが故である。

「ネギ先生、作戦はあるのですか？」

「作戦とこゝほゞではありますんが、秘策はあります」

「フツフツ。今夜を楽しみにするアルよ」

「…なんで古菲が得意げになつてゐるのよ…」

その後も五人は和氣藹々と弁当を食べ、弟子入り試験を迎える。

利用されているとも知らないまま……。

第三十二話 利用される者（後書き）

…というわけで、弟子入り試験を利用した千鶴の本格参戦イベントです。

これを書きたいが為に、エヴァへの直談判を書きました。

それと、たくさんの方の感想ありがとうございます。

余裕がなく、なかなか返信ができませんが、頂いた感想は励みになります。

今後も「」意見、「」感想をお寄せいただければと思います。

第三十四話 弟子入り試験開始

S H D E リアン

深夜零時。世界樹広場前にはエヴァさんと茶々姉妹。それに私と千鶴さんがいます。チャチャゼロさんは私の頭の上にいます。そして千鶴さんは仮面を着けてもらっています。そんな私たちの目の前には兄と明日菜さん、刹那さんに木乃香さんと古菲さんがいます。皆さん私の横の女性、つまりは千鶴さんが誰か分からぬみたいですね。仮面で顔が見えないので当然と言えば当然ですね。

「どうやら彼女たちは単純に応援のようですね。のんきなものですね。

「ネギ・スプリングフィールド。弟子入り試験に来ました！！」

やる気十分といつたところでしょうか。やる気だけではなかなかならない世の中苦労しませんがね。

「よく来たな。早速だが試験を始めるぞ。ルールは以前通達したとおりだ」

無駄話はほどほど無く、エガニアさんが兄に準備をするように促します。それに応じて、私たちと明日菜さんたちのひよひよ中間あたりに兄が進み出ました。

「…………」

対する千鶴さんもゆっくりと前に進み出で、一人は間に2メートルほどの距離を置いて対峙します。

「戦闘不能になつたその時点での終」とする。なお降参もありだ」

そして千鶴さんがその仮面を外します。

「 「 「 「 「えつ…！」」

驚く5人をよそに千鶴さんは構えます。

「それでは始め…！」

「ちよーちよっと待ってください…？」

自分の相手が3・Aの生徒ということ狼狽する兄。

「…予想通りですね」

今回の千鶴さんに仮面を着けてもらつたのは私の案です。兄の覚悟を試す意味もあります。この程度でうろたえるようでは、この世界で生き抜くことは難しいでしょう。

そんな兄とは対照的に千鶴さんは躊躇なく右の正拳突きを放ちました。

「…くえ」

うろたえながらも兄は千鶴さんの正拳突きを左手でいなしました。

「あれは八極拳?」

一瞬の手の動きだけでしたが、独特な動きだったのでおそらく中国拳法でしょうね。いつの間に覚えたのでしょうか。

「どうして那波さんがここにいるんですか!？」

あなたの相手をするために決まってるじゃないですか。それ以外に何があるのでしょう。それと、言つておきますが千鶴さんはおしゃべりしながら相手できる人ではないですよ?

「う、つ…」

ほらね。千鶴さんの蹴りが兄の腹部に見事に決まります。

「ネギ先生。やる気がないなら降参してください。相手が誰だろ？
が別にどうでもいいでしょ？」

そのとおり。ひとたび対峙したならこの世界においては情けは無用。
殺るか殺られるか。強い方が生き残り、弱い方は死ぬ。そこに正義
も悪も関係ない。

腹部を押されて唸つていた兄ですが、千鶴さんの冷淡な物言いに少
しは頭が落ち着いたようです。目が変わりました。

「契約執行180秒。ネギ・スプリングフィールドー！」

我流の魔力供給術式ですね。兄は戦いの歌の存在を知らないのでし
ょうか？戦闘における初步中の初步ですけど。攻撃呪文だけを追い
求めて、補助呪文を覚えようとしたのでしょうか？いくらな
んでもそこまで考えなしではないと思うのですが…。

魔力供給により動きが格段にあがつた。一回りよりようやく動き出した兄ですが、その動きはやはり未熟。どうやらハ極拳ともうひとつ動きがあるようですが、型が荒い。見たところ取り組み始めて間もないのでしょうか。ですが、ある程度形になっているところは才能といつやつですね。

「ふむ。カンフーか…。理屈っぽいことは坊やにはぴったりだな

確かに、兄にしては良い選択をしたと思いますね。下手に剣に走つたりしなかつた所は褒めるべきでしょう。

中国拳法の兄に対して、千鶴さんは足技中心の柔体術です。サバットやムエタイ、キックボクシングなどの型を融合し、敵の攻撃を柔術でないし、隙ができたところを多彩な蹴りで仕留めるといった感じです。実はこれが意外と凶悪な組み合せです。ほら、現に今だつて…

「ちゅうと・何よアレー?」

「す、じ…」

兄が放った肘打ちを、円を描くようにその力、兄の体を自身の右側にいなしたところを膝蹴り。飛び込んできた兄の勢いはそのまま生かし、カウンター。兄のその軽い体重故に軽く浮いたところを左回し蹴り。

驚いたことに兄はこれを防ぎましたが、これで終わりではありません。さらに半回転して右の蹴り。刹那の三段蹴り。思わず明日菜さん達も声を上げてしまいましたね。というか刹那さんまで見とれてどうするんでしょう。

「千鶴さんが一方的に押していますが、少し違和感がありますね」

兄のあの田。何かを狙っているのでしょうか、無駄に終わるでしょうね…。そもそも、魔力供給が切れるはずですから、おそらく次に来るでしょう。

SIDE エヴァ

坊やの試験が始まつたはいいが、やはり内容は一方的。千鶴が押しているのは言うまでもなく。有効打はあるか、その拳が千鶴に届くことはない。にわか仕込みのカンフーでは到底相手にならないだろう。

だが、にわか仕込みとはいへ、それなりに形になつてている部分は評価すべきだろう。その辺りは親譲りの才能というやつだらうな。実際、坊やは天才だらう。周囲が期待するのも確かに分かる。

だが、坊やは甘い。その甘さが、その才を妨げている。

千鶴が魔法を知つてから現在に至るまでおよそ一ヶ月。かたや一生

またときから魔法の存在を知り、それに親しんできた坊や。つまり、坊やには9年近い魔法に対するアドバンテージがある。通常、知識や技術といったものはそれを学んだ時間に比例して、より高度になる。

しかし現在、その経験が一ヶ月にしか満たない千鶴が坊やを圧倒している。

修行の密度は、別荘を使ったことにより、通常のそれとは次元が異なる。だが、それだけが千鶴の急成長につながっているわけではない。

千鶴と坊やとの違い。さらにもう一つならリアンと坊やの違い。それは何か？

それは『覚悟』。

この一言に尽きる。千鶴の覚悟はいまいちはつきりとはしないが、それでも奴には自分の目的のためなら、友ですら敵に回すだろう。現状がそれを如実に示している。元々、千鶴の坊やに対する印象は『世話のやける子供』だそうだ。自身、保母のボランティアをしているからこそ、その答えだろう。

しかし、現在、千鶴はその子供である坊やを躊躇無く攻撃している。弱い者いじめともとれるような光景が私の眼前には広がっている。おそらく本人もそのことを自覚しているだろう。だからといって攻撃の手をゆるめることはない。千鶴の『覚悟』に関しては私の杞憂に過ぎなかつた。これなら十分にやつていける。

リアンについては私が口を出す必要はない。リアンはその目的がはつきりしていて、なおかつそれを害するなら、例え肉親でも排除するだろう。

それに、rianは人を殺した経験があるはずだ。伊達に600年も生きてはいない。『踏み越えた者』と『そうでない者』の差ぐらいわかる。

はつきり言おう。『踏み越えたもの』つまり『人を殺した者』は強い。一線を踏み越え、殺しの快楽におぼれる者もいる。その重責に潰される者もいる。だが、人を殺して、なおかつ自身を見失わないのは『強者』だけだ。あの年齢で、あそこまでの魔法に関する独自理論やそれを実行する技術は身に付くものではない。世間一般に優秀と評される魔法使いでも生涯かけても無理だろう。

それを成したrianは、それこそ血反吐を吐くような努力をしたのは優に想像できる。

坊やも努力しているのは間違いないが、それに掛ける執念の差が一人の差となつて現れている。

坊やは偉大なる父の背中・つまり幻想を追い求め・リアンは右化の解呪という現実を求めた。

抽象的でしかない目標と、具体的な目標。言つまでもなく後者の方がやるべき事、求めるべきものがはつきりしているのは言つまでもない。

……いろいろ言つては見たが、結局、坊やは現状のままではいくら努力しようがリアンには敵わない。追いつくことはおろか、その足下すら見えないだろ？。

『何の』為に強くなるか？

『みんなを守る為に強くなる』とか考えている現状ではなおさらな。

しかし、わざわざこんな場を設けてやるあたり、私も丸くなつたものだ。

まあ暇つぶしにななつたか……。

SHIDE リアン

「ほひ…」

「やつた！」

「上手いアル！！」

兄の我流魔力供給のリミットが迫る中、兄の渾身の一撃が千鶴さんに決まります。兄の狙いはカウンター。順を追って説明すると、これまでのパターン通り、兄の攻撃をいなしした千鶴さん。当然攻撃後の隙を狙つて蹴りを放ちますが、それは兄の誘いでした。これまでの攻撃から千鶴さんのパターンともいいくべきそれを見極めていたらしく、わざと隙を見せ、そこに攻撃を誘導したのです。どんなに速い、強力な攻撃でも来る場所が分かつていれば怖くはありません。兄は千鶴さんの蹴りを捌き、さらに踏み込み腹部に渾身の肘打ち。技の名前は知りませんが、結構威力の高い技なのでしょう。

わざと隙を作つて攻撃を誘導するというテクニック。これはなかなか高等な技術です。たつた一瞬とはいえそれを成したところを見ると、やはり兄は才能の固まりなのでしょうね。そんな兄の攻撃を見て、思わず歓声をあげる明日菜さんに、おそらくこれを教えた古菲さんもガツツポーズをしています。それに一瞬とはいえ兄の表情もゆるみました。

……ですが甘い。戦闘時は常に冷静でなければならない。この程度で一喜一憂するとこり見ると、やはり自覚が足りない。京都の湖畔でもそうでした。目の前の敵から目を離すなどいいたい。その一瞬の注意の散漫が死に直結する。本人達は決まつたと思つているようですが、この程度の攻撃、受けこそしましたが今の千鶴さんはたいしたダメージはないでしょう。

「……」

「「「ネギ（先生・坊主）！？」」「」

思つた通り動きこそ止めましたが特に痛がる様子もなく千鶴さんは反撃をしました。

「…油断していました。これからは私も全力でお相手します」

確かに千鶴さんは兄のペースに意図的に合わせていました。それほどまでに現状における兄と千鶴さんの差は明らかです。しかも我流の魔力供給もさきほどの一撃を境に切れてしまいました。もはやそこには絶望的な差しかありません。

これまで受け一辺倒だった千鶴さんが初めて攻めに転じます。まずは左大腿部へのロー・キック。ここにまともに衝撃が来ると力が抜けるので。

「あハッ！」

力が抜け崩れ落ちる兄の体に接近して左肩胛骨あたりをその顔面にぶつける当て身を放つ。ただの体当たりと思う事なれ。すべての動的エネルギーをそこに収束させて放った千鶴さんの当て身は細身の兄を大きく吹き飛ばし、向かいの広場の壁に衝突させました。収束させたエネルギーを『面』で放つたが故に大きな外傷こそ生じないが、その衝撃は脳を激しく振動させ、典型的な脳震盪を引き起します。

「…坊やの負けだ！」の勝負千鶴の勝利とする

壁からずるりと落ちる、意識がない兄。誰が見ても続行不能ですね。これで千鶴さんの勝利となり兄の弟子入りは叶いませんでした。慌てて駆け寄る兄の応援に来ていた四人。それを尻目に千鶴さんはこちらへと来ます。しかし、千鶴さんも強くなつたものです。こうしてみるとその成長がよく分かりました。

「さて、出できたらどうですか？」

…気づかれてないとでも思つていいのでしょうか？案の定試験開始の前から『一人』の私たち以外の視線がありました。

「…………」

無言で広場に現れたのは高畠教諭。予想通りといつたところでしょうか。一つの視線の一つは高畠教諭。もう一つは学園長の遠見の魔法でしょう。何か言いたそうな顔をしていますが知つたことではありません。まあ高畠教諭が話したい内容は千鶴さんのことでしょうしそれに関して情報を与えるつもりは全くありません。この場で見た

千鶴さんの力の一部を見て、彼女の力を想像するといいでしよう。今回は兄が相手だったので使っていない技もありますし、千鶴さんの本当の武器は先ほどの蹴り技ではありませんしね。

「千鶴さんお疲れ様でした」

「ふふふ、そんな疲れてないわよ？」

「それは重畠。では用事も済みましたし帰りますか」

エヴァさんも最後に兄を一瞥して帰路についたようです。あの感じだと興味も失せたといった感じでしょうか。確かに才能の片鱗こそ見れましたが、エヴァさんの興味を引くレベルでは無かつたようですね。とはいえ、今回の試験を通じておそらく学園長が兄の師となる人物を用意するでしょう。私ならともかく、ほんの一三ヶ月前までは一般生徒だった千鶴さんに負けたのですから。ここいらで上手く舵取りをしないと兄は必ず暴走するでしょうね。となると、師となるのは誰でしょうか？まあ私には関係ないです。

「では高畠先生。また明日」

強くなるのもいいですが、兄にはもっと教師の仕事をこなしてもら

いたいですね。私たちは『教師』をしに麻帆良に来たのですから。決して『強く』なるために麻帆良に来たわけではありませんしね。

第三十六話 思惑

SIDE ???

さて、今私の手元にはある一人の少年の資料があります。そう。かの有名なサウザントマスター、ナギ・スプリングフィールドの息子達の資料です。メルディアナ魔法学校での成績を含めて全てがあります。かの麻帆良学園に潜り込ませている私の部下からまた新しい報告書が届いたので、現在それを見ているところです。

本来であれば今頃あの二人はメガロメセンブリアで修行に励んでいるはずだったのですが、あのメルディアナの爺と麻帆良の妖怪が上手く事を運んだらしく寸前で修業先が現在の麻帆良に変更になりました。：当初は腹立たしいと思っていましたが、今となってみれば感謝すべきですね。私としたことが悔っていました。私のプランとしては才能にあふれた優秀な兄を全面に押しだし、魔法の使えない落ちこぼれの弟の方は英雄の息子というネームバリューにつられてくる有象無象の餌とするつもりでした。

しかし、仮に当初の予定通り一人がメガロメセンブリアに来たとし

て、私の考え方通りに事を運ぼうとしたなら身を滅ぼしていたでしょう。兄については資料通りの人物像でしたが、弟の方は規格外でした。魔法が使えないというハンデをものともしない実力。そして知識。調査員の報告によると彼はかの闇の福音すら味方につけているとのこと。…間違いなく世間も知らない子供と思つていてはいけない相手でした。

となると、私も少し考えを改めなければなりません。予定通りオースティアの総督の席は手に入れました。オステイアの『人間』を救う算段も立っています。しかし一番重要な部分が未だ決めかねています。いずれ訪れる崩壊の時。その時に旗頭となるのは兄か、それとも弟か…。

麻帆良の調査員の報告によると、兄は才能にあふれているが理想主義であり子供らしい部分も多々あるとのこと。対して弟は魔法こそ使えないものの、現実主義でありその実力はかなり高い可能性がある。また現実主義な部分も多く見られ、9を救うために1を切り捨てる覚悟もあると思われること。兄が『偉大な魔法使い』を目指すのに対し、弟はその目的が分からぬが少なうとも『偉大な魔法使い』を目指すつもりはない。

：扱いやすいのは間違いなく兄の方。しかしその甘いとも言える価値観から全ての人間を救うとか言い出しそうですね。弟はその心配はないものの、その腹に何を隠しているのかわかりません。なかなか

か頭も回るよつですしね。

兄は別にしても弟に關しては資料だけでは判断がつきませんね。これは一度会って、私自身が確かめる必要がありますね。…とすればいつがいいか。そういえば近く麻帆良学園で大きな祭がありましたね。確かにあの時期は議会も閉幕していますし、休暇という名目で簡単に旧世界に行けますからよつどいい。そのときに見定めるとしますか。

「議員。よひしこでしょつか?」

「ああ、構いませんよ」

思考に熱中しきれて気がきませんでしたね。

「至急の「J報告ですが、爵位級の悪魔が召喚されたとの連絡が旧世界の調査員の一人から報告がありました」

「まつ…続けてください」

「はい。場所は旧世界の日本。おそらく目的地は麻帆良学園かと…」

「わかりました。下がつて結構ですよ」

「失礼します」

麻帆良学園に向かう爵位級の悪魔。その目的は分かりかねますがち
ょうどいいかもしません。彼ら兄弟の故郷を襲つたのも悪魔です
し、今回の悪魔がどんな行動をするにせよそれを知つた彼らが何か
行動を起こすかもしませんね。これは一部始終を監視させましょ
う。何か分かるかもしません。

第三十七話 悪魔襲来

SIDE リアン

兄の弟子入り試験から三週間が経過しました。あの後兄は、学園長が紹介した図書館島の司書に弟子入りして修行に明け暮れているそうです。その司書の名前はクウネル・サンダースとか言っているそうですが、実際はアルビレオ・イマ。かの紅き翼の一員。つまり私の父の友人らしいです。兄はこのことを知らないみたいですが、気になつて調べてみたら一発でした。今ではその師匠の元で兄は毎日修行に励んでいるとのこと。放課になると最低限の仕事をのみこなすとすぐにいなくなります。まあ全く仕事をしないよりかはマシなのでいいですけど。

それにもしてもここ麻帆良に英雄の一人がいるとは思いませんでした。高畠教諭は単純に大戦期紅き翼に同行していただけですが、アルビレオ・イマは違います。最前線で戦つた英雄です。そんな人物がなぜこんな旧世界の辺境の地にいるのか。ましてや西にはこれまた英雄の一人、近衛詠春もいます。極東の島国日本にいるメンツとしては大層な顔ぶれです。…日本に何かあるのでしょうか？いやこの場合は麻帆良ですね。近衛詠春の場合は実家が京都にあるので違和感はないんですけど、アルビレオ・イマは違います。わざわざ戦後の

療養？にこんな靈地のど真ん中、図書館島の地下なんかにいる必要はありません。

：まあ考えてみても所詮私には関係ないのでどうでもいいでしょう。関係ないと言えば、なんでも兄と明日菜さんが喧嘩していましたね。原因は知りませんが、その仲直りに乗じて雪広さんが南の島に招待しますわとか言ってきましたけど、そんな時間があるなら勉強に仕事をしろと言いたいです。当然私は行きました。興味も無いですね。私が行かないと言つこともあつて千鶴さんも麻帆良にいました。

あと、最近で特筆すべき事と言えばまた兄が魔法バレをしたことでしょうか。綾瀬さんにばれたようですね。しかも今では兄が綾瀬さんを始め、何人かの生徒に魔法を教えているようです。京都でんな一件があつたあとだというのに死なせたいのでしょうか？

「…対象の外面からのアプローチだけではやはり不十分だな」

結局のところ私は私の目的を第一に考えるべきですね。首を突っ込むつもりはありませんが、下手に近づいて巻き込まれるのはごめんですね。

「つまり、内面からのアプローチも必要といつわぬですね」

外は梅雨の時期に入ったところともあり激しい雨が降っています。そのせいかどうかは分かりませんが今日は珍しくエヴァさんが研究を手伝ってくれています。

「では、治療魔法のように対象の自己治癒力を増進させる術式を組み込み、外部からの解呪に合わせて、術式により強化した対象の自己治癒力で外と内の両方から解呪を促しましょう」

最近は研究の進み具合も絶好調といったところでしょうか。

「むむ……」

「どうかしましたか?」

「何者かが学園に侵入した」

ふむ…。『Jの時期に』、しかもまだ明るいこの時間での侵入者といつことは西の者ではありませんね。となると誰でしょう？

「『Jの感じ』、人間ではないな」

さすがはエヴァさん。おそらく魔力の波長から判断したのでしょう。私ではそこまでの探査はできません。単純に知っている魔力なら誰か判断できますが、今のエヴァさんみたいに初めて感じる魔力から種族を割り出すのはできません。こういったところは実に参考になります。

人間ではないなら式紙か召喚された鬼の類ですかね…。

「『Jの感じは… 悪魔か。 しかも『J』いつは爵位級だな』

「…」

……やはり今日はツイですね。日頃神という者に感謝なんてしたことないんですけど今日は感謝したくなりますね。

SIDE 三人称

「学園長つーー！」

現在学園長室は騒然としていた。つい先ほど侵入者が現れたのである。別にこれだけなら普段の警備通りに行動すれば問題ないが今回は違った。侵入者が爵位級の悪魔だからである。通常の下級悪魔であるなら魔法先生はもちろん魔法生徒でも十分に相手にできるが、爵位持ちの悪魔、つまり上位悪魔となれば文字通り次元が違う。個体数はそれほど多くはないが一体一体の持つ力は強大なものである。いかに麻帆良学園の精銳といえども真正面から戦えるのは数人しか

いない。対処に苦慮する学園側の都合など関係なく侵入者はそのまま的を遂行すべく行動する。

「つい先ほど女子中等部3・Aの生徒が数名攫われたとのことです！あと、ネギ先生と黒髪の少年の一人がそれを追っています！」

「…………」「…………」

「ここで恐れていた報告がきた。学園側が最も憂慮していたのは一般人が巻き込まれることとネギが事件に巻き込まれることである。リアンならまだしもネギはまだ爵位級の悪魔と戦える実力はない。」

「侵入した悪魔は現在世界樹前広場の音楽ステージにいる模様です」

「学園長……」

学園長室に集まつた魔法先生達が強張つた表情で縋るような視線を向ける。

「高畠君とガンドルフィー二君、それと神多羅木君と葛葉君はすぐ

にでもネギ君を追いかけるんじや。彼と一緒にいる黒髪の少年は保護せよ」

呼ばれた面々はすぐに学園長室を出て行く。

「明石君たち情報班はこのことが外部に漏れぬよう情報統制を頼んだぞ。瀬流彦君は学園の警備を頼んだ。決して外に悟られるでないぞ」

学園長室が慌ただしくなり、各々が自分の役目を果たすべく動き出しが彼らは遅かった。

所変わつて世界樹前広場の音楽ステージ。件の悪魔はネギと黒髪の少年犬上小太郎（どうやら彼は西から脱走してきたようだ）と対峙していた。ステージ上には水牢に捕らえられた明日菜・木乃香・刹那・のどか・夕映・古菲・和美とカモがいた。奇しくもネギに関わつて魔法という世界に踏み込んだ者達である。そして其れを見張る

「三回のスライム。

「ネギ君、君は本気で戦っているのかね？」

侵入した悪魔はヘルマン。伯爵の爵位を持つ悪魔である。先ほどからネギ達は攻め続けるもののヘルマンは全く動じない。むしろ攻め続けているにも関わらずダメージを蓄積しているのはネギ達の方である。だからこそヘルマンは問いつ。少なからず今回の仕事を楽しみにしていたが故の落胆から。

「そここの黒髪の少年は実にいい。彼は強者との闘争を望んでいる。だからこそ実際に楽しそうに戦う。君は何のために戦うのかね。捕らえられた彼女達を救うためかい？偉大なる魔法使いになるため？それとも……自分の村を襲つた仇を討つためかい？」

ヘルマンの最後の言葉を聞いてネギが目を見開く。囚われの少女達も同様だ。

「どうやら君は自分の行動原理を自覚していないようだ。ならば私がそれを教えてあげよう

途端、其れまで人間の姿をしていたヘルマンの肉体が悪魔の其れへと変化する。突然の変化に明日菜達は驚愕する。ネギも同様の反応かと思ったが彼は違っていた。むしろ顔色が悪くなっていた。

「思い出したようだね。私が君の村を襲つた悪魔だ。あのとき召喚された悪魔の中でも数少ない爵位級のね」

ネギの脳裏には六年前の光景がフラッシュバックされる。鮮明に思い出されるそれはネギの中の『何か』を外した。

「アアアアアアアアアツツツツ！……」

突然膨れあがるネギの魔力。あふれ出した膨大なそれは周囲の暴風を巻き起こす。そしてこれまでとは比べものにならない速度でヘルマンの懷に潜り込む。

「……」

油断していたヘルマンの腹部に初めて攻撃が当たった。型も技術もない只のパンチ。しかし、ネギのあふれ出した魔力がそれをついた攻撃にする。

「フハハハハハツ！ それだネギ君。私はそんな君が見たかったのだ
！！！」

喜びの感情を爆発させるヘルマン。しかし明日菜達や小太郎は今日一番の驚きを感じていた。

「ちょ、何よアレ！？」

「あれは暴走だ！！オーバードライブ兄貴の保有魔力は膨大だ。その膨大な魔力が暴走して兄貴の身体能力が異常に高まっているんだ！！—いけえー兄貴！！！」

「ですが、あの戦い方では…！」

現在ネギが押しているように見える。しかし、この面々でこと戦闘

に関しては一日の長がある刹那は危うさを感じていた。同時にネギの変貌に驚いていた小太郎も刹那と同じ危機感を抱く。

「素晴らしい！…ネギ君、やはり君はあのサウザンドマスターの息子だ。次代の英雄の原石だ！…だが…」

ネギに吹き飛ばされたヘルマンだが、空中で即座に体制を整える。そんなヘルマンにネギは真正面から突撃する。それを見たヘルマンはニヤリと笑みを浮かべる。

「そんな原石が輝きを失う瞬間を見るのが私の楽しみなのだよ！…」

ヘルマンの口が大きく開きその口から光線が吐き出される。石化の光線である。刹那や小太郎が危惧していたのはこれである。今のネギの攻撃は単調すぎるのである。大きすぎる力を手にしたが故に、その力で押し切れると思っているのか、真正面からしか攻撃していないのだ。だからこそ簡単にカウンターを喰らってしまう。

「「「ネギ（先生、坊主）…？」」

悲鳴に近い叫び声を上げる明日菜達。あのタイミングでは素人でも直撃すると理解できる。しかし、唯一自由に動けて、危惧していた小太郎が直前でネギに追いつき、そしてネギを地面に向かって引きずり落としたことにより、ヘルマンの放った光線はネギを、「一人を捉える」とはなかった。

「……！」んの馬鹿野郎……！」

地面上に仲良く墜落したネギに小太郎は拳骨と罵声を浴びせる。ネギも自分があと一歩で下手をすれば死地に踏み込むところだったのを理解したようだ。しかし、小太郎に殴られたことが納得できないのか、「一人で醜い言い争いを始めた。しかし、それもすぐに終わる。不機嫌さをにじみ出したヘルマンの存在で。

「まさか君、」ときにはるかに邪魔をされるとは思わなかつたね……。私の楽しみを邪魔してくれた責任はどうともうつよ」

ヘルマンから身も凍るような殺気が放たれる。この場においては圧倒的強者のそれは、はるか格下のネギ達の動きを止めることは十分だつた。

「あの黒髪のガキ終わったな」

「ヘルマンのおっさんの石化は強力だからな。腕の一本ぐらいは永久石化かもしだねえな」

水牢を見張るスライムうち、おそれく男性体であろう「匹」が語る。それを聞いた明日菜達の顔色はいつそ悪くなつた。

「覚悟はいいかい？」

一步、また一步。ゆつたりとした足取りでネギと小太郎に近づくヘルマン。殺氣にあたられ筋肉が硬直して動けない二人は死刑執行を待つ囚人のようであった。小太郎は何とか逃げようと試みるも、本能的に敗北を悟ってしまったが故に足がまったく動かないのである。

「では黒髪の君には退場してもうまい」

ヘルマンが小太郎に向かつて光線を放とうとしたそのときだつた。

「ではあなたも退場してもらいましょうか。永遠にね……」

突然、背後から聞こえた声に振り向こうとした瞬間、ヘルマンの胸から腕が飛び出した。しかもその手には脈打つ『心臓』が握られていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0328q/>

魔法先生ネギま！～落ちこぼれと呼ばれた英雄の子～

2011年10月7日20時32分発行